第一條　獸類化製所トハ其筋骨皮爪肉臟腑等ヲ化製シ營業スル所ヲ云フ

第二條　化製所ヲ設置セントスルモノハ其場所（國郡區町村字番號）ヲ記シ郡區役所（郡ハ戸長ノ奥書ヲ受ケ）ヲ經テ出願許可ヲ受クヘシ

第三條　化製所ハ國縣道路並人家及ヒ河川（飲料水）ヲ距ルコト貳町以上タルヘシ

第四條　化製所ニハ左ノ雛形ノ表札ヲ掲クヘシ

免許	獸類化製所	竪三尺
	何郡區何町村何番地何ノ誰	横八寸

第五條　化製所設置願書ニハ左ニ掲クル各項ノ書類ヲ添付スヘシ

一　化製所ノ建家敷地ノ坪數窓戸ノ面積三和土土間板張等ノ區別ヲ記シタル圖面

二　化製所ヨリ國縣道路並人家及河川（飲料水トナスヤ否ヲ記スヘシ）ノ實測距離ヲ記シタル見取圖

三　近傍人民ノ承諾書

但人家ヲ距ル三町以上ハ之ヲ要セス

四　地主貸渡證書

但出願人ノ所有地ナルトキハ願書ニ其旨ヲ記スヘシ

五　化製手續書

六　防臭藥及遣方量目ヲ記シタル書面

七　汚水穢物ノ處置方法書

第六條　化製所設置許可ヲ受ケタルトキハ指令書ヲ握手シタル日ヨリ十日以内ニ願書指令ノ寫書ヲ添ヘ所轄警察署又ハ分署ニ屆出ヘシ

第七條　斃獸及肉臟腑骨皮（乾枯物ヲ除ク）等ヲ運搬スルトキハ露出セサル樣

適宜莚包等ニナスヘシ

第八條　化製所ニ於テ斃牛馬ヲ解剖スルトキハ斃牛馬取締規則第二條第六條ヲ遵守スヘシ

第九條　既ニ許可セル化製所ト雖不適當ト認ムルトキハ之カ改正又ハ廢止テ命スルコトアルヘシ

第十條　本則第二條ニ違背シタル者ハ輕罪ノ刑ヲ以テ罰セラレ第六條第七條ニ違背シ又ハ第四條ニ違背シ督促ヲ受クルモ尚ホ從ハサルモノハ刑法第四百二十六條第四項ニ據リ罰セラルヘシ

第十四章　中毒

第一項　中毒

内務省　達乙第八十八號　明治十一年十二月二十日

各地方管内ニ於テ飲食物之中毒及藥物之誤用等ニヨリ死ヲ致ス者有之候節ハ其毒物之品名中毒之症狀並ニ死者ノ住所姓名等詳細取調其都度當省衛生局ヘ通報可致且毒物之成分判然セサル分ハ現品相添可差出此旨相達候事

本縣　布達第八號　明治十七年二月二十一日

中毒屆出規則ニ左ノ通相定ム但明治十二年本縣甲第廿五號明治十三年本縣甲第百三十九號布達同年本縣乙百四十三號達ハ此規則施行ノ日ヨリ廢止ス

中毒屆出規則

第一條　飲食物或ハ藥物誤用ニヨリ中毒者アルトキハ死ニ至ルト否トヲ問ハス直ニ口頭若クハ筆記ヲ以テ最寄警察署又ハ分署及ヒ戸長ニ屆出ツヘシ

第二條　本則ニ違背シタルモノハ刑法第四百二十六條第四項ニ據リ處分ス

附錄心得

第一　中毒者アルノ届出ヲ受ケタル戸長ハ直ニ該家ニ臨ミ治療醫ノ診斷ヲ問ヒ中毒ヲ以テ答フルキハ其概略ヲ記シ速ニ郡區役所ニ申報スヘシ

第二　前項ノ場合ニ於テハ其死ニ至ルト否トヲ問ハス戸長ニ於テ其始末ヲ詳記シ醫證並ニ現品ヲ添郡區役所ヲ經テ縣廳ヘ届出ツヘシ

第三　中毒者アルノ報ヲ受ケタル郡區役所ハ速ニ實地ニ臨ミ郡區醫町村醫若クハ治療醫ノ診斷ヲ尋問シ精々審査ヲ加ヘ當時ノ景況取調書ヲ作リ戸長ノ届書一同之ヲ縣廳ヘ進達スヘシ

但毒物現品腐敗性ニ屬スルモノハ總テ「アルコール」（アルコールヲ用ユヘシ）ニ浸漬シ原質變敗ノ憂ヲ防カシムヘシ

第十五章　鑛泉

第一項　鑛泉附浴湯

本縣　縣令第一號　明治廿三年一月十日

鑛泉取締規則左ノ通相定ム

但明治十五年第廿四號布達ハ廢止ス

鑛泉取締規則

第一條　鑛泉ヲ發見シ其分析試驗ヲ乞ハント欲スルモノハ鑛泉湧出地ノ郡市町村名字地番地目ヲ記シ第十六條ニ依リ採酌シタル現泉ヲ添ヘ所轄市町村長ノ奥書ヲ受ケ町村ハ郡役所ヲ經テ縣廳ヘ出願スヘシ

第二條　鑛泉ヲ發見シ其分析試驗ヲ他ノ試驗所又ハ化學者ニ受ケタルトキハ鑛泉湧出地ノ郡市町村名字地番地目並其試驗所ノ資格又ハ化學者ノ住所氏名ヲ記シ試驗成績書寫ヲ添ヘ所轄市町村長ノ奥書ヲ受ケ町村ハ郡役所ヲ經テ縣廳ヘ届出ツヘシ

第三條　鑛泉浴場ヲ設置セント欲スルモノハ其浴場ヲ設置スル地ノ

郡市町村名字地番地目ヲ記シ左ノ各項ノ圖書ヲ添ヘ所轄市町村長ノ奥書ヲ受ケ町村ハ郡役所ヲ經テ縣廳ヘ出頭許可ヲ受クヘシ

但他ノ鑛泉ヲ採酌シテ浴場ヲ設クルモノモ亦本條ニ準ス

一　地主承諾書

但願人ノ所有地ナレハ其旨ヲ願書ニ記スヘシ

二　浴場周圍一丁以内ノ居住者戸主及地主家主ノ承諾書

三　浴場周圍凡五丁以内詳細ノ見取圖

四　浴場建物並下水路詳細ノ圖

但建物圖ハ平面兩側前面後面ノ五種ニ區別スヘシ

五　鑛泉ヲ採酌スル爲メ井戸ヲ設クルトキハ其搆造ノ明細書

六　火力ヲ用ヒ鑛泉ヲ煖ムルモノハ其裝置詳細ノ圖

七　分析試驗ノ成績書並ニ醫治効用及入浴若クハ飲用心得書

八　他ノ鑛泉ヲ採酌シテ浴場ヲ設クルモノハ鑛泉所在地ノ郡市町村名並鑛泉名ヲ記シタル書及泉主ノ承諾書

第四條　二人以上ノ共有ニ係ル浴場ハ取締上一切ノ責ニ任スル爲メ管理者ヲ定メ所轄町村長ノ奥書ヲ受ケ其氏名ヲ郡市役所及所轄警察署又ハ分署ヘ届出ツヘシ

第五條　鑛泉浴場ニハ試驗成績醫治効用入浴若クハ飲用心得書ヲ掲示スヘシ

第六條　十歳以上ノ男女混浴ヲ爲サシムヘカラス

第七條　鑛泉ヲ採酌シテ浴場ヲ設クルモノハ日々新泉ト交換スヘシ

第八條　鑛泉浴場ニハ身體洗淨用トシテ尋常ノ湯水ヲ備ヘシムルコトアルヘシ

第九條　鑛泉浴場ノ門戸ニハ左ノ式ニ從ヒ標札ヲ掲クヘシ

竪曲尺三尺五寸

木製

免許

鑛泉浴場

何郡市何町村

營業人　氏名

横曲尺一尺三寸

第十條　飲用ノ爲メ鑛泉ヲ販賣スルトキハ第十六條ニ依リ採酌シ其容器ニハ鑛泉地名鑛泉名試驗成績醫治効用飲用心得書ヲ貼付スヘシ

第十一條　鑛泉浴場ノ構造ハ左ノ各項ニ從フヘシ

一　浴場ニハ換氣窓ヲ設クヘシ

二　浴場ハ男女ヲ別チ其分界ハ適宜仕切ヲ爲スヘシ

三　浴場ノ下水路下水溜厠圊芥溜ハ明治廿年縣令第百廿八號規則第二章ニ定ムル構造法ニ從フヘシ

第十二條　火力ヲ用ユル爲メ火竈烟筒ヲ設クルモノハ明治十六年第三號布達規則ノ各條ニ從フヘシ

第十三條　鑛泉浴場ハ家屋ノ内外共常ニ清潔ナラシムヘシ

第十四條　許可ヲ得タル鑛泉浴場ノ建築工事ヲ竣ヘタルトキハ其旨ヲ記シ所轄市町村長ノ奥書ヲ受ケ町村ハ郡役所ヲ經テ縣廳ヘ屆出撿査ヲ受クヘシ

但撿査ノ上許可ヲ得ルニ非サレハ公衆ノ入浴ニ供スルヲ得ス

第十五條　鑛泉營業者廢業死亡若クハ浴場ヲ賣買讓渡シタルトキハ其旨ヲ記シ所轄市町村長ノ奥書ヲ受ケ町村ハ郡役所ヲ經テ縣廳ヘ屆出ツヘシ

第十六條　鑛泉ヲ採酌スルトキハ其容器（硝子瓶又ハ新シキ陶器）ハ灰又ハ酸類ヲ混シタル砂ヲ適宜ニ投入シテ充分振蕩シ更ニ鑛泉ヲ以テ數回洗淨

シ然シテ后鑛泉ヲ填タル新シキ「コルク」ヲ以テ栓塞（栓ニハ木又ハ藥ユヘカ若クハ紙等ヲ用ラス）シ封蠟又ハチヤンニテ瓶口ヲ固封スヘシ

但試驗用ニ供スルモノハ其泉量凡五升以上タルヘシ且之ニ鑛泉ノ地名及差出人ノ住所氏名並採酌年月日ヲ記シタル木札ヲ緊繫スヘシ

第十七條　本則ニ違背シタルモノハ違警罪トナシ左ノ區別ニ依リ處罰スベシ

一　第三條第十條第十一條第十四條ニ違背シタルモノハ二日以上五日以下ノ拘留ニ處シ又ハ五拾錢以上壹圓五拾錢以下ノ科料ニ處ス

二　第六條ニ違背シ又ハ督促ヲ受クルモ第二條第四條第五條第七條第八條第九條第十三條第十五條ニ從ハサルモノハ五錢以上五拾錢以下ノ科料ニ處ス

本縣　縣令第三號　明治二十三年一月十日

從來許可ヲ得タル鑛泉浴場ニシテ本年縣令第一號鑛泉取締規則第六條第八條第十一條第十三條ニ抵觸スルモノハ前記ノ四條ニ限リ明治二十四年十二月三十一日迄實施ヲ延期ス

但規則ニ基キ改造ヲ爲シタルトキハ第十一條ニ係ル工事ハ第十四條ノ手續ニ準シ縣廳ヘ第十二條ノ工事ハ所轄警察署又ハ分署ヘ届出檢查許可ヲ受クヘシ

本縣　縣令第六十號　明治廿一年四月二十五日

湯屋營業取締規則別冊之通リ相定メ本年七月一日ヨリ施行ス

但本則ハ先ツ市街ニ實施ス

（別冊）

湯屋營業取締規則

第一條　本則ニ於テ湯屋ト稱スルハ洗湯及藥湯ヲ云フ

第二條　湯屋ヲ營業セントスル者ハ搆造圖面ヲ添ヘ所轄警察署又ハ分署ニ届出認可ヲ受クヘシ其搆造ヲ變更セントスルトキモ亦同シ

第三條　營業中ハ店頭ニ左記雛形ノ看板ヲ掲ケ夜間ハ標燈ヲ以テ之ニ代フヘシ

洗湯又ハ藥湯	竪二尺五寸
何郡區何町村何番地　何某	横八寸

第四條　廳業代換改氏名若クハ賣買讓與シタルトキハ（賣買讓與シタルトキハ双方連署）三日以内ニ其旨所轄警察署又ハ分署ニ届出ツヘシ

第五條　湯屋ノ搆造裝置ハ左ノ各項ニ遵フヘシ

一　浴場ハ板張敷石若クハ三和土トナシ汚水ノ溜滯又ハ地中ニ滲透スルヲ防ク設ケシムヘシ

二　浴場ハ男女見透サヽル樣嚴ニ區畫ヲ爲シ仍ホ浴客ノ看易キ箇所ニ之ヲ標示スヘシ且浴客室（衣類ヲ脫着スル場所ヲ云フ以下皆之ニ倣フ）ノ如キモ成ルヘク男女ノ區別ヲ爲スヘシ

三　浴場及浴客室ハ戸外ヨリ見通サヽル樣適宜ノ裝置ヲナスヘシ

四　浴客室ニハ衣類ヲ紛雜セサル樣始末シ得ヘキ戸棚又ハ其他適當ノ裝置ヲ爲スヘシ

第六條　湯屋營業者ハ前條搆造裝置ノ外煙筒火竈幷ニ汚水排泄等ニ關シテハ各其規則ニ從フヘシ

第七條　浴場及浴客室幷ニ浴具等ハ清潔ニ掃除若クハ洗滌スヘシ

第八條　浴客ノ衣類其他ノ物品ハ盜難紛失等ノ虞ナキ樣注意保護スヘシ

第九條　男女混浴セシムヘカラス

但十歳未滿ノ幼者ハ此限ニアラス

第十條　左ノ各項ハ浴客ノ見易キ ケ所ニ掲示スヘシ

一　湯錢

一　男女混浴禁制タルコト

但十歲未滿ノ幼者ハ此限ニアラス

一　入浴中ハ放歌高聲ヲ發ス可ラサルコト

一　湯壺內ニ於テ洗粉石鹼糠類ヲ使用スヘカラサルコト

第十一條　煙筒火鉢ノ傍ラニハ常ニ薪炭其他燃質物ヲ置クヘカラス

第十二條　烈風ノ時ハ勿論平常ト雖モ火災ノ虞ナキ樣篤ク注意スヘシ

第十三條　夜間ハ十二時限停業スヘシ

第十四條　遺留品アリタルトキハ卽時ヨリ三日間見易キ個所ニ現品又ハ其品名ヲ記載シ掲示スヘシ若シ物主知レサルトキハ遺失物取扱規則ニ從ヒ相當ノ手續ヲナスヘシ

第十五條　浴客中擧動怪シキ者アリト見認ルトキハ速ニ警察官吏ニ密告スヘシ

第十六條　本則ニ違背シタルモノハ違警罪トナシ左ノ區別ニ據リ處罰ス

一　第二條第十四條ニ違背シ又ハ制止ヲ肯セス若クハ督促ヲ受ケテ第五條第十三條ニ從ハサル者ハ一日已上三日以下ノ拘留ニ處シ又ハ拾錢以上壹圓貳拾五錢以下ノ科料ニ處ス

二　第四條第九條ニ違背シ又ハ制止ヲ肯セス若クハ督促ヲ受ケテ第三條第七條第十條第十一條ニ從ハサル者ハ五錢以上五拾錢以下ノ科料ニ處ス

附則

第一條　本則第五條ハ當分ノ間三等市街ニ限リ實施セス

第二條　實施地ニ在ル從來ノ營業者ハ本年七月十日以內ニ本則第二

條ニ從ヒ届出ッヘシ若其構造適合セサルモノハ檢査ノ上明治二十二年三月三十一日迄ノ間ニ於テ相當改修猶豫ノ期限ヲ與フルコトアルヘシ

第十六章　興行場

第一項　興行場

本縣縣令第八十一號　明治二十一年六月七日

明治十五年第八十三號布達劇場興行場設置規則左ノ通改正ス

興行場設置規則

第一章　定劇場

第一條　定劇場ヲ設置セント欲スルモノハ建物構造並ニ四圍詳細ノ圖面ニ敷地ノ坪數町村名字番號及第六條ノ距離ヲ記入シ四方百間以内ノ地主家主及居住者戸主承諾書ヲ添ヘ所轄戸長（區ハ區長以下之ニ倣フ）ノ奥書ヲ受ケ郡區役所ヲ經テ縣廳ヘ出願スヘシ

但建物構造ノ圖面ハ前面後面兩側面平面ニ區別シ窓戸ノ尺度坪數ヲ一々記入スヘシ

第二條　定劇場ノ建物ヲ改築又ハ其幾分ヲ變更セント欲スルトキハ建物圖面ヲ添ヘ所轄戸長ノ奥書ヲ受ケ郡區役所ヲ經テ縣廳ヘ出願スヘシ

但改築願ハ愚書シタル現建物全圖及朱書シタル改築建物全圖ニ葉ヲ添ヘ變更願ハ其變更ニ係ル部分ヲ朱書シタル建物全圖ヲ添フヘシ

第三條　許可ヲ得テ定劇場ノ新築改築又ハ其幾分ノ變更工事ヲ終ヘタルトキハ其旨届出縣廳ノ檢査ヲ受クヘシ

但檢査ノ上許可ヲ得ルニ非サレハ興行ヲナスヲ得ス

第四條　定劇場ノ入觀人員ハ客席一坪ニ付拾人ノ割ヲ超ユヘカラス

第五條　定劇場ノ木戸口表面ニハ前條ノ割合ヨリ算出シ左ノ式ニ從

ヒ入觀定員ヲ大書シ常ニ掲出スヘシ

木製

竪曲尺五尺

入觀定員幾百幾十人

横曲尺一尺五寸

第六條　定劇場ハ官衙公私立學校病院避病院火葬場ヲ距ルヿ貳丁以上タルベシ

第七條　定劇場ヲ廢止シ又ハ賣買若クハ讓與シタルトキハ所轄戸長ノ奥書ヲ受ケ郡區役所ヲ經テ縣廳ヘ屆出ツベシ

第八條　定劇場ノ搆造裝置ハ左ノ各項ニ從フベシ

第一　建物ハ堅牢ヲ旨トシ危嶮ノ虞ナカラシムベシ

第二　左右棧敷(二楷ト毛)ノ後面並樂屋共開閉ニ便ナル窓戸ヲ充分ニ設ケ場内大氣ノ流通ニ注意シ平場ハ床下壹尺以上ノ板張ニスベシ

第三　屋上並屋壁ニハ其建物ノ廣狹ニ應シタル換氣窓ヲ設クベシ

第四　二楷棧敷及二楷ノ通路等墜落ノ恐レアル場所ニハ凡テ手摺ヲ設クベシ

第五　左右棧敷(二楷ト毛)後面ニ幅一間以上ノ非常口各二ケ所以上ヲ設ケ之ニ同幅ノ梯子若クハ蹈壇ヲ据付クベシ

但非常口ハ凡テ外開キニ搆造スベシ

第六　平場ニハ縱横ニ幅三尺以上ノ通路若干ヲ設クベシ

第七　棧敷平場共夜中客席ノ暗カラサル樣點燈スルノ裝置ヲ爲スベシ

第八　全場ヲ見通シ易ク且出入便利ノ箇所ヘ警察官ノ臨監席ヲ設クベシ

第九　建物ニハ避雷柱ヲ設クヘシ

第十　建物ノ周圍ハ其兩側面後面軒下ヨリ各拾五間以上ノ空地ヲ

設クベシ

第十一　敷地内ニ運動場ヲ設ケ之ニ適宜樹木ヲ植付クベシ

第十二　外圍ニハ木戸口ノ外便宜ノ箇所ニ幅壹間以上ノ非常口三ケ所以上ヲ設ケ總テ外開キニ搆造スベシ

第十三　敷地内便宜ノ箇所ニ火災消防用ノ爲メ三ケ所以上ノ井戸ヲ設クヘシ

第十四　下水路ハ側面底面共三和土又ハセメント若クハ煉瓦或ハ石材又ハ陶器ヲ以テ搆造スヘシ

但煉瓦若クハ石材又ハ陶器ヲ用ユルトキハ三和土又ハセメントヲ以テ目塗ヲ爲スヘシ

第十五　便所ハ其地形ヲ地盤ヨリ三寸以上高クシ便壺ハ瓷衣ヲ有スル陶器又ハ三和土或ハセメント若クハ煉瓦又ハ石材ヲ用ヒ便壺ノ周圍ニ属スル地盤ハ三和土又ハセメントヲ以テ漏斗狀ニ搆

造スヘシ

但便壺ニ煉瓦又ハ石材ヲ用ユルトキハ三和土又ハセメントヲ以テ目塗ヲナスベシ

第十六　便所ハ自他ノ飲料水ヲ距ルコト貳間以上棧敷平場等ノ客席ヲ距ルコト拾間以上トシ大便所ハ五箇小便所ハ七箇以上ヲ設クベシ

第二章　定寄席

第九條　定寄席ヲ設置センント欲スルモノハ建物搆造並ニ四圍詳細ノ圖面ニ敷地ノ坪數町村字番號及第十四條ノ距離ヲ記入シ四方百間以内ノ地主家主及居住者戸主承諾書ヲ添ヘ所轄戸長ノ奥書ヲ受ケ郡區役所ヘ出願スヘシ

但建物搆造ノ圖面ハ前面後面兩側面平面ニ區別シ窓戸ノ尺度坪數ヲ一々記スヘシ

第十條　定寄席ノ建物ヲ改築又ハ其幾分ヲ變更セント欲スルトキハ建物圖面ヲ添ヘ所轄戶長ノ奥書ヲ受ケ郡區役所ヘ出願スベシ

但改築願ハ墨書シタル現建物全圖及ヒ朱書シタル改築建物全圖二葉ヲ添ヘ變更願ハ其變更ニ係ル部分ヲ朱書シタル建物全圖ヲ添フヘシ

第十一條　許可ヲ得テ定寄席ヲ新築改築又ハ其幾分ノ變更工事ヲ終ヘタルトキハ其旨届出郡區役所ノ檢査ヲ受クベシ

但檢査ノ上許可ヲ得ルニ非サレハ興行ヲナスヲ得ス

第十二條　定寄席ノ入場人員ハ客席一坪ニ付拾人ノ割ヲ超ユベカラス

第十三條　定寄席ノ木戶口表面ニハ前條ノ割合ヨリ算出シ左ノ式ニ從ヒ入場定員ヲ大書シ常ニ掲出スヘシ

木製

入場定員幾百幾十人

横曲尺一尺二寸　竪曲尺四尺

第十四條　定寄席ハ官衙公私立學校病院避病院火葬場ヲ距ルコト貳丁以上タルヘシ

第十五條　定寄席ヲ廢止シ又ハ賣買若クハ讓與シタルトキハ所轄戶長ノ奥書ヲ受ケ郡區役所ヘ届出ッベシ

第十六條　定寄席ノ搆造裝置ハ左ノ各項ニ從フベシ

第一　建物ハ堅牢ヲ旨トシ危險ノ虞ナカラシムベシ

第二　客席ノ左右側面ニハ開閉ニ便ナル窓戶ヲ充分ニ設ケ室内大氣ノ流通ニ注意シ床下ハ一尺五寸以上ノ高サニ爲スベシ

第三　屋上並ニ屋壁ニハ其建物ノ廣狹ニ應シタル換氣窓ヲ設クヘシ

第四　客席ノ左右側面等適宜ノ場所ヘ幅一間以上ノ非常口二ケ所以上ヲ設ケ之ニ同幅ノ梯子若クハ踏壇ヲ据付クヘシ

但非常口ハ凡テ外開キニ搆造スヘシ

第五　場内ハ夜中客席ノ暗カラサル様點燈スルノ裝置ヲナスヘシ

第六　全場ヲ見通シ易ク且出入便利ノ箇所ヘ警察官ノ臨監席ヲ設クヘシ

第七　建物ニハ避雷柱ヲ設クヘシ

第八　建物ノ周圍ハ其両側面後面軒下ヨリ各七間以上ノ空地ヲ設クヘシ

第九　外圍ニハ木戸口ノ外便宜ノ箇所ニ幅一間以上ノ非常口二ケ所以上ヲ設ケ總テ外開キニ搆造スヘシ

第十　敷地内便宜ノ箇所ヘ火災消防用ノ爲メ二ケ所以上ノ非戸ヲ設クヘシ

第十一　下水路ハ側面底面トモ三和土又ハセメント若クハ煉瓦或ハ石材又ハ陶器ヲ以テ搆造スヘシ

但煉瓦若クハ石材又ハ陶器ヲ用ユルトキハ三和土又ハセメントヲ以テ目塗ヲナスヘシ

第十二　便所ハ其地形ヲ地盤ヨリ三寸以上高クシ便壺ハ瓷衣ヲ有スル陶器又ハ三和土或ハセメント若クハ煉瓦又ハ石材ヲ用ヒ便壺ノ周圍ニ属スル地盤ハ三和土又ハセメントヲ以テ漏斗狀ニ搆造スヘシ

但便壺ニ煉瓦又ハ石材ヲ用ユルトキハ三和土又ハセメントヲ以テ目塗ヲナスヘシ

第十三　便所ハ自他ノ飲料水ヲ距ルコト七間以上客席ヲ距ルコト七間以上トシ大便所ハ三箇小便所ハ五箇以上ヲ設クヘシ

第三章　假設興行場

第十七條　芝居其他ノ諸興行場ヲ假ニ設置セント欲スルモノハ其料金ヲ受クルト否トニ拘ラス建物構造幷ニ四圍詳細ノ圖面ニ敷地ノ坪數町村名字番号及ヒ第十八條ノ距離ヲ記入シ四方三十間以内ノ地主家主及居住者戸主承諾書ヲ添ヘ所轄戸長ノ奥書ヲ受ケ所轄警察署又ハ分署ニ出願スヘシ（明治廿三年十一月縣令第六十二號ニテ改正）

第十八條　假設興行場ハ官衙公私立學校病院ヲ距ルコト壹町以上遊病院火葬場ヲ距ルコト貳丁以上タルヘシ

第十九條　假設興行場ハ六ケ月以上保存スルヲ許サス

第二十條　假設興行場ノ搆造ハ左ノ各項ニ從スヘシ

第一　建物ハ堅牢ヲ旨トシ危險ノ虞ナカラシムヘシ

第二　建物ニハ各處ニ窓戸ヲ設ケ室内大氣ノ流通ニ注意スヘシ

第三　便所ハ客席ヲ距ルコト七間以上トシ之ニ適宜ノ見切ヲ設クヘシ

第四　全場ヲ見通シ易ク且出入便利ノ箇所ヘ警察官ノ臨監席ヲ設クヘシ

第四章　罰則

第二十一條　本則第一條第二條第三條第四條第五條第七條第九條第十條第十一條第十二條第十三條第十五條第十七條第十九條ニ違背シタルモノハ刑法第四百二十八條第五項ニヨリ罰セラルヘシ

附　則

第一條　本則第六條第八條中（第一項第六）第十項第十四條第十六條中第八項ハ在來ノ定劇場定寄席ニ限リ當分實施セス（第六項ノ三字ハ二十二年六月縣令第七十一號ニテ追加）

第二條　本則第八條（第七項第八項ヲ除ク）第十六條（第五項第六項ヲ除ク）ハ在來ノ定劇場定寄席ニ限リ明治二十二年六月三十日迄實施ヲ延期ス

第十七章　行旅人救療

第一項　行旅死亡人

太政官　布告第四十九號　明治十五年九月三十日

行旅死亡人取扱規則左ノ通制定ス

行旅死亡人取扱規則

第一條　凡引取人ナキ行旅死亡人アルトキ所在戸長ハ之ヲ最寄墓地ヘ假埋葬スヘシ其倒死變死等ニ係ル者ハ警察官ノ檢視ヲ受クヘシ

第二條　死亡人ノ本籍氏名詳ナルトキ戸長ハ死亡ノ狀況幷ニ埋葬其他死亡人ニ屬スル費用ノ計算書ヲ本籍戸長ヘ通報スヘシ本籍戸長ハ之ヲ其家ニ通示シ費用ノ辨償ヲ要スルトキハ三十日限リ差出サシメ埋葬地戸長ニ送付スヘシ若シ其家赤貧ニシテ辨償シ能ハサルトキハ其本籍地方稅ヲ以テ之ヲ支辨スヘシ

第三條　死亡人ノ本籍氏名詳ナラサルトキ戸長ハ其相貌景狀附屬シタル物品場所年月日等ヲ詳記シ三十日間最寄揭示場ヘ揭示シ且兩度以上新聞紙ヲ以公告スヘシ公告ノ日ヨリ九十日ヲ過キ仍ホ本籍詳ナラサルトキハ該費用ハ地方稅ヲ以テ支辨スヘシ

第四條　死亡人所持ノ金錢ハ埋葬其他死亡人ニ屬スル費用ニ供スヘシ又所持ノ物品ハ前條ノ期限ヲ過キ仍ホ本籍詳ナラサルトキハ之ヲ公賣シ同上ノ費用ニ充ツヘシ

但本籍氏名詳ナル者其家赤貧ニシテ費用ヲ辨償スル能ハサルトキハ直ニ其物品ヲ公賣スルモ妨ケナシ

第五條　死亡人ノ遺財前條ノ費用ニ充テ餘贏アルトキハ之ヲ本籍ヘ送付スヘシ其本籍氏名詳ナラサルモノハ之ヲ五ケ年間戸長役場ニ保管シ仍ホ本籍氏名詳ナラサルニ於テハ地方稅雜收入ニ組入ルヘシ

廣島縣伺　（十六年八月十日）

客年第四十九號ヲ以テ旅行死亡人取扱規則公布有之並本年三月

二十四日付ヲ以テ旅人ニシテ重症飢餓等ニ迫リ目下難捨置者ハ戸長役場ニ於テ適宜救護ヲ加ヘ其費用ハ本人家元ヨリ辨償セシメ家元赤貧ニシテ辨償難相成有籍者ハ本籍無籍者ハ救護地地方税ヲ以テ支辨スヘキ旨内務省ヨリ訓示有之候處海軍下士兵卒ニシテ單身旅行中萬一右等ノ場合ニ於テ假埋葬又ハ一時救護スヘキハ勿論ナレ𪜈其者引渡方及之レニ係ル諸費辨償ノ儀ハ御省軍務局又ハ鎮守府ヘ照會可然哉身分管轄一般人民ト異ル廉有之為念此段相伺候也

海軍省指令（十八年八月二十五日）

伺ノ趣單ニ東海鎮守府ヘ照會候儀ト可相心得事

滋賀縣伺　十六年十一月二十二日

第一條　明治十五年第四十九號公布ヲ以テ行旅死亡人取扱規則被定候處海軍下士兵卒ニテ單身旅行中死亡スルモノ有之トキハ總テ該規則ニ準シ可取扱ハ勿論ノ義ト相考候得共其死体引渡方及入費償却方ノ儀ハ滿役歸鄉等ノモノニ在テハ右規則第二條ニ依リ本籍戸長ヘ照會セシメ其他ノ者ハ東海鎮守府ヘ照會シ可然哉

第二條　前條果シテ然ラハ埋葬其他ノ費用（食料、藥價、醫師診斷料、撿案料、通信費等）ハ東海鎮守府ヨリ悉皆償却相成ル義乎或ハ其幾分ヲ償却相成ル義ニ候哉果シテ然ルトキハ其不足分ハ家元ヨリ償却為致可然哉

第三條　本年三月二日付ヲ以テ内務卿ヨリ行旅人ニシテ重症飢餓等ニ迫リ目下難捌モノハ適宜救護ヲ加ヘ右ニ屬スル費用ハ自辨タルヘク若シ本人又ハ家元赤貧ニシテ辨償スル能ハサルトキハ地方税救育費（無籍者ハ救護地有籍者ハ其本籍）ヲ以テ支拂フヘキ旨達有之候ニ付テハ下士兵卒等ニシテ萬一右等ノ場合ニ於テハ一時救護ヲ加ヘ其費用償却ノ義ハ滿役歸鄉等ノモノヲ除キ其他ノ者ハ東海鎮守

府へ照會セハ該費悉皆償却相成候義ニ候哉又ハ本人資力限リ追徴シ尚ホ不足スルトキハ其家元ヨリ辨償爲致候義ニ有之候哉

第四條　下士兵卒等單身旅行中盜難ニ罹リ亦ハ旅費金遺失等ニテ（滿役歸鄉等ノモノハ除ク）差閊ル旨ヲ以テ救護方申出候モノ有之トキハ事實取調相違無之ニ於テハ衣服ナキ者ハ衣服購求費宿泊ヲ要スルモノハ其宿泊料ヲ操替貸與シ可然哉

海軍省指令　（十七年一月二十四日）

伺ノ趣左ノ通可相心得事

第一條　在職ノ下士卒旅行中死亡スル者有之其死體引渡方ノ義ハ直ニ東海鎭守府へ照會スベキ義ト心得ベシ

但親戚故舊ヨリ死体引渡方出願スルトキハ下士金拾五圓卒金拾圓ヲ埋葬料トシテ下付スベクニ付該金額ハ同府ヨリ受取ルベシ

第二條　前條ニ於ケル埋葬料其他ノ費用ハ前段伺之通東海鎭守府へ照會スベキ義ト心得ベシ

第三條　前段伺之通、

第四條　旅行中盜難又ハ旅費金遺失等ニテ困難ノ者アルトキハ明治十一年乙第十號當省達旅行證票規則第三條ニ比準シ事實相違ナキモノハ一時救護ヲ加ヘ其費用ハ前二條ノ通同府へ照會スベシ

茨城縣伺　（十六年十二月十九日）

海軍下士兵卒ニシテ單身旅行中重症飢餓等ニ迫リ一時ノ救護又ハ假埋葬セシモノ引渡方及諸費ノ儀本年八月二十五日廣島縣伺ニ對スル御指令ニヨリ其時々東海鎭守府へ照會可致ハ勿論ナレ𪜈右ハ官私（官命ヲ帶フル者或ハ私事ニ出ル者）ノ別ナク之ニ係ル費用ハ悉皆下附セラルヽ御主趣ニ候哉

海軍省指令（十七年二月十九日）

書面埋葬費ハ伺ノ通其他ノ費用ハ事故ヲ明記シ更ニ可伺出事

内務省　達乙第六十一號　明治十五年十一月十七日

今般第四十九號布告ヲ以テ行旅死亡人取扱規則被定候ニ付テハ明治十年五月當省乙第五十號達ヲ廢シ表式別紙ノ通相定候條右ニ照準半年分宛取纏ノ毎年二月八月限リ進達可致尤モ届出ヘキ事項無之向ハ其旨同期限迄ニ可申出此旨相達候事

但當半季分ノ儀ハ第四十九號布告前後ヲ以テ區分ヲ立テ以前ノ分ハ最前表式ニ依リ以後ノ分ハ本達表式ニヨリ各表進達可致儀ト心得ベシ

明治　年前(後)半年行旅死亡人埋葬表

郡區	死狀	本籍不詳者			有籍者			雜收入ニ組入レタル遺金
		男	女	計	費金	常初ヨリ本籍詳ナル者	公告ニヨリ本籍判明セシ者	
					男 女	男 女	計	
何區	病死							
	變死							
何郡	病死							
	變死							
何郡	病死							
	變死							
何郡	病死							
	變死							
合計	病死							
	變死							
前年比較	増							
	減							

家元赤貧ニシテ地方税支辨ノ金額及其人員

備考

一

一

凡例

一前年比較上著シキ差アルモノハ其原由ヲ詳細備考ニ記スベシ
一行旅死亡人取扱規則第三條ニ掲ケル公告後九十日ノ期限前後両半季ニ跨カルモノハ九十日ノ終リタル季節ノ表ニ掲クベシト雖公告中ノ人員ハ男女ヲ區分シ前季ノ表中備考ノ目ヘ其員數ヲ記スベシ
一費金ノ目ヘハ規則第三條ニ依リ地方税ヨリ支辨シタル金額ヲ掲クベシ
一家元赤貧地方税支辨云々ノ目ヘハ規則第二條ニ依リ支辨ヲナシタル地方ノ表ニ掲クルモノトス

本縣　達甲第七十五號　明治十九年五月廿二日

行旅死亡人取扱心得及行旅重病人救護規則左ノ通改定ス

但流行病ニ罹ルモノハ此限ニアラス

第一條　死屍埋葬ノ入費ハ一人ニ付左ノ金額ヲ超過スルヲ得ス

金拾五錢以内
一人金貳拾五錢以内
金五拾錢以内
一回　實費

一醫師診察料
一埋葬人夫（二人以内）
一棺桶其他雜費
一新聞紙廣告料　二回　實費
一死屍番人給（晝一人夜二人）　一晝金拾五錢以内　一夜一人金貳拾錢以内

但仮埋葬迄特ニ番人ヲ要スル場合ニ限ル

第二條　死亡人ノ本籍姓名詳ナルモノハ費用計算書（明治十八年甲第百三十五号達第二號式ニ據ル）遺物取調書及醫師診斷書ヲ添ヘ直ニ遺骸引取方費用ノ償還及遺物ノ處分方ヲ本籍地ニ照會シ同時ニ郡區役所ヲ經テ縣廳ニ届出ベシ

第三條　死屍遺物ヲ引渡ストキハ第一條ノ諸費ヲ悉皆償却セシムヘシ

但諸費ヲ拂フ能ハサル場合ハ規則ノ通遺物賣却スヘシ

第四條　無籍者ニ係ル費用並有籍者ナルモ其家赤貧ニシテ地方稅ノ支辨ヲ要スル場合ハ一切ノ關係書類ヲ添ヘ其時々受取方會計課ヘ申立ヘシ

但其家赤貧ニシテ費用ヲ辨スル能ハサルモノハ遺族又ハ親戚ノ願書ヲ出サシメ戶長ノ證明書ヲ添ヘ差出ヘシ

第五條　行旅人重病ニ罹リ他ニ救護スルモノナク實際難捌モノアルトキハ所在地戶長ニ於テ左ノ廉々取調醫療手當等懇切ニ取扱醫師診斷書歸路ニ就キ得ヘキ豫期等詳記スヘシ及所持品取調書費用ノ豫算書並本人調書ヲ添直ニ本籍戶長ヘ引取方且ツ費用ノ交附方ヲ照會シ同時ニ郡區役所ヲ經テ縣廳ニ屆出ヘシ

但本籍照會中救護日數十日以上ニ及フトキハ毎十日醫師ノ診斷書ヲ添ヘ其現狀ヲ本籍戶長ヘ報告スヘシ

本人取調ノ件

一縣國郡區町村番地族姓名年齡

但寄留所アレハ其地名又改姓名セシコアルモノハ其姓名ヲモ併記スヘシ

一父母兄弟及親戚ノ住所姓名年齡

一近隣居住者ノ姓名

一生國出發ノ原由其年月日途次及行先

第六條　病人救護ノ費用ハ一人ニ付左ノ金額ヲ超過スルヲ得ス

一藥價　一日分　金六錢以內

一賄料　一度分　金三錢以內

一小屋掛　諸品人夫等一切金五拾錢以內

但特ニ小屋掛ヲ要スル場合ニ限ル

一看護人　一人一日　金拾五錢以內

但同上

一雜費飲食器具一式新調又ハ假借　金拾五錢以内
但小屋住ナナストキニ限ル
一醫師診察料一度　金五錢以内
一運送夫　二人一里一人ニ付　金六錢以内

第七條　戶長ニ於テ前各條ノ照會ヲ受ケタルトキハ直ニ其家元親戚等ニ通達シ速ニ引取方及費用ノ辨償ヲナサシムヘシ若シ其家元赤貧ニシテ引取且費用ノ辨償ヲナシ得サルトキハ其家元又ハ親族ヨリ救助願ヲ差出サセ其事實證明書（財產ノ有無及戶籍面等モ詳記スヘシ）ニ所在地戶長ノ照會書類寫ヲ添ヘ郡區役所ヲ經テ縣廳ニ差出ヘシ
但本縣照會ノ人名現戶籍面ニ相違アルモ其舊名ニ當ルカ又ハ戶籍面ニハ記載ナキモ其生來該町村ノモノニシテ全ク籍面ニ遺漏セシモノト認ムルモノハ本縣ニ準シ尚其事實ヲ詳具シ縣廳ニ伺出ヘシ

第八條　行旅死亡人本籍詳ナラサルモノ費用請求方ハ公告滿期後十日以内郡區役所ヲ經テ縣廳ニ申請スヘシ

第九條　同上遺物金圓ハ保管スル場合ニ於テハ其品數及金員計算書ヲ添ヘ縣廳ニ屆出ヘシ

第十條　行旅病人ノ本籍判明ナラサルモノアルトキハ其取調ヲナシタル顚末書類寫ヲ添ヘ地方稅ノ支辨ヲ請求スヘシ

第十一條　費額前條ノ通定ムト雖モ實際制限以内ニテ難取賄場合ハ其時々事情ヲ具シ縣廳ニ伺出ヘシ

右相達候事

第十八章　刑罰

第一項　刑罰

太政官　布告第三十六號　明治十三年七月十七日（節取）

第二編　公益ニ關スル重罪輕罪

第三章　靜謐ヲ害スル罪

第九節　公務ヲ行フヲ拒ム罪

第百七十九條　醫師化學家其他職業ニ因リ官署ヨリ解剖分析又ハ鑑定ヲ命セラレタル者故ナクシテ之ヲ肯セサル時ハ四圓以上四拾圓以下ノ罰金ニ處ス

第百八十一條　傳染病流行ノ際又ハ傳染病ノ疑アル船舶入港スルニ當リ醫師其病患ヲ檢査シ又消滅ノ方法ヲ陳述スルヿヲ命セラレタル者故ナクシテ之ヲ肯セサル時ハ五圓以上五拾圓以下ノ罰金ニ處ス

獸類傳染病流行ノ際獸醫此條ノ罪ヲ犯シタル時ハ一等ヲ減ス

第四章　信用ヲ害スル罪

第五節　免狀鑑札及ヒ疾病證書ヲ僞造スル罪

第二百十五條　公務ヲ免カル可キ爲メ醫師ノ氏名ヲ用ヒ疾病ノ證書ヲ僞造シ行使シタル者ハ自己ノ爲メニシ他人ノ爲メニスルヲ分タス一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

醫師囑託ヲ受ケテ其詐僞ノ證書ヲ造リタル者ハ一等ヲ加フ

第二百十六條　陸海軍ノ徵兵ヲ免カル可キ爲メ疾病ノ證書ヲ僞造シテ行使シタル者及ヒ囑託ヲ受ケテ其詐僞ノ證書ヲ造リタル醫師ハ前條ノ例ニ照シ各一等ヲ加フ

第二百十七條　免狀鑑札及ヒ疾病ノ證書ヲ增減變換シテ行使シタル者ハ亦僞造ノ刑ニ同シ

第五章　健康ヲ害スル罪

第一節　阿片烟ニ關スル罪

第二百三十七條　阿片烟ヲ輸入シ及ヒ製造シ又ハ之ヲ販賣シタル者ハ有期徒刑ニ處ス

第二百三十八條　阿片烟ヲ吸食スルノ器具ヲ輸入シ及ヒ製造シ又ハ之ヲ販賣シタル者ハ輕懲役ニ處ス

第二百三十九條　稅關官吏情ヲ知テ阿片烟及其器具ヲ輸入セシメタル者ハ前二條ノ刑ニ照シ各一等ヲ加フ

第二百四十條　阿片烟ヲ吸食スル爲メ房屋ヲ給與シテ利ヲ圖ル者ハ輕懲役ニ處ス人ヲ引誘シテ阿片烟ヲ吸食セシメタル者亦同シ

第二百四十一條　阿片烟ヲ吸食シタル者ハ二年以上三年以下ノ重禁錮ニ處ス

第二百四十二條　阿片烟及ヒ吸食ノ器具ヲ所有シ又ハ受寄シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處ス

第二節　飲料ノ淨水ヲ汚穢スル罪

第二百四十三條　人ノ飲料ニ供スル淨水ヲ汚穢シ因テ之ヲ用フルコト能ハサルニ至ラシメタル者ハ十二日以上一月以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上五圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百四十四條　人ノ健康ヲ害ス可キ物品ヲ用ヒテ水質ヲ變シ又ハ腐敗セシメタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上拾圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百四十五條　前條ノ罰ヲ犯シ因テ人ヲ疾病又ハ死ニ致シタル者ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第三節　傳染病豫防規則ニ關スル罪

第二百四十六條　傳染病豫防ノ爲メ設ケタル規則ニ違背シテ入港ノ船舶ヨリ上陸シ又ハ物品ヲ陸地ニ運搬シタル者ハ一月以上一年以下ノ輕禁錮ニ處シ又ハ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百四十七條　船長自ラ前條ノ罪ヲ犯シ又ハ人ノ犯スコトヲ知テ制セサル者ハ前條ノ刑ニ一等ヲ加フ

第二百四十八條　傳染病流行ノ際豫防規則ニ違背シテ流行地方ヨリ

他所ニ出タル者ハ十五日以上六月以下ノ輕禁錮ニ處シ又ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百四十九條　獸類ノ傳染病流行ノ際豫防規則ニ違背シテ獸類ヲ他所ニ出シタル者ハ十一日以上二月以下ノ輕禁錮ニ處シ又ハ五圓以上五拾圓以下ノ罰金ニ處ス

第四節　危害品及健康ヲ害ス可キ物品製造ノ規則ニ關スル罪

第二百五十條　官許ヲ得スシテ危害ヲ生ス可キ物品ノ製造所ヲ創設シタル者ハ二十圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス

若シ健康ヲ害ス可キ物品ノ製造所ヲ創設シタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百五十一條　官許ヲ得テ前條ニ記載シタル製造所ヲ創設スト雖モ危害ヲ豫防シ健康ヲ保護ス規則ニ違背シタル者ハ前條ノ例ニ照シ各一等ヲ減ス

第二百五十二條　前二條ノ罪ヲ犯シ因テ人ヲ疾病死傷ニ致シタル時ハ過失殺傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第五節　健康ヲ害ス可キ飲食物及ヒ藥劑ヲ販賣スル罪

第二百五十三條　人ノ健康ヲ害スヘキ物品ヲ飲食物ニ混和シテ販賣シタル者ハ三圓以上三十圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百五十四條　規則ニ違背シテ毒藥劇藥ヲ販賣シタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百五十五條　前二條ノ罪ヲ犯シ因テ人ヲ疾病又ハ死ニ致シタル者ハ過失殺傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第六節　私ニ醫業ヲ爲ス罪

第二百五十六條　官許ヲ得スシテ醫業ヲ爲シタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二百五十七條　前條ノ犯人治療ノ方法ヲ誤リ因テ人ヲ死傷ニ致シタルトキハ過失殺傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第七章　死屍ヲ毀棄シ及ヒ墳墓ヲ發掘スル罪

第二百六十四條　埋葬スヘキ死屍ヲ毀棄シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百六十五條　墳墓ヲ發掘シテ棺槨又ハ死屍ヲ見ハシタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ三圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス因テ死屍ヲ毀棄シタル者ハ三月以上三年以下ノ重禁錮ニ處シ五圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

第二百六十六條　此章ニ記載シタル罪ヲ犯サントシテ未タ遂ケサル者ハ未遂犯罪ノ例ニ照シテ處斷ス

第三編　身體ニ對スル重罪輕罪

第一章　身體ニ對スル罪

第一節　謀殺故殺ノ罪

第二百九十三條　毒物ヲ施用シテ人ヲ殺シタル者ハ謀殺ヲ以テ論シ死刑ニ處ス

第二節　毆打創傷ノ罪

第三百七條　健康ヲ害スヘキ物品ヲ施用シテ人ヲ疾苦セシメタル者ハ豫メ謀テ毆打創傷スルノ例ニ照シテ處斷ス

第八節　墮胎ノ罪

第三百三十條　懷胎ノ婦女藥物其他ノ方法ヲ以テ墮胎シタル者ハ一月以上六月以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百三十一條　藥物其他ノ方法ヲ以テ墮胎セシメタル者ハ亦前條ニ同シ因テ婦女ヲ死ニ致シタル者ハ一年以上三年以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百三十二條　醫師穩婆又ハ藥商前條ノ罪ヲ犯シタル者ハ各一等

ヲ加フ

第三百三十三條　懷胎ノ婦女ヲ威逼シ又ハ詐騙シテ墮胎セシメタル者ハ一年以上四年以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百三十四條　懷胎ノ婦女ナルコヲ知テ毆打其他暴行ヲ加ヘ因テ墮胎ニ至ラシメタル者ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處ス其墮胎セシムルノ意ニ出タル者ハ輕懲役ニ處ス

第三百三十五條　前二條ノ罪ヲ犯シ因テ婦女ヲ癈篤疾又ハ死ニ致シタル者ハ毆打創傷ノ各本條ニ照シ重キニ從テ處斷ス

第九節　幼者又ハ老疾者ヲ遺棄スル罪

第三百三十六條　八歲ニ滿サル幼者ヲ遺棄シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ處ス

自ラ生活スルコト能ハサル老者疾病者ヲ遺棄シタル者ハ亦同シ

第三百三十七條　八歲ニ滿サル幼者又ハ老疾者ヲ寥闊無人ノ地ニ遺棄シタル者ハ四月以上四年以下ノ重禁錮ニ處ス

第三百三十八條　幼者老疾者ヲ遺棄シ因テ癈疾ニ致シタル者ハ輕懲役ニ處シ篤疾ニ致シタル者ハ重懲役ニ處シ死ニ致シタル者ハ有期徒刑ニ處ス

第三百四十條　自己ノ所有地又ハ看守スヘキ地內ニ遺棄セラレタル幼者老疾者アルコヲ知テ之ヲ扶助セス又ハ官署ニ申告セサル者ハ十五日以上六月以下ノ重禁錮ニ處ス

若シ疾病ニ罹リ昏倒スル者アルコヲ知テ扶助セス又ハ申告セサル者亦同シ

第十二節　誣告及ヒ誹毀ノ罪

第三百六十條　醫師藥商穩婆又ハ代言人辯護人代書人若クハ神官僧侶其身分職業ニ於テ委託ヲ受ケタル事ニ因リ知得タル陰私ヲ漏告シタル者ハ誹毀ヲ以テ論シ十一日以上三月以下ノ重禁錮ニ處シ三

圓以上三十圓以下ノ罰金ヲ附加ス但裁判所ノ呼出ヲ受ケテ事實ヲ陳述スル者ハ此ノ限ニ在ラス

第三百六十一條　此節ニ記載シタル誹毀ノ罪ハ被害者又ハ死者ノ親屬ノ告訴ヲ待テ其罪ヲ論ス

第四編　違警罪

第四百二十五條　左ノ諸件ヲ犯シタル者ハ三日以上十日以下ノ拘留ニ處シ又ハ一圓以上一圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

六　官署ノ督促ヲ受ケテ崩壞セントスル家屋牆壁ノ修理ヲ爲サヽル者

七　官許ヲ得スシテ死屍ヲ解剖シタル者

八　自己ノ所有地内ニ死屍アルヿヲ知テ官署ニ申告セス又ハ他所ニ移シタル者

十　密ニ賣淫ヲ爲シ又ハ其媒合容止ヲ爲シタル者

十三　官許ノ墓地外ニ於テ私ニ埋葬シタル者

第四百二十六條　左ノ諸件ヲ犯シタル者ハ二日以上五日以下ノ拘留ニ處シ又ハ五十錢以上一圓五十錢以下ノ科料ニ處ス

三　不熟ノ菓物又ハ腐敗シタル飲食物ヲ販賣シタル者

四　健康ヲ保護スル爲メ設ケタル規則又ハ傳染病豫防規則ニ違背シタル者

七　發狂人ノ看守ヲ怠リ路上ニ徘徊セシメタル者

九　變死人ノ檢視ヲ受ケスシテ埋葬シタル者

十　墓碑及ヒ路上ノ神佛ヲ毀損シ又ハ汚瀆シタル者

第四百二十七條　左ノ諸件ヲ犯シタル者ハ一日以上三日以下ノ拘留ニ處シ又ハ二十錢以上一圓三十五錢以下ノ科料ニ處ス

六　禽獸ノ死屍ヲ道路ニ棄擲シ又ハ取除カサル者

七　汚穢物ヲ道路家屋園圃ニ投擲シタル者

九　醫師穩婆事故ナクシテ急病人ノ招キニ應セサル者

十　死亡ノ申告ヲ爲サスシテ埋葬シタル者

十二　妄ニ吉凶禍福ヲ說キ又ハ祈禱符呪等ヲ爲シ人ヲ惑ハシテ利ヲ圖ル者

第四百二十八條　左ノ諸件ヲ犯シタル者ハ一日ノ拘留ニ處シ又ハ十錢以上一圓以下ノ科料ニ處ス

六　溝渠下水ヲ毀損シ又ハ官署ノ督促ヲ受ケテ溝渠下水ヲ浚ヘサル者

九　身體ニ刺文ヲナシ及ヒ之ヲ業トスル者

第四百二十九條　左ノ諸件ヲ犯シタル者ハ五錢以上五十錢以下ノ科料ニ處ス

五　氷雪塵芥等ヲ路上ニ投棄シタル者

六　官署ノ督促ヲ受ケテ道路ノ掃除ヲ爲サヽル者

十七　公園ノ規則ヲ犯シタル者

第二項　處斷法

太政官　布告第七十二號　明治十四年十二月二十八日

明治十五年一月一日ヨリ刑法施行候ニ付法律規則中罰例ニ係ル者ハ左ノ例ニ照シテ處斷スヘシ

第一條　凡懲役ハ十一日以上ヲ重禁錮ニ處シ十日以下ヲ拘留ニ處ス

第二條　凡禁獄及ヒ禁錮ハ十一日以上ヲ輕禁錮ニ處シ十日以下ヲ拘留ニ處ス

第三條　凡罰金及ヒ科料ハ貳圓以上ヲ罰金ニ處シ貳圓未滿ヲ五錢以上壹圓九拾五錢以下ノ科料ニ處ス

第四條　法ニ照シ律ニ照シ若クハ違令違式ニ照シ處斷ストアリ及ヒ咎可申付トアルハ總テ貳圓以上百圓以下ノ罰金ニ處ス

第五條　法律規則ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ再犯加重及ヒ數罪俱發ノ

例ヲ用ヒス

第六條　法律規則中罰例アリト雖モ刑法ニ正條アルモノハ刑法ニ依テ處斷ス

第七條　前數條ノ罪ヲ犯シ拘留科料ニ處スル者ト雖モ輕罪裁判所ニ於テ之ヲ裁判ス

但始審裁判所所在ノ地ヲ除クノ外ハ治安裁判所ニ於テ之ヲ裁判スルヲ得

第三項　本縣々々設違警罪

本縣　布達第二十三號　明治十九年二月二十七日

本縣々設違警罪目別冊ノ通改正ス

（別冊）

違警罪目

第一條　左ノ諸件ヲ犯シタル者ハ三日以上十日以下ノ拘留ニ處シ又

ハ壹圓以上壹圓九拾五錢以下ノ科料ニ處ス

一　生河豚ヲ食料ニ賣買スル者

二　客店ニ於テ族籍氏名ヲ詐稱スル者

三　養源風防扞砂等ノ名稱ア ル民有林ノ立木ヲ所有者ニ於テ擅ニ伐採スル者

第二條　左ノ諸件ヲ犯シタル者ハ二日以上五日以下ノ拘留ニ處シ又ハ五拾錢以上壹圓五拾錢以下ノ科料ニ處ス

一　病死ノ禽獸ヲ知テ食料ニ販賣スル者

二　威銃取締規則ニ違背シタル者

三　定リタル住居ナク平常營生ノ産業ナキ者ヲ知テ宿泊セシメタル者

四　毒物又ハ激烈ノ物品ヲ用ヒテ魚鳥ヲ捕フル者

第三條　左ノ諸件ヲ犯シタル者ハ一日以上三日以下ノ拘留ニ處シ又

八 貳拾錢以上壹圓貳拾五錢以下ノ科料ニ處ス

一 官署及公署ノ召喚ニ應セサル者（明治廿三年十月縣令第五十八号ニテ改正）

二 祭事祝儀等ノ節事故ニ託シ妨害ヲ爲シタル者

三 他人ノ漁獵場ニ妨害ヲ爲シタル者

四 水車水碓等ニ妨害ヲ爲シタル者

五 漁獵禁制ノ場所又ハ他人ノ持場ニ於テ漁獵ヲナシタル者

六 强テ合力ヲ申懸又ハ押賣スル者

七 本縣布達銃砲製造賣買讓渡手續ニ違背シタル者

八 縣社以上神社境内ノ禁令ヲ犯シタル者

九 官許ヲ得スシテ社寺境内ノ竹木ヲ伐採シタル者

十 官許ヲ得スシテ河川ニ魚簗ヲ設置シタル者

第四條 左ノ諸件ヲ犯シタル者ハ一日ノ拘留ニ處シ又ハ拾錢以上壹圓以下ノ科料ニ處ス

一 男女入込ノ湯ヲ渡世スル者

二 官許ヲ得スシテ演劇類似ノ所作ヲ爲ス者

三 公然奇怪ノ扮飾ヲ爲シ又ハ醜体ヲ露シ遊戲ヲナス者

四 規則ニ違背シ免許鑑札ヲ受ケス又ハ納稅セスシテ營業稅雜種稅特別課稅ニ係ル營業ヲナシタル者

五 船燈信號記取締規則ニ違背シタル者

六 官許ヲ得タル燈臺又ハ築湊及ヒ水標木等ニテ船舶ヨリ金錢ヲ拂フヘキ場所ニ於テ其定價ヲ出サスシテ出入スル者

七 官許ヲ得スシテ渡船及ヒ橋梁ノ通行錢ヲ收取シタル者

第五條 左ノ諸件ヲ犯シタル者ハ五錢以上五拾錢以下ノ科料ニ處ス

一 猥リニ社寺及神祠佛堂等ヲ建設シタル者

二 猥リニ土石塵芥等ヲ河港溝渠及水溜筋ニ投棄シタル者

三 市街ニ於テ袒裼裸體シタル者

四　市街ニ於テ便所ニ非ラサル場所ニ大小便ヲ爲シタル者
五　市街ニ於テ蓋ナキ肥桶ヲ運搬シタル者

第十九章　雜犯

第一項　雜件

本縣　布達第三號　明治十六年一月十七日

蒸瀛器械及ヒ煙筒火竈取締規則左之通相定候條此旨布達候事

但本則ニ抵觸スル從前ノ布達ハ相廢止候事

蒸瀛器械及ヒ煙筒火竈取締規則

第一條　蒸瀛器械ヲ設置セント欲スル者ハ人家隔絕ノ場所ヲ擇ミ最寄人民ノ承諾書及ヒ建築圖面ヲ副ヘ戶長ノ奥印ヲ受ケ所轄警察署又ハ分署ヘ願出其許可ヲ受クヘシ

第二條　煙筒火竈（製鐵分析鑄物職陶器瓦燒硝子製造及ヒ湯屋石灰竈灰燒等ノ火竈烟筒其他危害ノ慮アルモノヽ類ヲ云フ）ヲ建造セント欲スル者ハ第一條ノ手續ニ從ヒ所轄警察署又ハ分署ノ許可ヲ

受クヘシ（本條ハ十六年布達二十六号十七年八十一号ニテ文字挿入セリ）

但營業者若シ廢業死亡又ハ改姓名等ヲ爲シタル時ハ速ニ所轄警察署又ハ分署ニ屆出可シ（但書ハ十九年縣令九号ニテ追加）

第三條　火竈煙筒ハ鐵造石造土造又ハ煉瓦造等不燃質ノ物ヲ用ヒ又器械所及ヒ製造所ノ建造物ハ草屋竹屋板屋ヲ用ユルヲ許サス

但陶器瓦燒及石灰竈灰燒ノ製造所建造物ハ本條ノ限ニアラス

第四條　第一條ノ器械及ヒ第二條ノ火竈烟筒ヲ修理セントスルトキハ警察署又ハ分署ヘ屆出檢查ノ上其許可ヲ得ヘシ

但其使用ヲ廢止セントスルトキモ本文同樣屆出ヘシ（但書十九年廿一号布達ニテ追加）

第五條　煙筒ハ每周間一回以上必ス掃除ス可シ

第六條　臨時警察官ニ於テ場內檢查ヲ爲シ破損所ノ修理及ヒ掃除ヲ命シ又烈風等ノ場合停業ヲ命スルトキハ之ニ從フ可シ

第七條　本則ニ違背シタル者ハ刑法第四百二十五條第五項ニ依リ處

分ス可シ

本縣　訓令第二百十五號　明治廿年四月一日

酒造醬油賣藥營業願又ハ藥種商產婆針治灸治及屠牛屠牛手願指令ノ義自今其許可ス可キモノハ指令ヲ廢シ單ニ鑑札ノミヲ下附シ許可スヘカラサルモノハ指令ヲ與ヘ候條郡區長分任事項中國稅ニ關スル營業願ニシテ鑑札ヲ下附スルモノ又ハ賣藥請賣及行商鑑札願等ハ右ニ準シ取扱フヘシ

右訓令ス

本縣　達乙第五十六號　明治十四年六月二日

衞生事務中墓地並ニ獸類化製所等設置其他總テ地所ニ關係アルモノ人民出願ノ節ハ一應實地檢查ノ上衞生上ノ利害見込ヲ付シ進達可致此旨豫テ相達候事

辨官　達　明治三年四月十二日

從前刑餘ノ體ヲ以テ刀劍ノ利鈍ヲ試候右ハ殘酷ノ事ニ候間嚴禁取締可致其他人膽或ハ靈天蓋陰莖等密賣致ス哉ニ候處其功無之事ニ付嚴禁取締可致候事

敎部省　達第二十二號　明治七年六月七日

別紙乙第三十三號ノ通神道諸宗管長ヘ相達候條向後禁厭祈禱ヲ以醫藥等差止メ政治ノ妨害ト相成候樣ノ所業致候者有之候ハヽ於地方官取締可致此旨相達候事

（別紙）

敎部省　乙第三十三號

禁厭祈禱等ノ儀ハ神道諸宗共人民ノ請求ニ應シ從來ノ傳法執行候ハ元ヨリ不苦筋候處間ニハ之レカ爲メ醫療ヲ妨ケ湯藥ヲ止メ候向モ有之哉ニ相聞以ノ外ノ事ニ候抑敎導職タルモノ右等貴重ノ人命ニ關シ衆庶ノ方向ヲモ誤ラセ候樣ノ所業有之候テハ朝旨ニ乖戻シ政治ノ障

碍ト相成甚以不都合ノ次第ニ候條向後心得違ノ者無之樣屹度取締可致此旨相達候事

内務省　達乙第四十二號　明治十五年七月

別紙戊第三號之通神佛各管長神道副總裁ヘ相達候條今後違背之輩有之候ハヽ直ニ差止置委詳當省ヘ具狀可致此旨相達候事

（別紙）

内務省　達戊第三號　明治十五年七月十日

禁厭祈禱ノ儀ニ付七年六月教部省乙第三十二號達之趣モ有之候處病者治療ノ際之カ爲メ投藥ノ時機ヲ誤リ候儀モ有之哉ニ相聞不都合候條今後信者ヨリ請求候節ハ先服藥之有無ヲ證明セシメ果メ醫師診斷施療中ノ者ニ限リ其望ミニ應シ不苦候條其旨屹度可相心得此段相達候事

内務省　訓令第四二七號　明治廿一年七月六日

地方衛生事務ニ係ル（氷雪屠牛牛乳鑛泉等ノ類）撿査諸費之儀ハ府縣廳費ヲ以テ支拂フヘキ旨是迄指令ニ及ヒタル向モ有之候處自今地方稅中衛生費ヨリ支辨スヘキ筈ニ付撿査料ハ徵收スルヲ得ス但一般ノ令達ニ據ラス特ニ願出ニ依リ撿査スルモノハ相當ノ撿査料ヲ徵シ地方稅雜收入ニ收入セラルヘシ

内務省　省令第十九號　明治十九年九月二十八日

明治四年四月四日布告第五則出生死去出入等届出方及明治五年正月第四號布告第八項寄留者届出方左ノ通相定メ來ル十二月一日ヨリ施行ス

第一條　出産アリタルトキハ十日以内ニ届出ヘシ

第二條　死者アリタル時ハ埋葬以前ニ届出ヘシ

第三條　失踪者復皈シ又ハ其行方知レタルトキハ十日以内ニ届出ヘシ

第四條　廢戶主廢嫡改名復姓身分變換其他願濟ノ上戶籍ニ登記スヘキ事項ハ其許可ノ指令ヲ受領シタル日ヨリ十日以內ニ届出ヘシ

第五條　前數條ニ記載シタル事項ハ戶主ヨリ届出ツヘシ戶主未定又ハ不在ナルトキハ親族二人以上又ハ其事ニ關係アル者ヨリ本籍地戶長ニ届出ツヘシ

但シ本籍地外ニアルトキハ現在地戶長ニ届且同時ニ本籍戶長ヘ届書ヲ發送スヘシ

第六條　他府縣又ハ他郡區ニ寄留シタルトキ自己ノ所有地ニ於テハ寄留者ヨリ借地借家ニ於テハ寄留者及地主又ハ家主又ハ其地所其家ヲ管理スル者ヨリ十日以內ニ其地戶長ニ届出且同時ニ本籍地戶長ヘ届書ヲ發送スヘシ

第七條　寄留地ヲ去ルトキ自己ノ所有地ニ於テハ寄留者ヨリ借地借家ニ於テハ地主又ハ家主又ハ其地所其家ヲ管理スル者ヨリ十日以內ニ其地戶長ニ届出且同時ニ本籍地戶長ヘ届出ヘシ

第八條　寄留者本籍地ニ皈リタルトキハ戶主又ハ本人ヨリ十日以內ニ届出ヘシ

第九條　正當ノ理由ナクシテ前數條ニ違背シタル者ハ貳拾錢以上壹圓貳拾五錢以下ノ科料ニ處ス

本縣告示第六十七號　明治十九年十二月廿八日

警察規則ニ於テ市街ト稱スル場所ハ左ノ驛町村ト相定ム

但本文驛町村ト連擔ノ場所ハ其模樣ニ依リ警察官ニ於テ市街同樣ノ取扱ヲ爲スコトアルヘシ

一等市街

福岡區　福岡驛　博多驛

御井郡　久留米驛

山門郡　柳河驛

企救郡　小倉驛

二等市街

遠賀郡　蘆屋驛　若松驛　黒崎驛

夜須郡　日木郡

穗波郡　飯塚驛　木屋瀨驛

鞍手郡　直方驛

御笠郡　太宰府驛

宗像郡　赤間驛

生葉郡　吉井驛

竹野郡　田主丸驛

上妻郡　福島驛

三潴郡　眞津驛　若津驛

山門郡　瀨高驛

三池郡　三池驛

京都郡　行事驛

仲津郡　大橋驛

築城郡　椎田驛

上毛郡　八屋驛

三等市街

粕屋郡　箱崎驛

鞍手郡　植木驛

上座郡　比良松驛

御笠郡　二日市驛　原田驛

早良郡　姪濱驛

志摩郡　前原驛

怡土郡　深江驛　今宿驛

宇島驛

山部村ノ內　外町勝野村ノ內小竹

那珂郡　雜餉隈驛
宗像郡　福間驛
夜須郡　秋月驛　尾野村ノ内新町
嘉麻郡　大隈驛
穗波郡　幸袋驛
山門郡　沖端驛
三池郡　大牟田驛　楠田村ノ内渡瀨
上妻郡　筑松驛　黒木驛　羽犬塚驛
下妻郡　水田村
三潴郡　城島驛
御井郡　府中驛　小保町
御原郡　松崎驛　山川村
山本郡　飯田驛

田川郡　香春驛
企救郡　大里驛
仲津郡　豐津町
築城郡　湊　村

內務省　衛生局雜誌第二十五号　明治十三年六月三十日

學校衛生概論

學校ノ造搆ハ概子四壁玻瓈ヲ以テ紙ニ代ヘ內ニ卓子椅子ヲ具ヘ外ニ遊園ヲ設ケテ一ニ歐米ノ風ニ摸擬シ乾淨整齊至ラサルハナシ然レ𪜈試ニ衛生上ノ景況ヲ觀察スルニ敎場ノ大小生徒ノ多寡課業ノ時間空氣ノ更換溫度ノ調節等或ハ其宜ヲ失ヒ生徒ノ健康ヲ損傷スヘキモノ亦少カラサルヲ信ス抑衛生法ハ衣食住ノ利害ニ關スルモノニメ吾邦從來習俗ノ異ナルヨリシテ歐來ノ法ヲ取リ直ニ之ヲ日常生活ノ實際ニ施シ難キ者多シ然レ𪜈學校ニ至テハ其造搆已ニ歐米ノ裝置ヲ用フ

ルカ爲ニ其衛生法ノ如キハ特ニ之ヲ實施セサルヲ得ス今ヤ其造搆裝置ノミヲ歐米ニ摸擬シ而シテ生徒ヲメ其中ニ起居動止セシムルヿ依然トシテ本邦ノ習慣ヲ革ムルヿナシ是其大ナル弊害ヲ致タスヤ言ヲ待タス夫兒童ハ受業ノ時間甚久シクメ其光陰ノ過半ハ之ヲ校中ニ費セリ而メ其弊害ノ爲ニ發育ヲ防害シ遂ニ終身羸弱ノ身トナリテ事ニ堪ルヿ能ハサルニ至ル者職トメ之ニ由ラサルハナシ是豈改良ヲ要セスメ可ナランヤ爰ニ學校衞生法ヲ歐米ノ說ニ質スニ第一位置及造搆第二卓子及椅子ノ裝置第三採温及通氣第四採明第五精神使用ノ度第六運動第七病毒豫防ニメ盡ク至要ナル條件ニ非サルハナク又之ヲ歐米風ノ學校ニ適用スヘキ者ニ非サルハナシ故ニ今其概準ヲ諸家ノ衛生書中ヨリ採摘シテ世ノ敎育衛生ノ事ニ從フ人ニ示ス

（位置及搆造）學校位置ノ健康上ニ害アリヤ否ハ必之ヲ審査セサルヘカラス其校小ニメ多數ノ生徒ヲ居ラシムルニ於テハ殊ニ此ニ注意スヘシ而其位置ヲ撰フノ適當セルハ乃以テ國ノ開明ヲ徵スルニ足レル者ニメ彼ノ瑞西ノ村落ニ在リテ旅客ノ一目嘆賞スル者ハ學校ノ位置ナリト云フ（後略）

合衆國ノ北部及歐羅巴ノ北部ニ在リテハ校舍ノ各室ニ冬夏ノ別ナク毎日大陽ノ射入スヘキ位置ヲ設ケリ此目的ヲ達セント欲スルニハ則左ノ件ニ注意スヘシ

地位ハ他ノ家屋及樹木ニ蔽ハレサル處ヲ撰ヒ而メ實用及虛飾ニ拘ラス大陽ノ光線ヲ遮蔽スヘキ物件ヲ避クヘシ垣墻庭園ヲ設クルニモ亦其方向ニ注意シ校舍ヲ築ク ニハ假令簡單ノ造搆ナルモ尙ホ何ノ方ニ向ヒテ毎日各室ニ大陽ノ光線ヲ受クルヿ幾時間ナルカヲ測リテ之ニ注意セサルヘカラス

校舍ノ方隅ハ正ニ東西南北ニ位セシメ生徒ヲメ西南或ハ東南ニ面セシムルヲ良シトス然リト雖紐育ノ如キ大都會ハ街路ノ方向ニヨリ適

當ソ地位ヲ占ムルコト能ハスメ尋常ノ人家ト雖多日數週間大陽ノ光線ヲ受ケサルコト有リ斯ノ如キ都會ニ在リテハ街角ニ當ツテ校舍ヲ建ツレハ其兩面ヨリ空氣ヲ通スルヲ以テ大ニ益アリトス

校舍ヲ建ツルノ地陰濕ナレハ最害アリトス是其或ハ泥沼ニ近接シ或ハ樹木ノ繁茂甚シキニ過キテ常ニ濕潤ヲ致スニ由ルナリ其地ヲ改良セントスルニハ土ヲ塡テ、泥沼ヲ塞キ或ハ樹木ヲ伐リテ適宜ナラシムヘシ又地水ノ流通シ易カラサルノ地ハ濕潤甚シトス又學校ノ位置ニ當ル地ニ泉脈アリテ地層ヨリ水ヲ湧出スル者ハ之ヲ拒クコト能ハスト雖或ハ其脈路ヲ他ニ導キ去レハ之カ改良ヲ得ヘシ

概シテ言フニ高地ハ低地ヨリモ良シトス高地ハ地水ノ流通易ク大陽ノ光線達シ且新鮮ノ空氣ニ富メリ然レトモ高地ニモ泉脈ヨリ水ヲ噴出スルノ地ナキニ非ス又或ハ太タ燥キ易キヲ憂フルコト有リト雖濕潤ノ害アルカ如キニ非ス校舍ノ壁及ヒ地板ヨリ生スル濕潤ハ僅微質私、肺

病及ヒ加答兒症ヲ發セシメ易シ

喧噪ナルカ或ハ煤烟、塵埃、臭氣等ノ空氣ヲ汚スヘキ職工場、停車場、市場、屠場、馬房等ノ近隣ハ之ヲ避クヘシ其他人民群集ノ地ハ生徒ノ修身上ニ關シテ亦之ヲ避クヘシ

校舍ノ戸扉ハ火災ノ如キ不測ノ事アル時ノ爲ニ外方ニ樞轉セシムヘシ是其急ニ舍外ニ出テ易カラシメンヲ要スルナリ此目的ニハ大ナル校ニ在リテハ扉ヲ八「フート」乃至十二「フート」ノ幅ニ造ルヘシ且ツ可成的其戸ヲ各樓梯ノ下ニ當リテ設ケ梯ノ幅ヨリ廣カラシムヘシ凡ソ樓梯ノ下ニアル戸ハ必ス梯ヨリ廣カラシメ大ナル校ニ在リテハ其幅十「フート」ニ至ルヘシ而シテ戸内ニ大陽ノ光線ヲ通セシメ且ツ前戸ト後戸ト相對セシメテ空氣ヲ導達スヘシ然ルキハ各室ノ空氣缺乏ヲ補フ利アリ

樓梯ハ亦可成的大陽ノ光線ヲ通スル位置ヲ要シ六百人ノ生徒ヲ居ク

學校ニハ梯ヲ二處ニ設クヘシ或人ノ說ニハ三處ニ設クヘシト言ヘリ
但校ノ造搆三層ナレハ其最下層ノ梯ハ八「フート」ノ幅ヲ要シ第二層
以上ハ六「フート」ノ幅ヲ以テ足レリトス梯ノ各級ハ童兒ノ昇降ニ便
ナランカ爲高キニ過シムヘカラス彼ノ螺旋梯ノ如キハ其級ノ一側甚
タ狹隘ヲ爲スヲ以テ兒童ノ或ハ失脚墜墮スルノ憂アリ故ニ之ヲ用フ
ヘカラス且ツ尋常ノ梯ト雖其側傍ヲ塞カスメ空シカラシメハ必ス墜
墮ノ虞アリ故ニ亦之ヲ防クヘシ且ツ梯ノ半ニ於テ憩息ノ地ヲ設ケ再
ヒ級ヲ起スヘシ

凡ソ學校ハ三層ヨリ高カラシムヘカラス女兒ノ如キハ大ニ昇降ニ苦
ミ放暇ノ際ニモ或ハ梯ヲ下ルヲ厭フヲ以テ戶外ノ空氣ノ吸攝スルヲ
ヲ得ス此カ爲ニ害ヲ致スコト有リ且ツ敎場ハ兒童ノ其中ニ留マルヲ以
テ充分ニ窓戶ヲ開放シテ空氣ヲ更換シ難キノ憂アリ且ツ三層ノ校ヲ
用フルニ當リテハ通常ノ敎場ヲ下中層ニ設ケ第三層ニハ講場及ヒ圖
書唱歌ノ敎場、圖書室、博物陳列場、化學試驗場等ヲ置クヘシ

校舍ノ中ニ厠圊ヲ置クハ生徒ノ健康ニ害アリ是其糞尿ヨリ發出スル
瓦斯ヲ舍內ニ散布シ生徒自然ニ之ヲ吸收スルニ由ルナリ故ニ必ス校
舍ノ外ニ於テ別ニ厠房ヲ設ケ以テ其害ヲ避ケシムヘシ而シテ亦日々
糞尿ヲ撤去シテ淨除法ヲ怠ルヘカラス

（卓子及椅子ノ裝）　生徒ノ身體ノ長短ニ從ヒ卓子及椅子ノ裝ヲ適當
ナラシムヘシ此裝置ノ適當ナラサルヨリ呼吸器ノ運動ヲ妨ケテ之カ
爲ニ病ヲ致シ其他諸多ノ疾患殊ニ佝僂病ノ類ヲ發セシムルコアリ而
シテ實驗ニ徵スルニ其害最少女ニ多シ女子ハ男子ニ比スレハ其在校
ノ時間短ク且ツ學校ニ昇降スルコ亦少キニ却テ此ノ如ク患害多キハ
必修學中卓子及椅子等ノ高低度ニ適セサルニ起因スル者ナラン且男
子ハ游步時間ニ在リテ劇シキ體操ヲ行ヒ身體ノ諸筋ヲ運動シテ以テ
敎場內ニ在リシ際ノ有害ナル體勢ヲ償フコヲ得ヘシト雖女子ノ如キ

ハ男子ト均シキ體操ヲ行ハサルヿ一般ニメ其動作自異ナル所アレハ

此等ノ患害ニ罹ルヿ亦多キナルベシ

凡ソ學校ニ於テ生徒身體ノ長短ニ拘ラス同一ノ卓子椅子ヲ用フルハ

不可ナリ宜シク其長短ニ應シテ之カ高低ヲ定ムヘシ今瑞國ノ醫學士

ギロー ム氏ノ說ニ據リ卓子及椅子ノ高低ヲ示スヿ左表ノ如シ

生徒身體ノ長短	卓子ノ高低	椅子ノ高低	椅背ノ高低
弐尺九寸七分至三尺弐寸壹分七厘五毛	一尺一寸三厘七毛五	八寸一分八厘七毛五	八寸〇八厘五毛
三尺弐寸壹分七厘五毛至三尺四寸六分五厘	一尺弐寸一分弐厘七毛五	七寸〇一厘弐毛五	八寸九分一厘
三尺四寸六分五厘至三尺七寸壹分弐厘五毛	一尺三寸〇三厘五毛	七寸八分三厘七毛五	九寸八分一厘七毛五
三尺七寸壹分弐厘五毛至四尺壹寸弐分五厘	一尺四寸〇弐厘五毛	八寸四分九厘七毛五	一尺〇六分四厘四毛五
四尺壹寸弐分五厘至四尺三寸七分弐厘五毛	一尺四寸九分三厘弐毛五	九寸弐分四厘	一尺一寸五分五厘
四尺三寸七分弐厘五毛至四尺六寸弐分	一尺五寸八分四厘	一尺〇〇六厘五毛	一尺弐寸三分七厘五毛
四尺六寸弐分至五尺〇三分弐厘五毛	一尺六寸八分三厘	一尺〇八分〇七毛五	一尺三寸弐分八厘弐毛五

但表中ノ尺度ハ瑞西ノ尺度ヲ我尺度ニ改算セシカ故ニ厘以下ノ小數ヲ生セリ

四尺六寸弐分至五尺〇三分弐厘五毛　一尺七寸八分弐厘　一尺一寸六分三厘弐毛五　一尺四寸一分九厘

（採温及通氣）　學校ノ適良ナル温度ハ華氏六十四度ヨリ八十度ニ至

ル者トス蓋學校ノ生徒ハ空氣ノ流通充分ナル室ニ在リテ六十六度ノ

温ヲ得レハ極メテ快適ナルヘシ或ハ浴室ニ在リテ濕衣ヲ被ルキハ害

アルヿ固ヨリ論ヲ待タス又食物不良若クハ運動不足ナル兒童ハ寒冷

ニ堪ヘサル者トス大人兒童ノ別ナク過度ノ温暖ナル室内ニ居ルヲ常

習トスレハ身體乍チ虚弱トナル米國ノ如キ氣候變換シ易キ地方ニ在

リテハ誤テ其温度ヲ過サシムルヿナキニ非スト云フ凡ソ學校ニ在リ

テハ常ニ其温度ヲ過スヿ多キヲ以テ之ヲ調節スルニ不斷深ク注意セ

サル可カラス其專ラ心ヲ傾ケテ一課業ニ就クヤ過度ノ熱ニ過フモ其

操ル所ヲ休メス八十五度ニ至ル熱ヲモ知覺セサルヿ往々之アリ此際

人身ニ發スル所ノ害ハ衰弱ニ在リ而メ其衰弱ヲ爲スニ於テハ更ニ愈

々温熱ヲ貪ルニ至リ遂ニ慣習ト爲ルヲ免レス蓋敎師ト雖猶生徒ノコトク之ヲ意ニ覺ユル所ナク勞ルレハ則チ過度ノ熱ヲ求メ休フノ後ハ自其弊ヲ曉ラス遂ニ知ラス識スメ害ヲ受クルコト有リ故ニ强壯ナル學校長ノ此弊ヲ矯正センカ爲敎員ヲ提醒シテ注意ヲ加ヘシムルコトハ必ス緊要ナリ

過度ノ熱ヲ喜ム慣習ヲ改ムヘキ時ハ學年ノ初ニ在リ此際ニハ各生徒ノ數月間新鮮ノ空氣ヲ吸攝シテ其體强キヲ以テ深ク注意ヲ加フレハ必ス寒氣ニ堪フルノ力ヲ維持スルコトヲ得ヘシ敎員ハ生徒ヲメ競走發聲ノ如キ運動ヲ爲サシメ且ツ戶外ニ出テシムルヲ以テ其寒氣ニ堪フルノ力ヲ催進スヘシ但雨日及雪天ニ當リ舍內ニ於テ體操ノ如キ活潑ナル運動ヲ爲サシムル間ハ少シク窓戶ヲ開クヘシ

冬日江寒ノ時ハ生徒凍冷ニ苦ミ手指殆ント石盤石筆ヲ把持スルコト能ハサルニ至ル此際ニ當リテハ最煖室法ヲ要スト雖或ハ火氣ヲメ二方ニ偏勝セシメ例ヘハ前面ハ燒熱ニ堪ヘス背部ハ尙沍凍ヲ覺ユルカ如クナラシムヘカラス若シ之ニ注意セサレハ此カ爲ニ循環變調ノ患ヲ起シ遂ニ炎症或ハ感胃ニ罹ルコトアリ加之兒童ヲ斯ノ如キ室內ニ拘注シテ四五時間ニ及ヒ以テ其神思ヲ勞セシメ且ツ身體ヲ嚴責スルコト有ラハ則許多ノ病患ヲ釀成シ遂ニ容易ニ快復シテ再ヒ健全ナルヲ得サルニ至ラン蓋深ク注意ヲ此ニ加フルニハ必ス每敎場ニ一箇ノ寒暑計ヲ備ヘ常ニ華氏ノ六十度ヲ降ラシメンコトヲ要スヘシ

煖爐ヲ敎場內ニ設クルハ之ヲ兩側恰當ノ地ニ排置シ全室ノ溫度ヲメ均稱セシムヘシ且煖爐ヨリ散布スル所ノ炭酸及ヒ酸化炭素ハ其量ニ隨ヒ間々兒童ヲメ中毒症ヲ發セシムルコト有リ故ニ亦之ニ注意スヘシ

學校ノ空氣流通宜シカラサレハ此カ爲ニ生徒ノ發育ヲ妨ケ健康ヲ害シ殊ニ多ク瘰癧等ノ疾病ヲ發セシム蓋兒童ハ外物ニ抵抗スルノ力大人ニ劣レル者ナルヲ以テ不潔ノ空氣ニ感スルコト亦甚シキナリ且ツ旣

ニ少壯ノ時ニ至レハ健康ヲ害スヘキ感觸ニ遇フモ幸ニ傷害ヲ受ケス
メ一時之ニ耐忍スルヲ得ヘシト雖兒童ノ齒ニアリテハ苟モ一旦身體
ノ發育ヲ妨ケラルヽ有レハ成長ノ後ニ及ヒテ强健ナルヿ稀ナリ凡
ソ淸潔ト稱スヘキ空氣ノ含メル炭酸瓦斯ノ量ハ毎百分中ニ〇、〇四
分トス若シ之ニ過クレハ空氣不潔ト爲ルナリ敎場ニ多數ノ生徒ヲ居
ラシムルニ當リテハ最此ニ注意スヘシ
生徒ノ群居甚シキカ或ハ室内ヨリ戸外ニ出テヽ頓ニ寒冷ニ膚觸スル
カ或ハ室内ノ塵埃ヲ吸入スル等皆生徒ヲメ疾病ニ罹ラシム生徒毎一
人ニ要スヘキ所ノ空氣ノ容積ハ百二十立方「フート」乃至三百六十立
方「フート」ナリ而メ全場ノ空氣ヲメ善ク更換流通セシムヘシ但窓戸
ノ上方ヲ開キテ空氣ヲ通スレハ室内ノ温ヲ奪却セラレサルヲ以テ寒
冷ヲ來サヽルナリ
敎場ニハ一種固有ノ臭氣アルヿ猶四舍ニ於ケルカ如シ此臭氣ヲ除ク

ノ法ハ先ツ純潔ノ空氣ヲ通スルニアリ純潔ノ空氣ヲ通セント欲スル
ハ勉メテ諸般ノ汚垢ヲ除クニ如クハナシ乃チ生徒ノ皮膚毛髮襪靴衣
服等ノ如キ皆敎員ノ注意ヲ以テ之ヲ淸潔ニセシムヘシ殊ニ貧民ノ生
徒ニ對メ之カ改良ヲ謀ラントスルニハ或ハ其家ニ就カサルヲ得ス又
生徒ノ奢被ハ敎場外ノ可成的衆人ノ近カサル處ニ於テ空氣ノ充分ニ
流通スル一室ヲ設ケテ此ニ之ヲ懸ケ且ツ各生徒ノ套被ヲメ互ニ相混
セシムヘカラス
毎日校舍ノ地板ヲ掃潔シ毎週敎場講堂ノ地板、板壁、梯級等ヲ洒拭シ
而メ善ク空氣ヲ流通セシムヘシ其他淸潔ヲ要スル爲ニハ緻密ノ木材
ヲ撰用スヘシ亞麻仁油ヲ飽和セシメタル松木板ハ濕氣及ヒ蒸氣ヲ吸
收セサル者ニメ若シ之ヲ洗洒スル時ハ忽チ乾キ且ツ久シク朽腐セサ
ル者トス
夜學敎場ニアリテハ勉メテ注意シテ空氣ヲ流通更換セシムヘシ是燈

火ヨリ發出シテ室内ニ塡充スル瓦斯ヲ驅逐スヘキニ由ルナリ瓦斯燈ハ殊ニ空氣ニ不潔ニシテ窒息ヲ起サシムルノ有リ石炭油ノ燈火ニ至リテハ其害較々少シ又獸魚ノ脂油ヲ以テ製シタル蠟燭ヲ用ヒサルヲ艮シトス若シ之ヲ用フル時ハ不斷窓戸ノ上方ヲ開放スヘシ

（採明）學校教場ノ採明ハ亦注意スヘキ者ニメ室内ノ光線不足ナレハ此カ爲ニ生徒近視眼ヲ發シ或ハ自然ニ頭ヲ書籍上ニ低垂スルヨリ腦病ヲ來ス□アリ又光線射照ノ方向ニ隨ヒ大ニ視力ヲ害スル□アリ壁ハ淡線色或ハ濃淡適度ノ褐色ヲ貴フ頂格ハ善ク光線ヲ反射セシメンカ爲ニ白色ナラシムヘシ而黒板ヲ室ノ二面若シクハ三面ニ設ケ窓間或ハ窓戸ニ近キ處ニハ之ヲ設クヘカラス是强キ光線ニ向ヘハ字ヲ讀ム□能ハサルニ適當ナラシメント欲スルニハ窓ヲ直ニ外方ニ向ハシ光線ヲ通スルニサルヲ以テナリ

ムヘシ且ツ戸ノ上方ニ於テモ必小窓ヲ設クヘシ然レ𪜈衛生上ヨリ言ヘハ敢テ多量ノ光線ヲ通スル艮シトスルニ非ス故ニ其過度ヲ防カンカ爲ニ窓外ニ於テ百葉扇ヲ設クヘシ乃此ニ由ラハ光線ノ射入ヲ調節シ且ツ自在ニ其方向ヲ上下セシムルヲ得ヘシ又夏時新鮮ノ空氣ヲ通スルニハ此百葉扇（カラトマト）窓ヲ以テ甚便ナリトス若シ帷幕ヲ用フルキハ風ヲ受ケテ聲ヲ放チ且ツ破レ易シ

尋常人家ハ其細事ヲ操ルニ當リ移リテ窓下ニ接近シテ可也ト雖學校ニ於テハ然ラス各生徒ノ業ヲ課スル必各其定位ニアリテ適宜ノ光線ヲ得サル可カラス故ニ尋常人家ノ光線ヲ通スル法ハ固ヨリ學校ニ適セサル者トス學校ニ要スル採明法ハ則左ニ記スルカ如シ窓ノ下端ハ地板ヨリ四「フート」ノ高ニ當ラシムヘシ若光線射照ノ方向正ニ眼ニ平行シ來ルキハ羞明眩昏ヲ發セシメ却テ卓上ヲ照スノ用ヲ爲サス亦光線ヲ通スル一方ニ偏セス遍ク室内ニ達セシムヘシ窓ノ上端ハ可成的頂格ニ近接セシムヘシ何トナレハ光線ノ殆直角ノ度ヲ以テ卓上ニ

射照シ來ランヲ要スレハナリ而其光線ハ第一ニ窓ノ上端ヨリシ第二ニ頂格ヨリス是故ニ頂格ハ善ク光線ヲ反射スヘキ方法ヲ要シ窓ノ上端ハ必方形ナラシメ或ハ裝飾ノ爲ニ半規形若クハ圭狀ナラシムヘカラス又其廉ヲ大ニメ光線ヲ遮ラシムヘカラス其他簷頭ニ於テ光線ヲ遮蔽スヘキ裝搆ヲ爲スヘカラス窓ノ適當ナル位置ハ自一定ノ式アリ生徒ノ面ニ對スル處ニ於テ之ヲ設クヘカラス是其面ニ對スル窓ヨリ射入スル光線ハ却テ光線ナキニ劣リ視力ヲメ乏弱ナラシメ遂ニ近視眼ヲ發セシムルヲ以テナリ又生徒ノ右側ニ設クルヲハ算術、圖畫、習字ニ手ヲ使用スルノ際陰影ヲ生スルヲ以テ便ナラストス又生徒ノ後方ニ設クルヲハ亦險影ヲ生スト雖其窓ニ近接セル者ノ他ハ甚シキ害ナク且習字ノ際ハ通常少シク體ヲ左方ニ傾クルヲ以テ或ハ却テ便ナリ而窓ヲ生徒ノ左側ニ設クレハ充分ナル便益ヲ與ヘ更ニ光線ヲメ左前方ノ高處ヨリ來ラシメハ極メテ佳ナリトス

之ヲ窮ムルニ窓ノ位置ヲ定ムルハ必ス前方ヲ取ルヘカラス左側ヲ取ルヘシ若シ然ラスハ後方ニ設クルモ可ナリ左側及後方ヨリ來ル光線ハ絶エテ視力ヲ害スルコトナシ

各窓ヲ合算シタル面積ハ少クモ地板面積ノ六分一ニ下ラサラシムヘシ又一說ニハ生徒ノ壹人ニ窓ノ面積三百乃至三百五十平方インチヲ要スト言ヘリ

（精神使用之度）　精神及身体ヲ傷害スルノ原因ハ過度ノ使用若クハ强迫ノ使用ニアリ過度ノ使用トハ非常ニ使用ノ度ヲ過スヲ云ヒ强迫ノ使用トハ疲勞シタル時强ヒテ之ヲ使用スルヲ云フ今此ニ原因ニ就キ說述スルニ左ノ如シ

（甲）過度ノ使用　各人ノ能力ノ量ハ頗ル大ナル差異アリ下雖學校ニ於テ敎育スル生徒ニ就キテハ殆ト一定ヲ以テ之ヲ使用セシメサルヘカラス

彼兵學校及農學校ノ如キハ素ト體格ノ强壯ナル者ヲ撰ヒタル生徒ニメ其課業及按讀ノ時間ヲ合セテ平均毎日凡十時間ト爲スト雖普通ノ大學校ニ在リテハ之ヨリモ較々短キ時間ヲ用ヒ課業及按讀ヲ合セテ八時間若クハ九時ニ過キサルヘシ

中學校ニ於テハ通例年齡十二年以上十七年以下ノ生徒ヲ敎育スル者ニメ年齡ハ其身體ノ成長及春心發動ノ期ニ當ルヲ以テ其時間ヲ減セサルヘカラス乃チ課業及按讀ノ時間ヲ合セテ通常五時間或ハ六時間ナルヘシ

小學校生徒ノ課業時間ハ其齡十二年十一年ノ者ハ四時、十年九年八年ハ三時乃至三時半、七年以下ノ者ハ二時半乃至三時ヲ以テ足レリトナス此十年以下ノ者ニ關スル時間ノ定限ハ最遵守セサルヘカラサル者ニメ或ハ學校ニ於テ少年生徒ヲメ五時乃至六時ノ間業ニ就カシムルノ程規ハ甚タ理ニ適セサルナリ然リト雖モ此ニ一種ノ弊習アリテ生徒在校ノ時間ヲ短縮スルヿ頗ル難シ弊習トハ乃チ生徒ノ父母タル者多クハ毎日數時間其子女ヲ學校ニ委托センヿヲ欲シ家庭ニ居クヲ以テ却テ累トナス是レナリ

過度ニ身體及精神ヲ勞役スルモ豫メ期シタル成績ニ寸毫ヲ增加シ得サルハ蓋生理學上ノ一定理ニ出ツル者ナリ例之兒童ノ能力一日ニ三時間ノ使用ニ限レリトセハ五時間之ヲ使用スト雖其成ル所ノ事ハ同一ニシテ必差異ナカルヘシ是許多ノ實驗ニヨリテ徵スル所ナリ尙ホ次ニ說ク所ヲ視テ兒童ノ適當ナル時間ヲ定ムルノ根據タル理由アルヲ識ルヘシ

第一、時間ヨリシテ其成績ヲ論スレハ凡ソ兒童ハ腦體未タ全ク發育セス思想ノ力亦甚弱クメ長ク一事ニ專心スルヿ難シ故ニ屢々其身體及精神ヲ使用スル所ノ事物ヲ更換センヿヲ要シ八年ノ兒童ニメ精神ヲ使用スルヿ此ヨリ彼ニ遷リ或ハ深ク思想ヲ費スヿ毎日少クモ十二

時間ヲ消スルハ通常ノ法トス然レ𪜈児童ハ其作業ノ効大人ト異ニメ而メ學業ノ如キモ亦大人ト同シク之ヲ成スヿ能ハサル〳〵シ殊ニ一學ノ蘊奥ヲ極ムルカ如キハ必永遠ノ用意ヲ盡シテ後始メテ之ヲ得〳〵キ者ニシテ兒童ノ決シテ爲シ能ハサル所ナリ其齢ニ從ヒテ一事卽一課業ヲ勉ムルヲ得ルノ時間五年以上七年以下ハ大約十五分、七年以上十年以下ハ大約二十分、十年以上十二年以下ハ大約二十五分、十二年以上十六年乃至十八年以下ハ大約三十分ナリ故ニ幼穉者ノ精神ヲ使用スヘキ時間ハ十五年ノ少年ノ時間ニ半スル者トス此ニヨリテ之ヲ考フレハ幼穉者ハ十五年ノ少年ニ倍スル時間ヲ以テ始テ同一ノ作業ヲ全成シ得〳〵キナリ

第二、成績ヨリシテ其時間ヲ論スレハ實驗ニヨルニ課業時間ニ差異アルモ其成績同一ナルヿ有リ例之英國ニ於テ半日法ト稱スル者ノ如ク職工及他ノ勞役者等ノ兒童ヲ毎日大約三時間學校ニ登ラセ他ノ時間ハ製作或ハ商買若クハ農圃ニ從事セシムルハ猶毎日六時間學校ニ在リテ課業ヲ勉ムル者ノ如ク善良ナル進歩ヲ得以テ同一ノ成績ヲ呈スヘシ敢〳〵テ時間ニ拘ラサルナリ

(乙)强迫ノ使用　米國ノ中學ニ於ケルカ如キハ各生徒ヲメ皆一定ノ課定ヲ踐マシメ若一時ノ微恙等ノ爲メニ之ヲ踐ムヿ能ハサル者アレハ則呵責ヲ加フ此等ノ生徒ハ數々精神ニ有害ナル强迫ノ使用ヲ受ケト雖教員生徒ノ學業進歩ノ遲緩ナルヲ恐レテ其微恙ノ爲ニ課程ヲ怠ルヲ恕セス生徒モ亦其規則ノ嚴密ナルニ制セラル、ノミナラス試驗ヲ受クルニ當リテ或ハ零點ヲ得ル等ノ懼アルヲ以テ遂ニ之ヲ甘受スルナリ故ニ各生徒ヲシテ一定及ヒ過多ノ課程ヲ踐マシメ若クハ毎級生徒ノ員數過多ナルハ其ヲメ精神ニ强迫ノ使用ヲ受ケシメサルヲ得ス蓋一定ノ課定ヲ設ケテ學業ノ成績ヲ期シ之カ褒貶ヲ行フハ生徒ヲ奬勵スルニ缺ク〳〵カラサルノ事ナリト雖兒童ヲメ過度ノ課業ヲ爲サ

シムルハ却テ之ヲ緩クメ其精神ヲ養成スルノ最良益アルニ及カス

（運動）學校ノ兒童ニハ競走蹴鞠ノ如キ戸外運動ヲ以テ最良ノ嬉游トナス材落ノ學校ニ於テハ殆ト體操ヲ要セサルヘキカ如ク游嬉ヲ成スノ便宜ヲ得ル者アリト雖市邑及諸工場近傍ノ地ノ學校ニ於テハ女子ハ論ナク男子ナルモ亦或ハ戸外運動ノ便宜ヲ得サルヿ勘シトセス此故ニ市邑等ニアリテハ體操ヲ以テ戸外ノ運動ニ代ヘ以テ身體ノ發育ヲ助ケ生徒ヲシテ強壯健全ナラシムルノ工夫ヲ施スヘシ但體操場ハ頗寛濶ニシテ日光ノ照透空氣ノ流通充分ナラシムヘシ兒童ノ男女ヲ問ハス戸外ノ運動ヲ爲スニ不便アルノミナラス或ハ活潑ナル運動ヲ嫌惡スル者アルヲ以テ愈體操術ノ必要ナルヲ察スヘシ乃此等ノ事情ヲ商量シテ體操術ノ虚弱怯懦ナル兒童ヲ育成シテ健全敢耐ノ人タラシムルノ實効アルヲ斷知セハ必之ヲ學校ニ設ケサルヘカラス

體操術ノ一大効益ハ他ノ運動ニ比スレハ能ク各人適應ノ度ナル運動ヲ得セシムルヿ能ハス又體操ハ一定ノ場所ヲ要シ且其體格ノ虚弱ナル原由等ヲ察知シテ之カ改良ニ適當ナル運動法ヲ設クヘシ是故ニ教員ハ略々解剖學ニ通セサルヘカラス

教員ニ於テ若シ生徒ニ虚弱ナル者ナシト認ムルトキハ一齊ニ美容術體操ノ一種ニシテ其法温柔ナル者ノ適當ナル者ヲ撰ヒ用フルヿヲ得ヘシ但此方ハ數多ノ生徒ニ均シク充分ナル益ヲ與フル者トス

器械ヲ用ヒサル輕易ノ運動ハ豫メ之カ備ヲ爲サヽルモ課業ノ時間ニ於テ之ヲ行フヿヲ得ヘシ其目的ハ筋肉ヲ強實ナラシメ且一時適度ナル血行及發汗ヲ助クルニアリ總テ此種ノ運動ハ兼テ精神ヲ慰スルヲ以テ頗ル一要事ト爲ス故ニ生徒ヲメ之ヲ行ハシメサルヘカラス或ハ「ピアノ」洋琴ヲ奏シテ其曲節ヲ行歩及ヒ運動ニ合スルヿアリ要スルニ教員タル者ハ生徒ヲメ其身體ニ緊節ナル所ノ事ヲ行ハシムルヲ以テ目的ト爲スヘキカ故ニ生理學ノ大意ニ通シ其主要ナル件ヲ知ラサ

ルヘカラス而生徒運動法ヲ輕視シ或ハ敎員之カ誘導ヲ怠ルヤハ其効用甚尠カラン

唱歌ヲ行フハ身體ノ運動及精神ノ慰暢ニ有益ナル事ナリト雖唱歌室ヲ設ケテ此ニ數多ノ生徒ヲ集ムルハ必空氣ヲメ不潔ナラシムルヿ甚シク他ヨリ來ル者アリテ其室ニ入レハ暫クモ居止スルヿ能ハサルヲ愆エシム抑モ肺臟ノ作用ヲメ强壯ナラシムルハ新鮮ナル大氣ノ供給充分ナルニアリ殊ニ密閉シタル室内ニ於テ運動ヲ爲スハ之ヲ靜坐スルニ比スレハ肺臟ノ甚シキ疲勞ヲ起スヘキヿ論ヲ俟タス

少壯ナル男女ヲ敎育スル學校ニ於テハ體操式中强テ之ヲ施用シ難キ者ナキニ非スト雖健全强壯ノ生徒ニ至リテハ大抵之ヲ行ハシムルヲ佳トス筋力ヲ運動セシムルヿハ曾テ力役ヲ事トシ及ヒ之ニ反シテ毫モ筋力ヲ使用セサリシ壯年者ニ在リテハ殊ニ必要ナリトス

運動ヲ行フノ際外氣ニ胃腑スルヨリ傻麻質私格魯布等ニ罹リ易キ虛弱ノ兒ニハ宜シク適當ノ保護ヲ加フヘシト雖然レ𪜈操業ニ堪フルノ力熱ヲ生スルノ力及感冒ヲ防クノ力ハ適宜ニ筋及肺ヲ使用スルニ由リテ增盛ナラシムル者ナレハ之ヲ斟酌シテ可ナリ

（病毒豫防）學校ハ時トシテ傳染病ヲ媒介スルノ具ト爲リ生徒中ニ一患者アルニ當リ之カ注意ヲ怠ヨリ大ニ害ヲ蒙ラシムルヿアリ

痘瘡、猩紅熱等ノ如キハ直ニ生命ヲ害スヘキ危險ノ病ニメ甚シキ傳染性ヲ有セル者ナリ此等ノ患者ヲ隔離シテ其傳染ヲ豫防スヘキハ固ヨリ論ヲ俟タス他ノ醱酵病患者ニ至リテモ亦注意シテ之ヲ防クヘシ

學校ニ於ケル傳染病豫防規則ノ簡單ナル者ハ則左ニ示スカ如シ

第一　入學ノ生徒ハ必ス種痘證書ヲ携帶シテ學校長ニ示シ若シ種痘證書ヲ有セサル者ハ入學ヲ得サルヘシ

第二　醫師傳染病患者ヲ診察シタルトキハ其地ノ衛生局ニ申報スヘク衛生局ハ各學校長ニ通知スヘシ但其申報ヲ要スル疾病ハ衛生局ノ

決議ニ從フヘシ

第三　某家ニ於テ傳染病ニ罹ル者アルトキハ若干ノ日數ヲ經ル間其子弟ヲ學校ニ登ラシムヘカラス但其日數ハ醫師ノ斷定ニ從フヘシ

第四　學校ノ衛生上景況ヲ修良スルカ爲ニ醫師ヲ以テ委員トナシ其方法ヲ敎員生徒及ヒ學務委員ニ授ケシムヘシ

以上ノ諸件學校事務ヲ管掌スル者及敎員ニ於テ常ニ注意ヲ加ヘ兼テ汚水疏通穢芥撒除ノ方法ニ及スヘシ或ハ生徒ヲ寄宿セシムル學校ニ至テハ飮水、食物、浴湯等皆注意セサルヘカラス

本縣　訓令第三百八十六號　明治二十三年三月十三日

小學校ハ兒童ノ學齡ヲ其內ニ經過シ人生ノ最モ長久ナル印象ヲ受納スルトコロノ場所タレハ校舍ノ構造ハ堅牢ニシテ朴素ナラサルヘカラス其位置ハ爽快ニシテ便利ナラサルヘカラス特ニ採光取溫及通氣ノ如何ヲ察シ以テ健康ヲ保侍シ心思ヲ慰安スルニ足ラサルヘカラス然ルニ我邦學校建築ノ法未タ完カラス一ハ華飾ヲ旨トシ堅牢ヲ顧ミス一ハ粗造ニ失シテ衛生ヲ慮ハカラス學校ノ本旨ニ適セサルモノ多シ其レ學校ハ一旦之ヲ建築セハ容易ニ動カスヘカラサルヲ以テ其建築ニ際シテハ宜シク深ク此等ノ要件ニ注意シ適當ノ計畫アランコトヲ要ス依テ小學校建築標準別紙ノ通相集メ候條自今學校ヲ建築セントスルトキハ右ニ據リ設計シ豫メ當廳ノ認可ヲ請フヘシ

小學校建築標準

一學校ノ位置ヲ選フニ當テハ宜シク其健康上ニ注意スルト同時ニ又美育上ニ注意セサル可ラス森林ニ接シタル華麗ナル傾斜泉池若クハ溪谷ニ臨ミタル高臺丘陵ヲ以テ圍繞セル地ノ如キハ生徒ヲシテ知ラス識ラス優美ノ思想ヲ養成シ心意ニ感徹スルモノナリ位置ノ撰定ハ善惡共ニ其影響ヲ數世ノ兒童ニ及スモノ故ニ最モ注意ヲ要スヘキナリ

一敷地ハ兒童ノ通學ニ便ニシテ空氣ノ流通好ク太陽ノ光線ヲ十分ニ受ケ而シテ喧囂不潔危險ノ場所及ヒ卑濕ノ土地ヲ避クルヲ要ス

一敷地ノ廣サハ就學スヘキ兒童ノ數ニ應シ校舍其他体操遊戲場等ヲ設クルヲ要ス其地形ハ長方形ニシテ兒童一人ニ付二坪半ヲ下ラサルヲ可トス

但兒童百人ニ滿タサル處ノ敷地ハ本文ノ比例ヨリ廣キヲ要ス

一敷地ノ方位ハ四隣ノ關係ニ依リテ定ムヘシト雖モ大概東南若クハ南方ニ面スヘシ

一校舍ノ方位ハ正南若クハ東南方ニ面ス可シ

一校舍ハ敎室敎員扣所生徒扣所小使室等ヲ具フヘシ別ニ講堂食堂ヲ備フルハ最モ便ナリトス其搆造ハ朴素ニシテ堅牢ナルヘシ

但敎員ノ居宅ヲ校舍ノ近傍若クハ校舍內ニ設クルアルハ尤モ便利ナリトス

一校舍ノ廣狹ハ就學スヘキ兒童ノ數ニ應シ結搆スヘシ

但他日增築スヘキ目的アル校舍ハ豫メ其計畫ヲナスヘシ

一敷地ノ廣サ十分ナル學校ニ在テハ校舍ハ平屋ニ搆造スルヲ便ナリトス若シ敷地狹隘ニシテ二階ヲ設クルトキハ幼年兒童ノ敎室ハ成ルヘク階下ニ設クルヲ可トス

一敎室ハ長方形ニ設ケ一敎室ニ入ルヘキ兒童ノ數ハ凡ソ六十人ヲ最多數トス

但其長サハ五間ニ過キサルヲ可トス

一敎室ノ平面積ハ生徒一人ニ付三尺平方ニ下ラス天井ノ高サハ一丈ニ下ラサルヲ要ス

但天井ノ高サ本文ノ如クナシ難キトキハ敎室內空氣ノ容積ヲ增サンカ爲メ屋根裏二階裏ヲ露ハシ別ニ天井ヲ設ケサルヲ可

ト ス

一生徒ノ出入口ハ男女ヲ別ニシ且ツ其位置ハ北風ノ向ヲ避クヘシ又入口内ノ両側等適宜ノ所ニ履物傘置臺ヲ設クルヲ要ス

一教室ノ壁ハ厚クシテ堅質ナルモノヲ用ヒ又牀面ヨリ三尺五寸許ノ所マテハ腰羽目ヲ附スルヲ可トス且ツ壁色ハ日光ノ射入スル教室ニハ鼠色等反射ノ少ナキモノヲ用ウルヲ緊要トス

一教室ハ生徒ノ左方ニ窓ヲ設ケ光ヲ採ルヲ便ナリトス窓ノ面積ハ教室ノ平面積ノ六分一以上タルヘシ又窓ノ位置ハ採光ノ便ヨリ論スルトキハ北方ハ光量ノ明暗少クシテ可ナリト雖モ室内ヲ爽快ナラシメ温暖ヲ日光ニ藉ルノ便ニ於テハ東南又ハ南方ニ設クルヲ可トス都テ日光ノ射入スル窓ニハ光量ヲ加減スル爲メ適宜其設ヲ爲スヘシ

但生徒ノ左方ニ窓ヲ設クル能ハサルトキニ於テモ其面前又ハ

教師ノ面前ニ設ケスシテ生徒ノ右方ニ設クヘシ

一床ハ總テ地盤ヨリ壹尺五寸以上トシ堅牢ノ板ヲ用フヘシ且ツ床下ハ四方數ケ所ニ空氣ヲ交換セシムルノ裝置ヲナスヘシ

一窓ハ牀面ヲ距ル凡ソ三尺五寸ノ所ヨリ天井下ニ撰ヒ其構造ハ容易ニ開閉シ廣大ノ光線ヲ容ルヽ如ク排置スヘシ

一階梯ハ多數ノ兒童ヲ容ル、學校ニ於テハ便宜ノ場所ニ二箇所ヲ設ケ且ツ昇降シ易キヲ要ス故ニ直行或ハ彎曲ナラス踊場付二重梯子ニ爲シ又欄干ヲ設クルヲ可トス

一階梯ノ横幅ハ四尺以上ニシテ其堅幅ハ八寸ニ下ラス各段ノ高サハ四寸乃至五寸タルヘシ

一便所ヲ設クルニハ校舍ノ北方ニ適宜ノ距離アル地ヲ撰ミ樹木ヲ栽ユヘシ又風ノ疏通ヲ好クシ臭氣ノ留滯ヲ防クヘシ校舍ヨリ便所マテノ通路ハ庇アル廊下ヲ設クルヲ必要ナリトス

但西南等ニ方リ便所ヲ設クルトキハ其近傍ニ常綠樹ヲ植エ日光ヲ遮リ臭氣ノ飛散ヲ防クヘシ

一便所ハ男女ヲ別ニシ其五ニ相距ルコト遠キヲ可トス又便所ノ數ハ生徒百人ニ付大約三箇以上ヲ設クヘシ

一体操地及遊戲場モ亦男女ノ區域ヲ別ニシ且ツ砂等ヲ敷キ平坦ニシテ乾燥ナラシムヘシ

一遊戲場中夏季日光ノ烈シキ所ニハ落葉樹ヲ植ヘ且ツ其近傍ニ危險ノ場所アルトキハ堅牢ナル擁壁ヲ設クヘシ

一學校用机椅子ノ高低ハ生徒身體ノ長短ニ準スヘキモノニシテ椅板ノ高サハ生徒ノ脛ノ長サト一樣ニシテ後方ニ傾キタル椅背アルモノヲ可トス又机ノ高サハ椅板ノ上ヨリ兒童坐身六分一ノ距離アラシヲ度トス

一講義等ノ如キ机ヲ要セサル學科ヲ教フル教室ニハ椅子ノミヲ備フルヲ便ナリトス都テ机椅子ノ用材ハ堅實ナルモノヲ可トス松材ノ如キハ價安クシテ最モ便ナリトス

一黒板ハ石盤石ノ堅牢ニシテ久存ノ便アルニ如クナシト雖ヒ木板ヲ用ウルトキハ時々黒色ヲ塗抹シ褪色セサルヲ要ス

一井戸ハ成ヘク東南ノ方位ニ設ケ汚水浸透ヲ防クヘキ搆造ニ爲スヘシ

但井戸ノ周圍二十尺以内ニ便所塵芥溜及下水溜等ヲ設クヘカラス

第二十章　報告

第一項　報告統計

内務省訓令第三十號　明治二十三年八月二十三日

明治三十一年十月内務省訓令第二十號内務報告例別冊ノ通更定ス

但別冊ハ別ニ頒ツ

内務報告例

汎則

第一條　報告例ハ警視廳北海道廳府縣廳及憲兵司令部集治監假留監ニ於テ法律命令ヲ執行シ或ハ各長官權内ノ事務ヲ處分シタル事項ニ就キ緩急輕重ニ從ヒ内務ニ屬スル事（年報第一項ヲ除ク）項ヲ報告スヘキ順序ヲ示ス者ナリ

但凡ソ各廳ノ經費豫算決算等ニ關スル諸報告並氣象報告ハ別ニ定メタル規則ニ依準スヘシ

第二條　報告ヲ分テ日報週報月報半年報年報ノ五種トス

第三條　日報ハ毎日週報ハ毎週月報ハ毎月半年報ハ毎半年年報ハ毎年各一回報告スル者トス

第四條　報告ハ直接使命ノ外總テ郵便ニ付スヘシ

但例日日報中第十一第十二第三十四第三十五ニシテ事重大ナル者ハ卽時電信ニテ報告スヘシ

第五條　報告期限ハ從前成規アル者ト否ラサルトヲ問ハス總テ本例ニ於テ指定シタル時日マテニ發送スヘシ

第六條　報告ノ書類ハ他ノ文書ト混同セサルカ爲メ別紙雛形ノ通リ一切墨線ノ罫紙ヲ用キ五種ニ通用スヘシ

但表式ハ白紙ヲ用フルモ妨ナシ

第七條　警察令及廳府縣令告示其他印刷シタル者ハ更ニ料紙ニ謄寫スルニ及ハス（ト雖モ料紙大ノ無罫美濃紙一葉ニ滿タサル者ハ半葉ニスルモ妨ケナシ）印刷又ハ貼付シテ進達スヘシ

第八條　凡ソ報告書ハ添書ヲ要セス其記載方ハ一事件又ハ一表毎ニ紙頁ヲ改メ（警察令及廳府縣令告示ト雖モ連載スヘカラス）紙末又ハ冊尾適宜ノ所ニ於テ年月日宛名ヲ記シ長官署名調印スヘシ

但例目番號ノ肩ニ記スル文字ノ同一ナル者（例ヘハ日報中ノ廳府縣處務細則ト議長改選トノ類）ヲ二件以上ヲ同時ニ報告スルトキニ限リ纒メテ一括トシ（紙頁ハ之ヲ改ム）目錄ヲ付シ其年月日宛名長官ノ署名調印ハ目錄紙ノ末ニ於テス可シ然ルトキハ一事件又ハ一表毎ニ之ヲ爲スニ及ハス

第九條　諸圖面等ハ其事柄ニ依リ大小廣狹ノ差違アルハ勿論ナレハ豫メ一定シ難シト雖モ成ル可ク美濃紙一葉ニ調製スルヲ要ス其縮小シ得可キ者ハ半葉ニ調製スルモ妨ケナシ

但編綴ノ爲メ四隅ニ餘白ヲ存ス可シ

第十條　諸表樣式ニハ横線ノミヲ示ス者ト雖モ進達ノ表ニハ縱線ヲ加フ可シ又登記ス可キ事項ナキ空欄アラハ縱線ヲ塡充シテ脫漏ニ非サルヲ證ス可シ

第十一條　諸表樣式ハ已ニ頒布ノ者ト雖モ執務者ノ便ヲ圖リ茲ニ彙集シテ本例ニ編入ス若シ今後命令訓令ニ依リ改正ヲ來ス可キ事アルトキハ延テ本例ニ及フ者トス

第十二條　今後新タニ發スル所ノ命令訓令中ニ於テ期限ヲ定メ報告ヲ要スル旨ヲ記載シタルトキハ其報告ノ種類ニ依リ此例目中ニ追加シタル者ト看做可シ

第十三條　數位ヲ以テ記入スル事實ニシテ前年ト比較シ著シキ增減アル者ハ其事由ヲ表尾ヘ付記ス可シ

第十四條　數位ハ金員ハ厘位ニ量數ハ合位ニ坪數ハ才位ニ別段ハ步位等ニ止メ一位ニ・ヲ付シ傍ヘ圓石坪等ノ文字ヲ記載ス可シ

但表尾ニ特ニ數位ヲ示セル者ハ此限ニアラス

第十五條　本例目ニ掲載セサル者（內訓ハ之ヲ除ク）ハ總テ報告ニ及ハス

但異例又ハ重要ノ事項ハ此限ニアラス

內務報告例目（摘載）

日報

第十七	傳染病流行ノ徴候	十九年五月省令第四號	
第十八	避病院ノ開設	十九年三月省令第一號	
第十九	檢疫委員ノ設置	同上	
	週報		發送期日
第十五	公立病院設立	二十一年十月訓令第二十號	
	月報		
第四	傳染病患者	第五表	十九年五月省令第四號翌月末日
第五	在監傳染病患者	第六表 同上	同上
	半年報		
第三	藥劑師廢業及死亡	二十二年八月訓令第三十四號	
			八月二十日
第四	在監人死亡	第八表	同上

	年報		
第一	地方事務并ニ管内ノ景況	二十一年訓令第二十號	二月二十日
第八	各郡市町村別戸口表	第十一表	三月二十日
第十一	本籍生年別人口表	第十四表	同上
第十二	本籍出産死亡婚姻表	第十五表	同上
第十四	現住人出産死亡表	第十七表	同上
第四十	藥用阿片受拂	第廿九表	二十二年三月訓令第六號 會計年度后二ケ月以內
第七十一	種痘明細表	第六十表	十九年三月省令第二號 四月三十日
第七十二	醫事娼妓黴毒檢查表	第六十一表	同上及十一年十二月乙第八十八號達 同上
第七十三	死亡者年齡區別表	第六十二表	十八年十月甲第三十三號達 同上

何報

汎則第六條ニ掲クル五種ニ通用スヘキ料紙ノ雛形

＝　＝廳名

右及報告候也

明治何年何月何日　長官々氏　名印

内務大臣宛

諸表式及印刷物ニ付テノ書法モ右ニ準シ紙末適宜ノ所ニ記載スヘシ

從前屆又ハ報告等區々ノ文字ヲ用ヰ來リシモノアリト雖モ自今總テ本紙ノ文例ニ據ル可シ

報告例諸表様式

第五表　月報

何病患者（明治何年何月）廳名							
國名	郡市名	流行	經過	有病		患者	死亡
		發熄	日數	町村數	仝上ノ戸數		
某國	某市	自何月何日					
	某郡	至何月何日					
某國	某郡						
合計							

一六種ノ傳染病ニ就キ各一表ヲ製スヘシ

一戸數ハ前年末戸籍調査ニ據ルヘシ

一甲月ニ報告シタル有病町村數及戸數ハ乙月報告ニハ之ヲ省キ其月中ニ新タニ患者アリタル町村數及戸數ノミヲ掲ク丙月以下之ニ倣フ

一患者ノ欄ニハ治癒死亡ニ拘ハラス本月中發病セシ人員ヲ記入シ死亡ノ欄ニハ前月ノ發病ト本月ノ發病トヲ問ハス本月中死亡セシ人員ヲ記入スヘシ

一警察署留置場ニ拘禁中ノ者モ本表ヘ記入スヘシ

一三府及北海道ハ郡市ノ欄ニ各區ヲ列記スヘシ

第六表

月報

類別	某監獄(署)別房留置人	某監獄(署)刑事被告人	某監獄(署)懲治人	某監獄(署)囚人	合計
在患何病患者〔明治何年何月〕廳名					
一月間監房數					
延人員					
感染					
不感染					
患者					
死亡					

一六種傳染病ニ就キ各一表ヲ製スヘシ

一甲月ニ報告シタル感染監房數ハ乙月報告ニハ之ヲ省キ其新タニ患者アリタル監房ノミヲ掲ク丙月以下之ニ倣フ

一拘帶乳兒ハ患者死亡ノ人員ノミ備考ニ記載スヘシ

一患者ノ欄ニハ治癒死亡ニ拘ハラス本月中發病人員ヲ記入シ死亡ノ欄ニハ前月ノ發病ト本月ノ發病トヲ問ハス本月中死亡セシ人員ヲ記入スヘシ

第八表

在監人死亡〔明治何年自一月至十二月〕廳名

類別		第一類	第二類	第三類	第四類	第五類	第六類	第七類	第八類	第九類	第十類	第十一類	第十二類	第七類ノ内
傳染病														
發育及營養的病														
皮膚及筋骨病														
血行器病														
神經系及五官病														
呼吸器病														
消化器病														
泌尿及生殖器病														
外襲性變死	自殺													
	其他													
中毒原因不詳														
合計														

報　年

七一月	八二月	九三月	十四月
囚	囚	囚	囚
懲治人	懲治人	懲治人	懲治人
刑事被告人	刑事被告人	刑事被告人	刑事被告人
別房留置人	別房留置人	別房留置人	別房留置人
携帯乳兒	携帯乳兒	携帯乳兒	携帯乳兒
計	計	計	計
男女			

八百九十六

第十二表

各郡市町村別戸口表（明治何年十二月卅一日現在）

郡市名　町村名

本籍人			現住戸數
男	女	合計	

五十一月	六十二月	合計
囚	囚	囚
懲治人	懲治人	懲治人
刑事被告人	刑事被告人	刑事被告人
別房留置人	別房留置人	別房留置人
携帯乳兒	携帯乳兒	携帯乳兒
計	計	計

廟名

八百九十七

年報

何市	何區	何區	何區	小計
何市	……			
何郡	何町	何村	何村	小計
合計				

一現住戸數ノ欄ニハ本籍人ト本籍ニ非サル人ト又戸主タル者ト戸主タラサル者トヲ問ハス渾テ其地ニ現住シテ一世帶ヲ爲ス竈數ヲ記入ス可シ但官舍社寺學校病院製造所等ノ構内ニ居住スルモ別ニ一竈ヲナス者ハ又一戸トシテ之ヲ記入スヘシ

一東京京都大坂ノ三市ハ町村ノ欄ニ各區ヲ記入スヘシ

一市制ヲ施行セサル區ハ市ニ準シテ其欄ニ記入スヘシ

一町村制第百十六條第二項ニ依リ町村ノ組合ヲ設クルト雖モ一町村毎ニ記入組合毎ニ〔何町 何村〕ノ如ク弧線ヲ施スヘシ

第十四表　年報

本籍生年別人口表（明治何年十二月三十一日現在）　廳名

生年	男	女	計	生年	男	女	計
明治廿三年生				同十五年生			
同廿二年生				同十四年生			
同廿一年生				同十三年生			
同二十年生				同十二年生			
同十八年生				生年不詳			
同十九年生				合計			
同十七年生							
同十六年生							

一本表ハ北海道廳府縣本籍人ノ生年ヲ調査スルモノニシテ其

調査ノ年ヲ首トシ以上年次ヲ逐ヒ明治慶應元治文久萬延安政嘉永弘化天保文政文化享保寛政天明安永ニ溯リ年号何年生ト列記シ其生レタル年ニ從ヒ記入スヘシ例ハ明治二十三年生ノ下欄ヒハ同年一月一日ヨリ十二月三十一日ニマテ出生シタル者ヲ記入スルカ如シ但戸籍編製以前逃亡失踪シ其生年詳ナラサル者アルトキハ生年不詳ノ項ニ記入スヘシ

第十五表　年報

本籍出産死亡婚姻表（明治何年）　廳名

類別	男	女	合計
生産 公生			
生産 私生			
生産 合計			
死亡			
結婚數			
離婚數			
年末配偶數			

附屬表

類別	男	女	合計
生産屆洩者 明治二十二年生			
生産屆洩者 同二十一年生			
生産屆洩者 同二十年生			
生産屆洩者 同十九年生			
生産屆洩者 同十八年以前生			
棄兒 本年生			
棄兒 前年以前生			
死亡屆洩者			
本籍不詳者死亡			
死産			

一本表ハ一箇年ノ總數ヲ記入スルノ趣意ナリ

生産者ノ數ヲ擧クルニハ例ハ明治二十三年ニ在テハ先ツ該年ノ登記目錄ニ就キ一月一日ヨリ十二月三十一日マテニ出産シタル數ヲ算出シ之ヲ第一數トシ次ニ明治二十四年ノ登記目錄ニ就キ二十三年十二月下旬ニ出産シテ其屆出期限二十四年一月上旬ニ係リテ屆出タル數ヲ算出シ之ヲ第二數ト

ヽ(此第二數ハ明治二十四年ノ出産表ニハ記入スヘカラス)
此第一第二數ヲ合シテ記入スヘシ
一死亡者ノ數ヲ擧クル方法ト同シ
一出産届出以前ニ死亡シタル者ノ數ハ前項ノ方法ニ據リ生産死亡ノ兩項ニ各記入スルハ勿論トス
一結婚離婚ノ數ハ本年中結婚離婚ヲ届出タル件數即組數ヲ記シ且結婚ハ婦又ハ婿ヲ迎ヘタル方離婚ハ之ヲ出シタル方ニ於テ記入スヘシ
一年末配偶ノ欄ニハ本年十二月三十一日調ノ戸籍ニ現ニ登記シアル夫婦ノ組數ヲ記入スヘシ
一附属表生産届洩者ハ例ハ明治二十三年ノ調査ニ在テハ該年ノ登記目錄ニ就キ二十二年以前ニ出産シテ二十三年中ニ届出タル者ノ數ヲ二十二年生ヨリ十八年以前マテノ五項ニ別チ記スヘシ爾後此例ニ據リ毎年繰上クルモノトス
一同表乘兒ハ本年中ニ届出タル者ニ就キ本年中ノ出生ト推測シタル者ハ本年生ノ項ニ前年出生ト推測シタル者前年以前ニ區別シテ記入スヘシ
一同表死亡届洩者ハ生産届洩者ヲ擧クル如ク五項ニ區別スルニ及ハス總テ一項ニ合記スヘシ
一同表本籍不詳者ハ本年中行旅死亡人取扱規則ニ依リ取扱ヒタル數ヲ記入スヘシ但調査ノ際揭示中ニ係ル者ハ之ヲ除キ本籍不詳ト決シタル年ノ數ニ記入スヘシ
一同表死産ハ姙娠后四箇月以上ニシテ死胎分娩シタル者ヲ云フ其數ハ素ヨリ登記目錄ニ記載セサルモノナルヲ以テ人民各自ノ届書ニ據リ死産ノ月日ニ拘ハラス本年一月一日ヨリ二月三十一日迄ニ届出タル數ヲ記入スヘシ但死亡數ヘハ算入スヘカラス

第十七表 〔年報〕

現住人出産死亡表 〔明治何年〕 廳名

市街名	出産			死亡		
	公生	私生	合計	有籍者	本籍不詳者	合計
	男	女	男女	男	女	男女
	男	女	男女	男	女	男女
	男	女	男女	男	女	男女
	男	女	男女	男	女	男女
	男	女	男女	男	女	男女
	男	女	男女	男	女	男女
	男	女	男女	男	女	男女
	男	女	男女	男	女	男女
	男	女	男女	男	女	男女
	男	女	男女	男	女	男女

一本表ハ市區及人口二萬五千以上アル町村ニ限リ差出スモノトス

一本表ハ本籍人ノ其市街ヲ出テ住シテ出生死亡シタル者ヲ除キ他ヨリ其市街ニ來リ住シテ出生死亡シタル者ヲ加ヘテ調査スヘシ

一生産死産死亡ノ記入方ハ第十五表ノ説明ニ同シ但本年ニ係ル數ノミヲ記入シ前年以前ノ屆洩ニ係ル者ハ記入ニ及ハス

第二十九表　年報

藥用阿片受拂（明治何年度）					廳名
受入	受入年月日	百分中モルヒ子含量	瓶數	一瓶ノ價	代價
	前年度ヨリ越高	十乃至十一			
	何年何月何日	同			
計					
拂下					

拂下年月日	百分中モルヒ子含量	瓶數	代價	藥舖住所	氏名
	十乃至十一			何國何郡市何町村	
	同				
計					
受拂殘					
阿片何瓶					

明治何年三月三十一日現在高

第六十表　年

種痘明細表（明治何年）									廳名
類別		滿一年マテ	一年以上滿二年マテ	二年以上滿五年マテ	五年以上滿十年マテ	十五以上滿十五年マテ	十五年以上	合計
初種	善							
	不善							
	疾病事故ニテ種痘セサルモノ							
再種	善							
	不善							
	疾病事故ニテ種痘セサルモノ							

報

三種 善感 不善感 疾病事故ニテ種痘セサルモノ

合計

一種痘規則第三條ニ據リ接種セシ者ハ表中ニ算入セス表末ニ於テ其人員及感否ノ別ヲ附記スヘシ

一一年以上滿二年マテノ欄ヘハ一年一月以上滿二年マテ二年以上滿五年マテノ欄ヘハ二年一月以上滿五年マテノ者ヲ記入スヘシ以下諸欄皆同シ

一初種ノ欄内ヘハ小兒出生后滿一年以内ニ種痘セシモノ、善感若クハ疾病事故ニテ種痘セサルモノ、數ヲ記入スヘシ其不善感ナルモノハ種痘規則第一條後段ニ依リテ再三種ヲ行ヘル後善感ナレハ善感不善感ナレハ不善感トシテ本欄内ヘ記入スヘシ又疾病事故ノ止ミ種痘セシモノ、數ハ例ヘハ年齡六年ニ至リ疾病事故止ミタリトスルトキハ年齡ノ滿一年以内ニアラサルモ種痘規則第一條ノ手續ヲ履ミ初種ノ五年以上滿十年マテノ欄内ヘ記入スヘシ再種、三種ノ欄モ疾病事故ハ此例ニ同シ

第六十一表 年報

醫事娼妓黴毒撿査及中毒表（明治何年） 廳名

病院	官立	公立	私立	計	醫師	産婆	內務省免許	地方廳免許	藥劑師	藥種商	製藥者	黴毒撿査所
娼妓一日平均人員	黴毒撿査	眞性患者	假性患者	不患者	計	中毒	河豚	患者	死亡	何々	同	同	計	同	同

一上欄ハ年末ノ現在數ヲ揭ク可シ

一法律第十号藥品營業幷藥品取扱規則實施前ニ係ル內務省免許藥輔ハ藥劑師ノ項ニ登記スヘシ

一娼妓一日平均人員ハ一箇年間每月末ノ現在數ヲ以テ平均スヘシ

一黴毒檢査ハ一箇年間檢査シタル員數ニシテ例ヘハ一人ノ娼妓毎月四回檢査ヲ受クル時ハ卽チ一箇年間四十八人ト算スルカ如シ

一中毒患者ノ項ニハ治癒死亡ニ拘ハラス本年中發病セシ人員ヲ記入シ死亡ノ項ニハ前年ノ發病ト本年ノ發病トヲ問ハス本年中死亡セシ人員ヲ記入スヘシ

第六十二表　死亡者年齢區別表　（明治何年）　廳名

年齡		第一類 性病	第二類 傳染病及營養的病	第三類 皮膚骨及筋關節病	第四類 血行器病	第五類 神經系及五官病	第六類 呼吸器病	第七類 消化器病	第八類 泌尿及生殖器病	第九類 外襲性變死症	第十一類 中毒原因不詳	第十二類 合計	第七類ノ內 肺病
一年	男												
同	女												
二年													
三年													
四年													

年齡	合計
不詳	
一年	
二年	
三年	
四年	
五年	
六年	
七年	
八年	
九年	
十年	
十一年	
十二年	
十三年	
十四年	
十五年	
十六年	
十七年	
十八年	
十九年	
二十年	
二十一年	
二十二年	
二十三年	
二十四年	
二十五年	
二十六年	
二十七年	
二十八年	
二十九年	
三十年	
三十一年	
三十二年	
三十三年	
三十四年	
三十五年	
三十六年	
三十七年	
三十八年	
三十九年	
四十年	
四十一年	
四十二年	
四十三年	
四十四年	
四十五年	
四十六年	
四十七年	
四十八年	
四十九年	
五十年	
五十一年	
五十二年	
五十三年	
五十四年	
五十五年	
五十六年	
五十七年	
五十八年	
五十九年	
六十年	
六十一年	
六十二年	
六十三年	
六十四年	
六十五年	
六十六年	
六十七年	
六十八年	
六十九年	
七十年	
七十一年	
七十二年	
七十三年	
七十四年	
七十五年	
七十六年	
七十七年	
七十八年	
七十九年	
八十年	
八十一年	
八十二年	
八十三年	
八十四年	
八十五年	
八十六年	
八十七年	
八十八年	
八十九年	
九十年	
九十一年	
九十二年	
九十三年	
九十四年	
九十五年	
九十六年	
九十七年	
九十八年	
九十九年	
百年	
百一年	
百二年	
百三年	
百四年	
百五年	
百六年	
百七年	
百八年	
百九年	
百十年	
百十一年	
百十二年	
百十三年	
百十四年	
百十五年	
百十六年	
百十七年	
百十八年	
百十九年	
百二十年	
百二十一年	
百二十二年	
百二十三年	
百二十四年	
百二十五年	
百二十六年	
百二十七年	
百二十八年	
百二十九年	
百三十年	
百三十一年	
百三十二年	
百三十三年	
百三十四年	
百三十五年	
百三十六年	
百三十七年	
百三十八年	
百三十九年	
百四十年	
百四十一年	
百四十二年	
百四十三年	
百四十四年	
百四十五年	
百四十六年	
百四十七年	
百四十八年	
百四十九年	
百五十年	
百五十一年	
百五十二年	
百五十三年	
百五十四年	
百五十五年	
百五十六年	
百五十七年	
百五十八年	
百五十九年	
百六十年	
百六十一年	
百六十二年	
百六十三年	
百六十四年	
百六十五年	
百六十六年	
百六十七年	
百六十八年	
百六十九年	
百七十年	
百七十一年	
百七十二年	
百七十三年	
百七十四年	
百七十五年	
百七十六年	
百七十七年	
百七十八年	
百七十九年	
百八十年	
百八十一年	
百八十二年	
百八十三年	
百八十四年	
百八十五年	
百八十六年	
百八十七年	
百八十八年	
百八十九年	
百九十年	
百九十一年	
百九十二年	
百九十三年	
百九十四年	
百九十五年	
百九十六年	
百九十七年	
百九十八年	
百九十九年	
二百年	
二百一年	
二百二年	
二百三年	
二百四年	
二百五年	
二百六年	
二百七年	
二百八年	
二百九年	
二百十年	
二百十一年	
二百十二年	
二百十三年	
二百十四年	
二百十五年	
二百十六年	
二百十七年	
二百十八年	
二百十九年	
二百二十年	
二百二十一年	
二百二十二年	
二百二十三年	
二百二十四年	
二百二十五年	
二百二十六年	
二百二十七年	
二百二十八年	
二百二十九年	
二百三十年	
二百三十一年	
二百三十二年	
二百三十三年	
二百三十四年	
二百三十五年	
二百三十六年	
二百三十七年	
二百三十八年	
二百三十九年	
二百四十年	
二百四十一年	
二百四十二年	
二百四十三年	
二百四十四年	
二百四十五年	
二百四十六年	
二百四十七年	
二百四十八年	
二百四十九年	
二百五十年	
二百五十一年	
二百五十二年	
二百五十三年	
二百五十四年	
二百五十五年	
二百五十六年	
二百五十七年	
二百五十八年	
二百五十九年	
二百六十年	
二百六十一年	
二百六十二年	
二百六十三年	
二百六十四年	
二百六十五年	
二百六十六年	
二百六十七年	
二百六十八年	
二百六十九年	
二百七十年	
二百七十一年	
二百七十二年	
二百七十三年	
二百七十四年	
二百七十五年	
二百七十六年	
二百七十七年	
二百七十八年	
二百七十九年	
二百八十年	
二百八十一年	
二百八十二年	
二百八十三年	
二百八十四年	
二百八十五年	
二百八十六年	
二百八十七年	
二百八十八年	
二百八十九年	
二百九十年	
二百九十一年	
二百九十二年	
二百九十三年	
二百九十四年	
二百九十五年	
二百九十六年	
二百九十七年	
二百九十八年	
二百九十九年	
三百年	
三百一年	
三百二年	
三百三年	
三百四年	
三百五年	
三百六年	
三百七年	
三百八年	
三百九年	
三百十年	
三百十一年	
三百十二年	
三百十三年	
三百十四年	
三百十五年	
三百十六年	
三百十七年	
三百十八年	
三百十九年	
三百二十年	
三百二十一年	
三百二十二年	
三百二十三年	
三百二十四年	
三百二十五年	
三百二十六年	
三百二十七年	
三百二十八年	
三百二十九年	
三百三十年	
三百三十一年	
三百三十二年	
三百三十三年	
三百三十四年	
三百三十五年	
三百三十六年	
三百三十七年	
三百三十八年	
三百三十九年	
三百四十年	
三百四十一年	
三百四十二年	
三百四十三年	
三百四十四年	
三百四十五年	
三百四十六年	
三百四十七年	
三百四十八年	
三百四十九年	
三百五十年	
三百五十一年	
三百五十二年	
三百五十三年	
三百五十四年	
三百五十五年	
三百五十六年	
三百五十七年	
三百五十八年	
三百五十九年	
三百六十年	
三百六十一年	
三百六十二年	
三百六十三年	
三百六十四年	
三百六十五年	
三百六十六年	
三百六十七年	
三百六十八年	
三百六十九年	
三百七十年	
三百七十一年	
三百七十二年	
三百七十三年	
三百七十四年	
三百七十五年	
三百七十六年	
三百七十七年	
三百七十八年	
三百七十九年	
三百八十年	
三百八十一年	
三百八十二年	
三百八十三年	
三百八十四年	
三百八十五年	
三百八十六年	
三百八十七年	
三百八十八年	
三百八十九年	
三百九十年	
三百九十一年	
三百九十二年	
三百九十三年	
三百九十四年	
三百九十五年	
三百九十六年	
三百九十七年	
三百九十八年	
三百九十九年	
四百年	
四百一年	
四百二年	
四百三年	
四百四年	
四百五年	
四百六年	
四百七年	
四百八年	
四百九年	
四百十年	
四百十一年	
四百十二年	
四百十三年	
四百十四年	
四百十五年	
四百十六年	
四百十七年	
四百十八年	
四百十九年	
四百二十年	
四百二十一年	
四百二十二年	
四百二十三年	
四百二十四年	
四百二十五年	
四百二十六年	
四百二十七年	
四百二十八年	
四百二十九年	
四百三十年	
四百三十一年	
四百三十二年	
四百三十三年	
四百三十四年	
四百三十五年	
四百三十六年	
四百三十七年	
四百三十八年	
四百三十九年	
四百四十年	
四百四十一年	
四百四十二年	
四百四十三年	
四百四十四年	
四百四十五年	
四百四十六年	
四百四十七年	
四百四十八年	
四百四十九年	
四百五十年	
四百五十一年	
四百五十二年	
四百五十三年	
四百五十四年	
四百五十五年	
四百五十六年	
四百五十七年	
四百五十八年	
四百五十九年	
四百六十年	
四百六十一年	
四百六十二年	
四百六十三年	
四百六十四年	
四百六十五年	
四百六十六年	
四百六十七年	
四百六十八年	
四百六十九年	
四百七十年	
四百七十一年	
四百七十二年	
四百七十三年	
四百七十四年	
四百七十五年	
四百七十六年	
四百七十七年	
四百七十八年	
四百七十九年	
四百八十年	
四百八十一年	
四百八十二年	
四百八十三年	
四百八十四年	
四百八十五年	
四百八十六年	
四百八十七年	
四百八十八年	
四百八十九年	
四百九十年	
四百九十一年	
四百九十二年	
四百九十三年	
四百九十四年	
四百九十五年	
四百九十六年	
四百九十七年	
四百九十八年	
四百九十九年	
五百年	
五百一年	
五百二年	
五百三年	
五百四年	
五百五年	
五百六年	
五百七年	
五百八年	
五百九年	
五百十年	
五百十一年	
五百十二年	
五百十三年	
五百十四年	
五百十五年	
五百十六年	
五百十七年	
五百十八年	
五百十九年	
五百二十年	
五百二十一年	
五百二十二年	
五百二十三年	
五百二十四年	
五百二十五年	
五百二十六年	
五百二十七年	
五百二十八年	
五百二十九年	
五百三十年	
五百三十一年	
五百三十二年	
五百三十三年	
五百三十四年	
五百三十五年	
五百三十六年	
五百三十七年	
五百三十八年	
五百三十九年	
五百四十年	
五百四十一年	
五百四十二年	
五百四十三年	
五百四十四年	
五百四十五年	
五百四十六年	
五百四十七年	
五百四十八年	
五百四十九年	
五百五十年	
五百五十一年	
五百五十二年	
五百五十三年	
五百五十四年	
五百五十五年	
五百五十六年	
五百五十七年	
五百五十八年	
五百五十九年	
五百六十年	
五百六十一年	
五百六十二年	
五百六十三年	
五百六十四年	
五百六十五年	
五百六十六年	
五百六十七年	
五百六十八年	
五百六十九年	
五百七十年	
五百七十一年	
五百七十二年	
五百七十三年	
五百七十四年	
五百七十五年	
五百七十六年	
五百七十七年	
五百七十八年	
五百七十九年	
五百八十年	
五百八十一年	
五百八十二年	
五百八十三年	
五百八十四年	
五百八十五年	
五百八十六年	
五百八十七年	
五百八十八年	
五百八十九年	
五百九十年	
五百九十一年	
五百九十二年	
五百九十三年	
五百九十四年	
五百九十五年	
五百九十六年	
五百九十七年	
五百九十八年	
五百九十九年	
六百年	
六百一年	
六百二年	
六百三年	
六百四年	
六百五年	
六百六年	
六百七年	
六百八年	
六百九年	
六百十年	
六百十一年	
六百十二年	
六百十三年	
六百十四年	
六百十五年	
六百十六年	
六百十七年	
六百十八年	
六百十九年	
六百二十年	
六百二十一年	
六百二十二年	
六百二十三年	
六百二十四年	
六百二十五年	
六百二十六年	
六百二十七年	
六百二十八年	
六百二十九年	
六百三十年	
六百三十一年	
六百三十二年	
六百三十三年	
六百三十四年	
六百三十五年	
六百三十六年	
六百三十七年	
六百三十八年	
六百三十九年	
六百四十年	
六百四十一年	
六百四十二年	
六百四十三年	
六百四十四年	
六百四十五年	
六百四十六年	
六百四十七年	
六百四十八年	
六百四十九年	
六百五十年	
六百五十一年	
六百五十二年	
六百五十三年	
六百五十四年	
六百五十五年	
六百五十六年	
六百五十七年	
六百五十八年	
六百五十九年	
六百六十年	
六百六十一年	
六百六十二年	
六百六十三年	
六百六十四年	
六百六十五年	
六百六十六年	
六百六十七年	
六百六十八年	
六百六十九年	
六百七十年	
六百七十一年	
六百七十二年	
六百七十三年	
六百七十四年	
六百七十五年	
六百七十六年	
六百七十七年	
六百七十八年	
六百七十九年	
六百八十年	
六百八十一年	
六百八十二年	
六百八十三年	
六百八十四年	
六百八十五年	
六百八十六年	
六百八十七年	
六百八十八年	
六百八十九年	
六百九十年	
六百九十一年	
六百九十二年	
六百九十三年	
六百九十四年	
六百九十五年	
六百九十六年	
六百九十七年	
六百九十八年	
六百九十九年	
七百年	
七百一年	
七百二年	
七百三年	
七百四年	
七百五年	
七百六年	
七百七年	
七百八年	
七百九年	
七百十年	
七百十一年	
七百十二年	
七百十三年	
七百十四年	
七百十五年	
七百十六年	
七百十七年	
七百十八年	
七百十九年	
七百二十年	
七百二十一年	
七百二十二年	
七百二十三年	
七百二十四年	
七百二十五年	
七百二十六年	
七百二十七年	
七百二十八年	
七百二十九年	
七百三十年	
七百三十一年	
七百三十二年	
七百三十三年	
七百三十四年	
七百三十五年	
七百三十六年	
七百三十七年	
七百三十八年	
七百三十九年	
七百四十年	
七百四十一年	
七百四十二年	
七百四十三年	
七百四十四年	
七百四十五年	
七百四十六年	
七百四十七年	
七百四十八年	
七百四十九年	
七百五十年	
七百五十一年	
七百五十二年	
七百五十三年	
七百五十四年	
七百五十五年	
七百五十六年	
七百五十七年	
七百五十八年	
七百五十九年	
七百六十年	
七百六十一年	
七百六十二年	
七百六十三年	
七百六十四年	
七百六十五年	
七百六十六年	
七百六十七年	
七百六十八年	
七百六十九年	
七百七十年	
七百七十一年	
七百七十二年	
七百七十三年	
七百七十四年	
七百七十五年	
七百七十六年	
七百七十七年	
七百七十八年	
七百七十九年	
七百八十年	
七百八十一年	
七百八十二年	
七百八十三年	
七百八十四年	
七百八十五年	
七百八十六年	
七百八十七年	
七百八十八年	
七百八十九年	
七百九十年	
七百九十一年	
七百九十二年	
七百九十三年	
七百九十四年	
七百九十五年	
七百九十六年	
七百九十七年	
七百九十八年	
七百九十九年	
八百年	
八百一年	
八百二年	
八百三年	
八百四年	
八百五年	
八百六年	
八百七年	
八百八年	
八百九年	
八百十年	
八百十一年	
八百十二年	
八百十三年	
八百十四年	
八百十五年	
八百十六年	
八百十七年	
八百十八年	
八百十九年	
八百二十年	
八百二十一年	
八百二十二年	
八百二十三年	
八百二十四年	
八百二十五年	
八百二十六年	
八百二十七年	
八百二十八年	
八百二十九年	
八百三十年	
八百三十一年	
八百三十二年	
八百三十三年	
八百三十四年	
八百三十五年	
八百三十六年	
八百三十七年	
八百三十八年	
八百三十九年	
八百四十年	
八百四十一年	
八百四十二年	
八百四十三年	
八百四十四年	
八百四十五年	
八百四十六年	
八百四十七年	
八百四十八年	
八百四十九年	
八百五十年	
八百五十一年	
八百五十二年	
八百五十三年	
八百五十四年	
八百五十五年	
八百五十六年	
八百五十七年	
八百五十八年	
八百五十九年	
八百六十年	
八百六十一年	
八百六十二年	
八百六十三年	
八百六十四年	
八百六十五年	
八百六十六年	
八百六十七年	
八百六十八年	
八百六十九年	
八百七十年	
八百七十一年	
八百七十二年	
八百七十三年	
八百七十四年	
八百七十五年	
八百七十六年	
八百七十七年	
八百七十八年	
八百七十九年	
八百八十年	
八百八十一年	
八百八十二年	
八百八十三年	
八百八十四年	
八百八十五年	
八百八十六年	
八百八十七年	
八百八十八年	
八百八十九年	
八百九十年	
八百九十一年	
八百九十二年	
八百九十三年	
八百九十四年	
八百九十五年	
八百九十六年	
八百九十七年	
八百九十八年	
八百九十九年	
九百年	
九百一年	
九百二年	
九百三年	
九百四年	
九百五年	
九百六年	
九百七年	
九百八年	
九百九年	
九百十年	
九百十一年	
九百十二年	
九百十三年	
九百十四年	
九百十五年	
九百十六年	
九百十七年	
九百十八年	
九百十九年	
九百二十年	
九百二十一年	
九百二十二年	
九百二十三年	
九百二十四年	
九百二十五年	
九百二十六年	
九百二十七年	
九百二十八年	
九百二十九年	
九百三十年	
九百三十一年	
九百三十二年	
九百三十三年	
九百三十四年	
九百三十五年	
九百三十六年	
九百三十七年	
九百三十八年	
九百三十九年	
九百四十年	
九百四十一年	
九百四十二年	
九百四十三年	
九百四十四年	
九百四十五年	
九百四十六年	
九百四十七年	
九百四十八年	
九百四十九年	
九百五十年	
九百五十一年	
九百五十二年	
九百五十三年	
九百五十四年	
九百五十五年	
九百五十六年	
九百五十七年	
九百五十八年	
九百五十九年	
九百六十年	
九百六十一年	
九百六十二年	
九百六十三年	
九百六十四年	
九百六十五年	
九百六十六年	
九百六十七年	
九百六十八年	
九百六十九年	
九百七十年	
九百七十一年	
九百七十二年	
九百七十三年	
九百七十四年	
九百七十五年	
九百七十六年	
九百七十七年	
九百七十八年	
九百七十九年	
九百八十年	
九百八十一年	
九百八十二年	
九百八十三年	
九百八十四年	
九百八十五年	
九百八十六年	
九百八十七年	
九百八十八年	
九百八十九年	
九百九十年	
九百九十一年	
九百九十二年	
九百九十三年	
九百九十四年	
九百九十五年	
九百九十六年	
九百九十七年	
九百九十八年	
九百九十九年	
千年	
千一年	
千二年	
千三年	
千四年	
千五年	
千六年	
千七年	
千八年	
千九年	
千十年	
千十一年	
千十二年	
千十三年	
千十四年	
千十五年	
千十六年	
千十七年	
千十八年	
千十九年	
千二十年	
千二十一年	
千二十二年	
千二十三年	
千二十四年	
千二十五年	
千二十六年	
千二十七年	
千二十八年	
千二十九年	
千三十年	
千三十一年	
千三十二年	
千三十三年	
千三十四年	
千三十五年	
千三十六年	
千三十七年	
千三十八年	
千三十九年	
千四十年	
千四十一年	
千四十二年	
千四十三年	
千四十四年	
千四十五年	
千四十六年	
千四十七年	
千四十八年	
千四十九年	
千五十年	
千五十一年	
千五十二年	
千五十三年	
千五十四年	
千五十五年	
千五十六年	
千五十七年	
千五十八年	
千五十九年	
千六十年	
千六十一年	
千六十二年	
千六十三年	
千六十四年	
千六十五年	
千六十六年	
千六十七年	
千六十八年	
千六十九年	
千七十年	
千七十一年	
千七十二年	
千七十三年	
千七十四年	
千七十五年	
千七十六年	
千七十七年	
千七十八年	
千七十九年	
千八十年	
千八十一年	
千八十二年	
千八十三年	
千八十四年	
千八十五年	
千八十六年	
千八十七年	
千八十八年	
千八十九年	
千九十年	
千九十一年	
千九十二年	
千九十三年	
千九十四年	
千九十五年	
千九十六年	
千九十七年	
千九十八年	
千九十九年	
千百年	
千百一年	
千百二年	
千百三年	
千百四年	
千百五年	
千百六年	
千百七年	
千百八年	
千百九年	
千百十年	
千百十一年	
千百十二年	
千百十三年	
千百十四年	
千百十五年	
千百十六年	
千百十七年	
千百十八年	
千百十九年	
千百二十年	
千百二十一年	
千百二十二年	
千百二十三年	
千百二十四年	
千百二十五年	
千百二十六年	
千百二十七年	
千百二十八年	
千百二十九年	
千百三十年	
千百三十一年	
千百三十二年	
千百三十三年	
千百三十四年	
千百三十五年	
千百三十六年	
千百三十七年	
千百三十八年	
千百三十九年	
千百四十年	
千百四十一年	
千百四十二年	
千百四十三年	
千百四十四年	
千百四十五年	
千百四十六年	
千百四十七年	
千百四十八年	
千百四十九年	
千百五十年	
千百五十一年	
千百五十二年	
千百五十三年	
千百五十四年	
千百五十五年	
千百五十六年	
千百五十七年	
千百五十八年	
千百五十九年	
千百六十年	
千百六十一年	
千百六十二年	
千百六十三年	
千百六十四年	
千百六十五年	
千百六十六年	
千百六十七年	
千百六十八年	
千百六十九年	
千百七十年	
千百七十一年	
千百七十二年	
千百七十三年	
千百七十四年	
千百七十五年	
千百七十六年	
千百七十七年	
千百七十八年	
千百七十九年	
千百八十年	
千百八十一年	
千百八十二年	
千百八十三年	
千百八十四年	
千百八十五年	
千百八十六年	
千百八十七年	
千百八十八年	
千百八十九年	
千百九十年	
千百九十一年	
千百九十二年	
千百九十三年	
千百九十四年	
千百九十五年	
千百九十六年	
千百九十七年	
千百九十八年	
千百九十九年	
千二百年	
千二百一年	
千二百二年	
千二百三年	
千二百四年	
千二百五年	
千二百六年	
千二百七年	
千二百八年	
千二百九年	
千二百十年	
千二百十一年	
千二百十二年	
千二百十三年	
千二百十四年	
千二百十五年	
千二百十六年	
千二百十七年	
千二百十八年	
千二百十九年	
千二百二十年	
千二百二十一年	
千二百二十二年	
千二百二十三年	
千二百二十四年	
千二百二十五年	
千二百二十六年	
千二百二十七年	
千二百二十八年	
千二百二十九年	
千二百三十年	
千二百三十一年	
千二百三十二年	
千二百三十三年	
千二百三十四年	
千二百三十五年	
千二百三十六年	
千二百三十七年	
千二百三十八年	
千二百三十九年	
千二百四十年	
千二百四十一年	
千二百四十二年	
千二百四十三年	
千二百四十四年	
千二百四十五年	
千二百四十六年	
千二百四十七年	
千二百四十八年	
千二百四十九年	
千二百五十年	
千二百五十一年	
千二百五十二年	
千二百五十三年	
千二百五十四年	
千二百五十五年	
千二百五十六年	
千二百五十七年	
千二百五十八年	
千二百五十九年	
千二百六十年	
千二百六十一年	
千二百六十二年	
千二百六十三年	
千二百六十四年	
千二百六十五年	
千二百六十六年	
千二百六十七年	
千二百六十八年	
千二百六十九年	
千二百七十年	
千二百七十一年	
千二百七十二年	
千二百七十三年	
千二百七十四年	
千二百七十五年	
千二百七十六年	
千二百七十七年	
千二百七十八年	
千二百七十九年	
千二百八十年	
千二百八十一年	
千二百八十二年	
千二百八十三年	
千二百八十四年	
千二百八十五年	
千二百八十六年	
千二百八十七年	
千二百八十八年	
千二百八十九年	
千二百九十年	
千二百九十一年	
千二百九十二年	
千二百九十三年	
千二百九十四年	
千二百九十五年	
千二百九十六年	
千二百九十七年	
千二百九十八年	
千二百九十九年	
千三百年	
千三百一年	
千三百二年	
千三百三年	
千三百四年	
千三百五年	
千三百六年	
千三百七年	
千三百八年	
千三百九年	
千三百十年	
千三百十一年	
千三百十二年	
千三百十三年	
千三百十四年	
千三百十五年	
千三百十六年	
千三百十七年	
千三百十八年	
千三百十九年	
千三百二十年	
千三百二十一年	
千三百二十二年	
千三百二十三年	
千三百二十四年	
千三百二十五年	
千三百二十六年	
千三百二十七年	
千三百二十八年	
千三百二十九年	
千三百三十年	
千三百三十一年	
千三百三十二年	
千三百三十三年	
千三百三十四年	
千三百三十五年	
千三百三十六年	
千三百三十七年	
千三百三十八年	
千三百三十九年	
千三百四十年	
千三百四十一年	
千三百四十二年	
千三百四十三年	
千三百四十四年	
千三百四十五年	
千三百四十六年	
千三百四十七年	
千三百四十八年	
千三百四十九年	
千三百五十年	
千三百五十一年	
千三百五十二年	
千三百五十三年	
千三百

参看

明治十六年六月二十五日衛生局ヨリ府縣へ通報

死亡表職業細目要領

一公務ニ關スル業トハ官吏其他諸官公廳ノ雇員、給仕、小使、門衛、牧場山野橋梁等ノ看守人ノ類

但陸海軍々人ニシテ陸海軍部内ニ於テ直ニ埋葬スル者ヲ除ク

一學術ニ關スル業トハ諸學校ノ教授教員生徒、神佛教導職、著譯者新聞記者、代言人、測量家、畫工、筆耕等ノ類

一醫業ニ關スル業トハ醫師、製藥師、産婆、獸醫、針治、按摩、灸治、看病人等ノ類

一農耕ニ關スル業トハ農作主、農作人、養蠶者、炭燒、牧畜家、植木職、獵師、樵夫等ノ類

一商賈ニ關スル業トハ凡百ノ商業ニ從事スル者及諸會社役員、商店ノ番頭、支配人、雇人等ノ類

一製造工作ニ關スル業トハ諸職工、其他製造工作ニ關スル業務等ノ類

一漁撈採藻ニ關スル業トハ漁夫、海苔採等ノ類

一舟揖ニ關スル業トハ船長以下水火夫及船中ニテ事業ヲ執ル者、渡守、筏乘等ノ類

一採礦ニ關スル業トハ採堀夫、熔礦夫等ノ類

一力役トハ人力車及荷車挽、土方、米搗、人足等ノ類

一其他諸業

右職業ハ各本人ノ現業ニ依リテ區別シ家族ニシテ戸主ト同一ナル職業ヲ採ル者ハ本人ノ部類ニ合算シ又家族ニシテ戸主ノ定職外ナル職業ヲ有セル者ハ其職業ノ部類ニ記入スルヲ要ス

但二業以上ヲ兼ヌル者ハ其主ナル業ヲ記ス

病類細目要領

（第一類）　傳染性病

（一）膓窒扶私

（二）發疹窒扶私

（三）赤痢

（四）亞細亞虎列拉

（五）實布的里亞　格魯布義膜炎

（六）痘瘡　（變痘　水痘）

（七）麻疹

（八）猩紅熱

（九）脚氣

（十）間歇熱

（十一）羅斯

（十二）膿毒症　敗血症

（十三）病院脫疽

（十四）百日咳

（十五）產蓐熱

（十六）流行性耳下腺炎惡性唾腺炎

（十七）流行性腦脊髓膜炎

（十八）急性關節僂麻質私急性レウマチス　レウスチス熱

（十九）花柳病淋病　梅毒　便毒　下疳

（二十）動物性病恐氷病　炭疽熱　馬鼻疽

其他傳染性疾患

（第二類）　發育及營養病

（發育的疾患　体質的疾患）

（廿一）初生兒ノ生活薄弱　產兒窒息

(廿二)造構誤常　畸形産
(廿三)齒牙病　生齒ニ因スル諸病
(廿四)腺病
(廿五)佝僂病
(廿六)小兒營養消耗症
(廿七)癩病
(廿八)全身水腫
(廿九)糖尿病(蜜尿)　尿崩(無味尿)
(三十)脫疽
(三十一)癌及腫瘍
(三十二)營養消耗
(三十三)矢苟兒倍倔
(三十四)貧血

(三十五)白血病
(三十六)甲狀腺腫
(三十七)紫斑病(ウエルホフキー氏發斑病)
(三十八)アジソン氏病(銅色病)
其他營養及發育ノ障害
(第三類)　皮膚及筋肉病
(三十九)血瘍
(四十)皮下結締織炎衝　筋肉炎　水脉炎
(四十一)初生兒ノ結締織硬化症
(四十二)臍諸患
(四十三)漸進性筋肉萎縮
其他ノ皮膚及皮下結締織ノ疾患
(第四類)　骨及關節病

(四十四)骨及關節炎　骨炎　骨膜炎　骨髓炎　骨瘍(カリエス)　骨疽(チクロースス)　關節膿瘍　骨折

(四十五)骨軟化

其他骨及關節ノ疾患

(第五類)　血行器病

(四十六)心嚢炎　心嚢水腫ヲ含ム

(四十七)心臟肥大　心臟膨大

(四十八)瓣膜病

(四十九)心臟破裂

(五十)心臟痲痺　心臟脂化

(五十一)動脈疾患

(五十二)靜脈疾患

其他血行器ノ疾患

(第六類)　神經系統及五官器病

(五十三)腦膜炎

(五十四)腦水腫

(五十五)腦炎

(五十六)卒中

(五十七)腦痲痺　腦貧血　腦充血

(五十八)精神病　癲狂

(五十九)脊髓炎　脊髓膜炎

(六十)脊髓勞

(六十一)脊髓痲痺　脊髓軟化ヲ含ム

(六十二)子癇

(六十三)癲癇　舞蹈病

(六十四)破傷風　牙關緊急

(六十五)痙攣搐搦　驚癎

其他神經病ヲ含ム

(第七類)　呼吸器病

(六十八)喉頭炎

(六十九)喉頭氣管支勞

(七　十)急性氣管支炎　毛樣氣管支炎

(七十一)慢性氣管支炎

(七十二)肺炎

(七十三)肺勞　肺結核

(七十四)咯血

(七十五)肺氣腫　喘息

(七十六)肺壞疽

(七十七)肺痲痺　肺水腫

(七十八)胸膜炎　胸水ヲ含ム

其他呼吸器ノ疾患

(第八類)　消化器病

(七十九)口舌疾患

(八　十)耳下腺疾患

(八十一)胃管疾患

(八十二)下腹炎　腹膜炎　下腹膿腫　骨盤膿腫

(八十三)腹水

(八十四)脫腸

(八十五)腸管壅塞

(八十六)胃加苔兒

(八十七)胃潰瘍

(八十八)胃狹窄

(八十九)吐血
(九十)腸出血
(九十一)腸破裂
(九十二)下利　腸加苔兒
(九十三)吐瀉病卽霍亂
(九十四)胃腸炎
(九十五)疝痛
(九十六)腸勞
(九十七)腸間膜勞
(九十八)脾臟疾患
(九十九)膽石病
(百)黄疸
(百一)肝臟炎

(百二)急性肝臟消耗症
(百三)慢性肝臟消耗症
(百四)其他消化器ノ疾患

(第九類)泌尿生殖器病

(百四)尿道及膀胱炎
(百五)其他ノ膀胱疾患及男子生殖器ノ諸患ヲ含ム
(百五)尿毒
(百六)石淋
(百七)腎臟諸病
(百八)女子生殖器病
(百九)子宮外姙娠
(百十)流産
(百十一)子宮破裂

(百十二)娠婦及分娩　乳房膿腫ヲ含ム
(百十三)子宮ノ疾患　分娩産褥ニ非サルモノ
(百十四)卵巣諸患
(第十類)　外襲性變死
(百十五)火傷　凍傷　日射病　電撃　爆發　壓死及誤死
　怪我　相撃　銃創　切創　刺創　咬傷　手術出血
　窒息　縊死　絞殺　溺死　自殺
(第十一類)　中毒病
(百十六)動物性及植物性及植物性毒
(百十七)鑛物性毒
(百十八)毒性瓦斯
(百十九)亞爾箇保兒中毒
一此類別中其他ノ疾患云々ト記載セシハ該類別中ニ列擧スヘキ各

病名ヲ省略セシ者ナルカ故ニ製表ニ當リ病名ヲ増加スルコトハ妨
ナシ
一各病名ヲ増加セシトキハ第何類中某病ヲ挿入セシコトヲ附記スル
ヲ要ス
一若シ類別中何レニ挿入スヘキカヲ確定シ難キモノアルトキハ別欄
ヲ設ケテ之ヲ掲ケ其事由ヲ附記スルヲ要ス

太政官　達第三十九號　明治十五年六月二十四日

統計ハ政治上其他諸般事物ノ結果ヲ證明スル重要ノ事件ナルニ因リ
材料ノ計査正確ナラサルヘカラス就テハ各省ニ於テ統計院ヘ協議ヲ
遂ケ各其主管ノ事務ニ付統計ノ方法相立審議候樣致スヘシ此旨相達
候事

　内務省　達乙第四十三號　明治十五年七月十三日

今般統計方法ノ儀ニ付太政官ヨリ第三十九號ヲ以テ別紙ノ通達有之

候ニ付テハ追々方法ノ改良モ可有之候得共元來正確ノ事實ヲ得ルハ專ラ警察署郡區役所戸長役場等ニ於テ材料蒐集ノ際注意ノ周到ナルト否トニ關スル儀ニ候條一層愼重ニ取扱候樣可致此旨相達候事

本縣ヘ縣達第三十八號（明治廿三年十月廿八日）

明治十九年縣達第三十五號統計材料樣式別冊ノ通リ改正ス

但町村役場ニ於テ調製ノ分ハ郡役所ノ檢查ヲ經テ進達スヘシ

（別冊）（摘載）

第十三號　賣藥調　郡市役所ヨリ縣廳ヘ進達期限　毎年四月

第十四號　乳牛及乳汁額調　毎年四月

以上第二類

一各號ニ記載凡例

一數量ハ其物ニ應シ何百何十何程ト記シ金圓ハ厘段別ハ歩ニ止メ石以下ハ反ニ止メ以下ハ四捨五入ノ算法ヲ用フヘシ

一用紙ハ美濃二ツ折トス且一紙ニ數件ヲ揭載スヘカラス尤全紙ヲ要セサル調書ハ半折ヲ用フルモ妨ナシ

但西洋紙其他ノ紙類ヲ用フルハ苦シカラスト雖モ寸法ハ美濃全紙若クハ半折ノ形ニ製スヘシ

一第四號調ハ明治二十三年度末ヲ第一回トシ仝二十七年度末ヲ第二回トシ爾後五年度目毎ニ年度末ノ現數ヲ調査スルモノトス

一第三十三號第四十八號第四十九號第五十號第五十二號第五十五號第五十七號調ハ明治二十五年ヲ第一回トシ仝三十年ヲ第二回トス爾後六年目毎ニ調査スヘシ

第一號　戸口調　町村役場ヨリ郡役所ヘ調達期限　毎年一月

第四號　本籍人生年別調　毎年一月

第五號　本籍人出産死亡婚姻調　毎年一月

第七號　現住人出産死亡調　毎年一月
第九號　種痘人員調　毎年一月
第二十一號　屠殺牛馬調　毎年一月
第二十二號　豚數調　毎六年目一月

以上第二類

記載凡例

一數量ハ其物ニ應シ何百何十何程ト記シ金圓ハ厘段別ハ歩ニ止メ石稱ハ合貫目ノモノニハ及ニ止メ以下ハ四捨五入ノ算法ヲ用フベシ

一用紙ハ美濃二ッ折トス且一紙ニ數件ヲ掲載スヘカラス尤全紙ヲ要セサル調書ハ半折ヲ用フルモ妨ケナシ

一第八號調ハ明治十九年ヲ第一回トシ仝二十四年ヲ第二回トス第十號第十三號第十四號第二十二號ハ明治二十五年ヲ第一回トシ仝二十年ヲ第二回トス孰モ爾後六年目毎ニ調査スルモノトス

第十三號　貢　藥　調　明治何年十二月三十一日現在　毎年調進達期限翌年四月

郡市名	製造人員	製造人員	受賣人員	受賣人員	行商人員
	方	數	方	數	數
何郡					
何郡					
何市					

第十四號　乳牛及乳汁額調　明治何年　毎年調進達期限翌年四月

郡市名	搾乳地名	乳牛數	乳汁高
何郡	何町		
何郡	何村		
何郡	何町		
何郡	何村		

何市	何町	何村

以下第二類

第十一号　戸口調　明治何年十二月三十一日現在　何市役所 何郡何町村役場

本籍人			現住戸數
男	女	計	

一本籍人ノ欄ニハ第二號調出ノ部ニ掲クル人員ヲモ含有スルモノトス（第二号ハ畧ス）

以下内務報告例第十一表ノ例ニ仝シ

第四号　本籍人生年別調　何市役所 何郡何町村役場

生年	男	女	計
明治二十三年生			
同二十二年生			
同二十一年生			
同二十年生			
生年不詳			
合計			

毎年調進達期限翌年一月

一男女ノ總數ハ第三號表ノ總數ト符合スルヲ要ス（第三號表ハ畧ス）

一此調ニ生年ヲ列記シ數十罫ヲ增スモ二段ニ短縮スヘカラス

以下内務報告例第十四表ニ同シ

第五号　本籍人出産死亡婚姻調　明治何年　何市役所 何郡何町村役場

表式其他トモ内務報告例第十五表ニ同シ

第七号　現住人出産死亡調　明治何年　福岡市

生産															
公生		私生		合計		死産		死亡							
								有籍者		本籍不詳者		合計			
男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女

毎年調進達期限翌年一月

一本表ハ福岡市ヨリ他ニ出テ住シテ出生死亡シタル者ヲ除キ他ヨリ福岡市内ニ來リ住シテ出生死亡シタル者ヲ加ヘテ調査スヘシ

一生産死産死亡ノ記入方ハ第五表ノ說明ニ同シ但本年ニ係ル數ノミヲ記入シ前年以前ノ屆洩ニ係ル者ハ記入ニ及ハス

第九号　種痘人員調　明治何年　何市役所 何郡何町村役場

毎年調進達期限翌年一月

表式其他トモ内務報告例第六十表ニ同シ

第二十一号　屠殺牛馬調　明治何年自一月至十二月　何市役所 何郡何町村役場

毎年調進達期限翌年一月

一屠牛	牝	何頭	
	牡	同	
	計	同	

一屠馬	牝	何頭	
	牡	同	
	計	同	

備考　前年ニ對スル増減ノ事由ヲ陳述スヘシ

第二十二号　豚數調　明治何年十二月三十一日現在　何市役所 何郡何町村役場

毎六年目調進達期限翌年一月

牝			
牡			
合計			

備考　前期（五ケ年前ノ調即チ第二回目ノ調査ヨリ云ヘハ第一回ヲ前期トス）ニ對スル増減ノ事由ヲ陳述スヘシ

附錄

第一章　獸醫

第一項　獸醫

太政官　布告第二十八號　明治十八年八月二十二日

獸醫免許規則別冊ノ通制定シ明治十九年七月一日ヨリ施行ス

（別冊）　獸醫免許規則

第一條　獸醫ハ獸醫學術ノ試驗ヲヲ受ケ農商務卿ヨリ開業免狀ヲ得タル者トス

第二條　開業免狀ヲ得ンコトヲ願出ツルトキハ試驗及第證書ヲ以テ地方廳ヲ經由シテ農商務省ニ願出ッヘシ

第三條　官立及府縣立ノ獸醫學校若クハ農學校ニ於テ獸醫學ノ卒業證書ヲ得タル者其證書ヲ以テ開業免狀ヲ得ンコトヲ願出ツルトキハ試驗ヲ要セスシテ免狀ヲ授與スルコトアルヘシ

第四條　外國ノ獸醫學校若クハ農學校ニ於テ獸醫學ヲ卒業シタル者或ハ外國ニ於テ獸醫ノ開業免狀ヲ得タル者其卒業證書又ハ開業證書ヲ以テ開業免狀ヲ得ンコトヲ願出ツルトキハ農商務卿ハ其證書ヲ審査シ試驗ヲ要セスシテ免狀ヲ授與スルコトアルヘシ

第五條　獸醫ニ乏シキ地ニ於テハ府知事縣令ノ具狀ニヨリ農商務卿ハ獸醫學術ノ試驗ヲ經サル者ト雖モ其履歷ニヨリ假開業免狀ヲ授與スルコトアルヘシ

第六條　開業免狀ヲ得ル者ハ免狀下付ノ節手數料金壹圓ヲ納ムヘシ

第七條　開業免狀ヲ得タル者ノ氏名本籍ハ農商務省ノ獸醫籍ニ登錄シ時々之ヲ公告スヘシ

第八條　開業免狀ヲ毀損亡失シ又ハ氏名本籍ノ變換ニヨリ免狀ノ書換ヲ願フ者ハ地方廳ヲ經由シテ農商務省ニ願出ツヘシ

第九條　開業免狀ノ書換ヲ願フ者ハ免狀下付ノ節手數料金貳拾五錢ヲ納ムヘシ

第十條　獸醫廢業又ハ死亡シタルトキハ地方廳ヲ經由シテ其開業免狀ヲ農商務省ニ返納スヘシ

第十一條　獸醫其業ニ關シ犯罪若クハ不正ノ行爲アルトキハ農商務卿其業ヲ停止若クハ禁止スルコトアルヘシ

但其事開業免狀ヲ得ルノ前ニ在リト雖モ本條ニ準シ處分スルコトアルヘシ

第十二條　前條ニ據リ獸醫業禁止ノ處分ヲ受ケタル者アルトキハ地方廳ニ於テ直チニ其開業免狀ヲ取上ケ之ヲ農商務省ニ返納スヘシ其停止ノ處分ニ係ルモノハ幾年月日間停業シタル旨ヲ開業免狀ニ裏書シ廳印ヲ捺シテ之ヲ本人ニ下付スヘシ

第十三條　農商務卿ハ獸醫業禁止ノ處分ヲ爲シタル後ト雖モ本人ノ行狀ヲ勘査シ特ニ其禁止ヲ解クコトアルヘシ

第十四條　官許ヲ得スシテ獸醫ノ業ヲ爲シタル者ハ五圓以上五拾圓以下ノ罰金ニ處ス

宮城縣請訓　（十七年八月二十日）

刑法第二百五十六條ニ官許ヲ得スシテ醫業ヲ爲シタル者云々トアリ該醫業トアルハ獸醫ヲモ包含セシヤ將タ包含セサル儀ト可得可然哉聊疑議ヲ生候條至急何分ノ御訓示有之度候也

司法省內訓　（十七年九月三日）

別紙請訓之趣刑法第二百五十六條ハ獸醫ヲ包含セサル儀ト可得此旨及內訓候也

廣島縣伺　（十八年九月五日）

今般第二十八號ヲ以テ獸醫免許規則布告相成候ニ付テハ從來本縣ニ於テ開業免狀ヲ授與シタル獸醫ハ規則第一條ニ據リ明治十九年六月三十日限リ消滅スル儀ニ候哉將タ本縣開業免狀ヲ諦認シ吏ニ御省ニ於テ免狀御下附可相成候儀ニ候哉

農商務省指令　（十八年九月十六日）

伺之趣ハ前段伺之通

青森縣伺　（十八年九月十六日）

今般本縣ニ於テ駒場農學校獸醫科得業生ヲ準判任御用掛ニ採用候處右ハ第二十八處布告獸醫免許規則第三條ニ依リ卒業證書ヲ以テ開業免狀ヲ得ンコヲ願出ルヤハ直ニ該免狀ヲ授與セラルヽモノト存候得共元來獸醫術得業生タルノ資格ヲ以テ採用致候モノニ候ヘハ在官中ハ別ニ開業免狀ヲ願出ス候トモ他開業獸醫ト同ク隨意ニ人民ノ求メニ應シ牛馬並ニ諸畜治療爲致候テ差閊無之候哉

農商務省指令　（十八年十月二日）

伺之趣官職之有無ヲ問ハス開業免狀ヲ有セサル者ハ人民ノ求メ

ニ應シ治療不相成儀ト可心得事

福島縣伺（十八年十月九日）

從來ノ馬醫ナルモノ數村ノ農馬病馬ニヲ集メ蹄剪刺絡等ノ術ヲ施シ來候處本年第二十八號公布實施後ハ右蹄剪刺絡共獸醫ニアラサレハ施術不相成儀ト可心得事

農商務省指令（十八年十月二十二日）

伺之通

岩手縣伺（十八年十一月六日）

本年十月二十六日第六百九十七號官報ニ福島縣ヨリ從來ノ馬醫ニテ農馬ヲ集メ蹄剪刺絡等ヲ施來候處本年第二十八號公布實施后ハ蹄剪刺絡共ニ獸醫ニアラサレハ不相成哉ノ伺ニ對シ伺ノ通ノ御指令ヲ掲載有之右刺絡ハ素ヨリ獸醫ノ職業ニ屬スレ𪜈蹄剪ハ鬣尾同樣半ハ家畜ノ修飾ナレハ獸醫ニアラサルモ施術不苦哉ニ被考候得共果シテ獸醫ニ限ルモノトセハ本縣ノ如キ家畜多數ニシテ地理不便或ハ獸醫アルモ蹄剪未熟ナル等ヨリ修飾ヲ怠リ爲メニ患畜ヲ釀生スル哉ノ恐モ有之ニ付右樣ノ場合ニ於テハ本縣限リ特ニ蹄剪業ヲ許可スルモ不苦候哉

農商務省指令（十八年十一月十九日）

伺之趣免許獸醫ニ非サレハ營業不相成儀ト可心得事

德島縣伺（二十年四月十三日）

獸醫ニアラサル者ニシテ蹄剪刺絡トモ施術營業相成ラサル旨曩ニ福島縣ヘ御指令ノ次第モ有之候處從來ノ慣行ニ據リ牛馬ニ灸治ヲ施ス如キハ猶獸醫ニ限ルヘキ哉果シテ然ラハ茲ニ營業トナスニアラス無賃ニシテ自己ノ技工ニ任セ親屬若クハ他ノ依賴ニ應シ一時牛馬ニ灸治ヲ施ス者アルトキハ明治十八年公布第二十八號第十四條ニ該當スル義ニ候哉將タ右所爲ノ如キハ營

業トナスニアラサルヲ以テ取締上後來不問ニ付シ可然哉

農商務省指令（二十年二月二十三日）

伺之趣免許獸醫ニアラサレハ施術スルヲ得ス

司法省　訓令第十號　明治二十年二月二十三日　裁判所

十八年八月第二十八號布告及十九年九月第十一號農商務省令ニ依リ今般農商務省ヨリ照會ノ趣モ有之候ニ付テハ自今獸醫免許規則第十四條並獸類傳染病豫防規則第十九條ノ犯罪其他刑法ニ正條アル獸醫ノ犯罪處斷致候節ハ其都度裁判宣告文謄本相添ヘ農商務省ヘ通知スヘシ

太政官　布達第十七號　明治十八年八月二十三日

今般第二十八號ヲ以テ獸醫免許規則布告相成候ニ付獸醫試驗規則左ノ通相定メ明治十九年三月一日ヨリ施行ス

獸醫開業試驗規則

第一條　獸醫ヲ開業セントスル者ハ此規則ニ據リ試驗ヲ受クヘシ

第二條　農商務卿ハ毎年二回獸醫開業ノ試驗ヲ擧行スヘシ

但試驗ヲ擧行スヘキ地方及試驗期日ハ六箇月前ニ告示スヘシ

第三條　農商務卿ハ主事者及ヒ試驗委員ヲ派遣シ試驗一切ノ事ヲ監督整理セシムヘシ

但時宜ニ依リ地方官ニ委任シ其試驗ヲ執行セシムルコトアルヘシ

第四條　農商務卿ハ獸醫學術試驗ヲ擧行スル毎ニ官立及府縣ノ獸醫學校若クハ農學校ニアリテ獸醫學ヲ專修シタル者又ハ地方ニ於テ名望アル獸醫學者等ヲ撰ヒ試驗委員ヲ命スルコトアルヘシ

第五條　獸醫學術試驗科目ハ左ノ如シ

第一　家畜解剖學

第二　同　生理學

第三　同　藥物學
第四　同　內科學
第五　同　外科學

第六條　獸醫學術ノ試驗ヲ受ケント欲スル者ハ其願書ニ修學ノ履歷書ヲ副ヘ毎年六月十二月中地方廳ニ差出スヘシ地方廳ハ翌月十五日迄ニ其書類ヲ取纏メ農商務省ニ進達スルモノトス

第七條　試驗問題ハ試驗主事者試驗委員協議ノ上之ヲ選定シ試驗場ニ臨ミ受驗人ヲシテ筆答セシムヘシ
但時宜ニ依リ口答セシムルコトアルヘシ

第八條　試驗主事者ハ試驗終ルノ後試驗委員ト與ニ其成績ヲ評定シ及第シタル者ニハ及第證書ヲ與フヘシ
但及第證書ニハ主事者試驗委員連署スヘシ

第九條　試驗ニ落第シタル者ハ六箇月ヲ經ルニ非レハ再試驗ヲ請フコトヲ得ス

右布達候事

栃木縣伺（十九年三月二十四日）
甲地ニ於テ獸醫開業試驗ノ許可ヲ得タルモノ病ノタメニ缺席シ乙地ニテ試驗ヲ願フ者ハ許可セラルヘキヤ
農商務省指令（十九年六月二十五日）
伺之趣試驗規則第六條ノ外許可セス
埼玉縣伺（十九年六月二十六日）
獸醫開業試驗規則第九條ニ試驗ニ落第シタル者ハ六ケ月ヲ經ルニアラサレハ再ヒ試驗ヲ請フコトヲ得ストアリ右ハ第一期試驗ニ落第セシ日ヨリ起算シ出願期月即當六月迄ハ未タ六ケ月ヲ經過セサル儀ニ付固ヨリ試驗ヲ請フコトヲ得サル儀ニ候哉將タ假令出願期月ハ未タ六ケ月ニ滿タサルモ試驗期月ニ至リ六ケ月以

上ニ渉ルトキハ出願不苦候哉

農商務省指令（十九年六月二十九日）

伺ノ趣前段見解ノ通

農商務省　告示第十九號　明治十八年八月三十一日

今般太政官第十七号ヲ以テ獣醫開業試験規則布達相成候ニ付受験人心得左ノ通相定候條此旨告示候事

受験人心得

第一條　獣醫開業試験ハ當省ヨリ告示シタル試験擧行地ノ中各自便宜ノ地ニ於テ之ヲ受クルコトヲ得ヘシ

第二條　獣醫開業試験ヲ受ケント欲スル者ハ本年第十七號布達獣醫開業試験規則第六條ニ準據シ其願書ヲ居住ノ地方廳ヘ差出スヘシ

第三條　前條許可ノ指令ヲ受ケタル者ハ當省ヨリ告示シタル期月迄ニ試験擧行ノ地ニ着シ宿所氏名ヲ其地方廳ヘ届出ヘシ

第四條　試験場ノ取締上不都合ト認ムヘキ所爲アル者ハ主事者ヨリ退場セシムルコトアルヘシ

願書式

獣醫開業試験願

住所（寄留ナレハ本籍ヲ併記スヘシ）

族籍

氏名　年　月　生

私儀何年何月何地ニ於テ獣醫開業試験相受度別紙書類相添ヘ此段奉願候也

年　月　日

右　氏　名　印

戸長　氏　名　印

農商務卿　訓令第三十九號　明治二十二年十一月二日　宛

獸醫開業免狀同假開業免狀下附願書及開業試驗願書ハ自今副本差出ニ及ハス

農商務省　告示第十五號　明治二十二年十一月三十日

開業獸醫（假開業獸醫ヲ除ク）ニシテ明治二十二年十二月一日以後轉居セシ者ハ其都度直ニ當省農務局ニ届出ヘシ

本縣　縣令第百二十號　明治廿年七月廿六日

獸醫組合設置手續左ノ通相定候來ル十一月ヲ期シ組合ヲ設置ス可シ

獸醫組合設置手續

第一條　獸醫ハ組合ヲ設ケ規約ヲ結ヒ其業務ニ關スル法律規則ヲ遵守シ左ノ目的ヲ達センコトヲ計ル可シ

一　獸醫術ヲ研究シ其進歩ヲ計ル事

一　獸類傳染病ヲ豫防スル事

一　獸類ノ健康ヲ保持増進スル事

一　業務上ノ改良ヲ計ル事

第二條　組合區畫ハ縣内全郡ヲ以テ大組合トシ便宜數郡ヲ合シテ小組合ト爲スヘシ

第三條　組合區畫ハ大小ニ區別スト雖モ規約ハ必ス大組合ヲ以テ締結スヘシ

第四條　管内居住ノ開業獸醫ハ必ス組合ニ加盟スヘシ

但管外ノ獸醫ニシテ管内ニ出張診察所ヲ設置スル者モ亦タ本條ニ準ス

第五條　組合獸醫ハ第一條各項實施ノ方法ヲ討議センカ爲メ一ケ年大集會二回小集會四回以上開會スヘシ

第六條　組合ニハ役員ヲ置キ第五條ニ掲クル會務其他組合諸般ノ事務ヲ辨理セシムヘシ

第七條　組合申合規程及議事則其他役員ノ任期人員撰擧法等ハ組合

獸醫適宜議定シ縣廳ノ認可ヲ受クヘシ

第八條　役員及組合獸醫ノ住所氏名ハ縣廳ニ屆出ツヘシ

但其更迭及住所氏名等變換セシトキモ亦タ本條ニ準ス

第九條　大小集會ノ開期及其場所等ハ開會一週日前縣廳ヘ屆出ツヘシ

第十條　獸類衛生上ノ利害得失ニ就キ意見アルトキハ組合會ノ衆議ヲ經役員ノ名ヲ以テ縣廳又ハ郡區役所ニ具狀スルヲ得

第十一條　組合ノ費用ハ總テ組合獸醫ノ負擔タルヘシ

本縣　縣令第百二十一號　明治二十年七月廿六日

獸醫心得左ノ通相定ム

獸醫心得

第一條　獸醫ハ本業上妨ケアル他ノ職業ヲ兼業スルヲ得ス

第二條　畜主ノ請求タリト雖モ診察シタル患畜ニアラサレハ猥リニ

藥劑ヲ授與ス可カラス

第三條　獸醫術開業免狀ヲ所持セサル門生若クハ藥局生等ナシテ診斷施療ヲ專任スルヲ得ス

第四條　施療ノ患畜斃死シタルトキハ甲號書式ニ據リ診斷書ヲ作リ其所有若ニ交付スヘシ

但別段ノ制規アルモノハ此ノ限ニアラス

第五條　變死ノ屍体ヲ檢案シタルトキハ乙號書式ニ據リ診斷書ヲ作リ其所有若又ハ管理者ニ交付スヘシ

第六條　他府縣人ノ所有ニ係ル獸類ト雖モ診斷治療ヲ爲シタルトキハ本縣ノ制規ニ準シテ處置スヘシ

第七條　出張診察所ヲ設置セント欲スル者ハ其設置スヘキ郡區町村名番地及出張定日ヲ記載シ郡區役所ヲ經テ屆出ツ可シ

但甲郡區居住ノ者ニシテ乙郡區所轄内ヘ設置セントスルトキハ甲

郡區役所ニ其旨届置乙郡區役所ヲ經テ届出ッヘシ

第八條　出張診察所ヲ地府縣下ヘ設置セントスルトキハ其設置ス
キ府縣ヘハ前條ノ書面ニ獸醫術開業免狀寫ヲ添ユヘシ尤モ他府縣
ノ者本管内ニ設置スル モ亦タ同シ

第九條　出張診察所ヲ廢止シタルトキモ亦其旨届出ッヘシ

第十條　管内甲ノ郡區所轄地ヨリ乙ノ郡區所轄地ヘ轉籍寄留スル者
ハ甲ノ郡區役所ニ其旨届置乙ノ郡區役所ヲ經テ届出ッヘシ
但一郡區所轄内甲ノ町村ヨリ乙ノ町村ヘ轉籍寄留スルモノモ郡
區役所ヲ經テ届出ッヘシ

第十一條　管内居住ノ者ニシテ他府縣ヘ轉籍寄留セント欲スル者ハ
移住地府縣國郡區町村名ヲ記シ郡區役所ヲ經テ速ニ届出ッヘシ

第十二條　他府縣居住ノ者ニシテ本縣下ヘ轉籍寄留シタルトキハ移
住地國郡區町村名ヲ記シタル書面ニ獸醫開業免狀寫ヲ添ヘ郡區役

所ヲ經テ速ニ届出ッヘシ

第十三條　管内獸醫ニシテ他府縣下ヘ寄留ノ者原籍ヘ復歸シタルト
キハ郡區役所ヲ經テ速ニ届出ッヘシ
但他府縣下獸醫ニシテ本縣内ヘ寄留ノ者原籍ヘ復歸スルトキモ
亦本條ニ同シ

第十四條　管内ノ者他府縣ニ於テ獸醫開業免狀ヲ得歸縣シタルトキ
ハ免狀寫ヲ添ヘ開業場所ヲ記シ郡區役所ヲ經テ速ニ届出ッヘシ

第十五條　獸醫術開業免狀ヲ遺失毀損若クハ氏名本籍ヲ變換シタル
時ハ其旨ヲ詳記シ郡區役所ヲ經テ免狀ノ下付又ハ書換ヲ速ニ農商
務大臣ヘ宛出願スヘシ
但廢業死亡ノ節ハ直ニ免狀ヲ返納スヘシ

第十六條　業務上ニ關シ官署ヘ差出ス書面ハ總テ獸醫ノ二字ヲ氏名
ノ肩ニ明記スヘシ

第十七條　一ケ年中施療ノ患畜ハ丙號書式ニ據リ毎年二月前年分ヲ製表シ郡區役所ヲ經テ差出スヘシ

第十八條　開業獸醫ハ丁號書式ニ據リ病毒處方箋ヲ作リ常ニ藥局ニ備ヘ置キ病畜ヲ診斷治療スル毎ニ詳細記入スヘシ二十一年縣令七号ニテ追加

甲號書式

診斷書

何縣下何國何郡區何町村幾番地

何某所有

一獸類　牛馬羊豚等ノ別ヲ記スヘシ

一種類　內國種外國種雜種ノ別ヲ記スヘシ

一牝牡區別　牝或ハ牡ト記スヘシ

一年齡　何歲

一毛色　何毛

一體質　神經質多血質淋巴質等ノ類ヲ記スヘシ

一病名　何病

一原因　本病ヲ發セシメタル實際ノ誘因ヲ記スヘシ

一症候　發病以來ノ重ナル症候ヲ記スヘシ

一處方　實際施療セシ方法ヲ記スヘシ

一經過　發病以來現今迄ノ經過ヲ記スヘシ

右之通診斷候處相違無之候也

年號月日

何縣何國何郡區何町村幾番地居住

獸醫氏名印

乙號書式

診斷書

何縣下何國何郡區何町村幾番地

何某所有

一獸類

一種類

一牝牡區別
一年齢
一斃死月日
一病名
右死体診按候處前書之通相違無之候也

何縣何國何郡區何町村幾番地居住
年號月日　獸醫氏名印

丙号書式　明治何年病畜表

病名	獸類 種類	牝	全治	不治	斃死	他轉撲殺	合計
	牡						

右之通ニ候也

年號月日　何國何郡區何村町番地　獸醫氏名印

丁號書式

總計

病名	年齢	畜類	畜主住所氏名	寫眞告
			郡町村番地	

種類	毛色	發病	全治	不治他轉撲殺
牝牡	体質	斃死		

原因
症候
處方經過

第二章　獸類傳染病

第一項　獸類傳染病

農商務省　省令第十一號　明治十九年九月十五日

獸類傳染病豫防規則左ノ通制定シ明治二十年一月一日ヨリ施行ス

但明治九年二月内務省乙第二十號達其他獸類ノ傳染病ニ關スル從前ノ達類ハ本規則施行ノ日ヨリ總テ廢止ス

獸類傳染病豫防規則

第一條　此規則ニ稱スル獸類トハ牛馬羊豕ヲ謂ヒ傳染病トハ左ノ諸病ヲ謂フ

一　牛疫
二　炭疽熱
三　鼻疽及皮疽
四　傳染性胸膜肺炎
五　傳染性鵝口瘡
六　羊痘

第二條　獸類傳染病ニ罹リタルトキ若シハ其症候ノ疑アルトキハ所有者又ハ管理者ハ其患畜ト健畜トヲ隔離シ獸醫ヲシテ患畜及之ニ接近シタル獸類ヲ診察セシムヘシ

第三條　獸醫ハ獸類ヲ診察シ傳染病ト鑑定シタルトキハ所有者又ハ管理者ト連署シ直ニ警察署及戸長役場ニ届出ツヘシ

第四條　獸醫牛疫ト診斷シタルトキハ警察官吏及獸醫立會ノ上所有者又ハ管理者ニ於テ之ヲ撲殺スヘシ

第五條　第四條ノ場合ニ於テハ三人以上ノ評價ヲ以テ發病前ノ價格ヲ定メ所有者ニ左ノ手當金ヲ下付スヘシ

評價金二十五圓マテ	手當金評價
十分ノ四	同
評價金五十圓マテ	
十分ノ三	同
評價金百圓マテ	
十分ノ二	同
評價金二百五十圓マテ	
十分ノ一	同
評價金五百圓マテ	
十五分ノ一	同
評價金千圓マテ	

二十五分ノ一

第六條　獸醫傳染病蔓延ノ兆候アリト認ムルトキハ直ニ其旨ヲ警察署及戸長役場ニ届出ツヘシ

第七條　第三條ノ届ヲ受ケタル戸長役場ニ於テハ其旨ヲ患畜所在ノ近傍ヘ榜示スヘシ

第八條　傳染病畜ノ全癒又ハ斃死シタルトキ若クハ傳染病畜ヲ撲殺シタルトキハ其所有者又ハ管理者ハ獸醫ノ診斷書ヲ添ヘ直ニ警察署及戸長役場ニ届出ツヘシ

第九條　傳染病ニ罹リテ斃死シ又ハ傳染病ニ由リテ撲殺シタル獸類並ニ其排泄物及之ニ觸レタル飼料藁草等ハ警察官吏ノ指定シタル場所ニ於テ燒棄スルカ又ハ消毒法ヲ施シ深六尺以上ノ坑ヲ掘リテ埋沒スヘシ

但埋沒シタル場所ハ十二箇年ノ後ニアラサレハ發掘スルヲ得ス

第十條　傳染病畜及其泄排物ニ觸レタル物品若クハ看護者ハ勿論其
　　患畜ノアリシ場所ハ獸類ノ所有者又ハ管理者ニ於テ消毒法ヲ行フ
　　ヘシ

第十一條　道路ニ於テ傳染病ニ罹リタル獸類若クハ其死體ハ警察官
　　吏ノ指定シタル場所ニアラサレハ轉移スルヲ許サス

第十二條　傳染病ノ流行ニ際シ警視總監北海道廳長官府縣知事ハ獸
　　類市場ノ開設及斃牛馬化成ニ關スル營業ヲ停止スルヲ得
　　但本條ノ場合ニ於テハ停止又ハ解停ノ都度其旨ヲ農商務大臣ニ
　　屆出ッヘシ

第十三條　第三條第六條第八條ノ屆ヲ受ケタル戶長役場ハ郡區役所
　　ヲ經警察署ハ直ニ所轄廳（警視廳北海道廳府縣廳ヲ云フ）ニ屆出ッヘシ

第十四條　警視總監北海道廳長官府縣知事ハ第三條及第六條ニ該當
　　スヘキ屆ヲ得タルトキハ直ニ其旨ヲ管內ニ報告シ且近接ノ地方廳
　　ニ報告スヘシ
　　但本條ノ報告ヲ得タル地方廳ハ直ニ其旨ヲ管內ニ報告スヘシ
　　（二十二年省令第六號ニテ本條及但書ノ告示ヲ報告ト改ム）

第十五條　警視總監北海道廳長官府縣知事ハ第十三條ノ屆ヲ得タル
　　トキハ每土曜日其旨ヲ農商務大臣ニ屆出ッヘシ

第十六條　警視總監北海道廳長官府縣知事ハ第六條ニ該當スヘキ屆
　　ヲ得タルトキ及管下接近ノ地方ニ傳染病蔓延ノ兆候アリトノ報告
　　ヲ得タルトキハ豫防線ヲ劃シ獸類出入往來ヲ停止スルヲ得（二十二年省令第六號ニテ除字アリ）

第十七條　牛疫蔓延ノ際ニ限リ其患畜ニ接近シタル牛ハ假令健康ノ
　　モノタリトモ警視總監北海道廳長官府縣知事ニ於テ之ヲ撲殺セシ
　　ムルヲ得（前條ニ同シ）
　　但本條ノ場合ニ於テハ第五條ノ手續ニ據リ評價金ノ金額ヲ下付

第十八條　牛疫ヲ除クノ外傳染病蔓延ノ際ニ於テハ警視總監北海道廳長官府縣知事ハ其患畜ヲ撲殺セシムルヲ得（全上）

但本條ノ場合ニ於テハ第五條ノ手續ニヨリ手當金ヲ下付スヘシ

第十九條　此規則ニ違背シタル獸醫及獸類所有者又ハ管理者ハ二圓以上二十五圓以下ノ罰金ニ處ス

但刑法ニ正條アルモノハ此限ニアラス

農商務省　告示第十八號　明治十九年九月十五日

當省令第十一號獸類傳染病豫防規則ニ關スル心得ノ事項左ノ如シ

第一項　獸類ノ狀態管理飼養ニ注意スルコト

第二項　獸類ノ身體畜舍器具等ヲ清潔ニスルコト

第三項　畜舍内ニ新鮮ノ大氣ヲ流通セシムルコト

第四項　畜舍内ノ温度ヲ調和スルコト

第五項　飲水ノ清淨ヲ要スルコト

第六項　適度ノ運動ヲ爲サシムルコト

第七項　健畜ト傳染病畜トヲ隔離スルコト

第八項　傳染病流行地方ニ於テハ病性ニ從ヒテ獸類ヲ區別シ成ルヘク獸類ノ出入往來ヲ爲サシメサルコト

第九項　傳染病畜所在ノ人口ニハ其病名ヲ標示スルコト

第十項　傳染病流行地近傍ノ牧場ニ放牧セサルコト

第十一項　牧場ニ於テ傳染病發生シタルトキハ直ニ其患畜ヲ適當ノ場所ニ圍ヒ置キ他ノ健畜ヲシテ之ニ接近セシメス又ハ放牧セサルコト

第十二項　傳染病流行ノ地方ニ於テハ獸類ノ市場屠場等ニ消毒法ヲ施スコト

第十三項　所有者又ハ管理者ヲ問ハス創傷潰瘍等アルモノハ患畜ニ觸接セサルコト

第十四項　傳染病流行ニ際シテ獸類發病シタルトキハ其何病タルヲ問ハス獸醫ヲシテ速ニ之ヲ診察セシムルコト

第十五項　傳染病流行ノ際ハ一層排水方ヲ怠ラサルコト

第十六項　牛疫若クハ傳染性胸膜肺炎ニ罹リテ斃死シ又ハ撲殺シタル死體藁草糞尿及其他ノ廢棄物等ヲ運搬スルニハ牛ヲ用フヘカラサルコト

第十七項　獸類炭疽熱ニ罹リテ斃死シ又ハ撲殺シタル死體藁草糞尿其他ノ廢棄物等ヲ運搬スルニハ牛馬ヲ用フヘカラサルコト

第十八項　鼻疽及皮疽流行ノ際ハ馬匹ヲ交尾セシメント欲セハ必ス獸醫ノ診察受ケヘキコト

第十九項　鼻疽及皮疽ニ罹リテ斃死シ又ハ撲殺シタル死體藁草糞尿及其他ノ廢棄物ヲ運搬スルニハ馬ヲ用フヘカラサルコト

第二十項　傳染病畜アル舍內及牧場ニ於テハ獸醫又ハ看護者ノ外ハ濫ニ患畜ニ接近セシメサルコト

第二十一項　傳染病ニ罹リテ斃死シ又ハ撲殺シタル獸類ノ死體排泄物ハ勿論之ニ使用シタル飼料藁草等ハ悉ク燒棄ツルコト

第二十二項　患畜ヲ撲殺場又ハ埋瘞場ニ移スノ途中他畜ノ近接ヲ避ケ且血液其他ノ排泄物ヲ遺脫セサルコト

第二十三項　糞尿ハ勿論其他汚穢物ハ總テ傳染病ノ媒介トナルモノナレハ務メテ之ヲ除去スルコト

第二十四項　傳染病流行地方ノ犬猫鷄鴿等ハ飼主ニ於テ放飼セサルコト

第二十五項　傳染病ニ罹リテ斃死シ又ハ撲殺シタル獸類ノ死體排泄物ハ勿論其他該畜ノ爲メニ使用シタル畜舍、欄廐、貨車、糞窖、塵

溜、器具等ニハ消毒法ヲ施スコト

第二十六項　傳染病畜ノ看護者ハ勿論其患畜ニ觸レタルモノニハ消毒法ヲ施スコト

第二十七項　患畜舍ハ熱湯或ハ灰汁ヲ以テ洗ヒ石灰水或ハ粗製石炭酸水ヲ灌キ窓戸ヲ密閉シテ亞硫酸瓦斯ノ薫蒸法ヲ施シ次テ窓戸ヲ開放シ大氣ヲ通シ日光ニ曝スコト

第二十八項　患畜ノ糞ハ燒棄或ハ消毒藥ヲ灌キテ深ク地中ニ埋メ尿窖ニハ石灰ヲ撒布スルコト

第二十九項　患畜ニ觸レタル飼槽、勾架、被覆（獸類ニ用ヒタルモノ）及其他ノ器具ハ燒棄ツルヲ良トス但鐵製ノ器具ハ火熱ヲ加ヘタル後用フルモ妨ナキコト

第三十項　患畜若クハ死體ヲ取扱ヒ又ハ消毒法施行ニ從事セシ者ニシテ止ムコトヲ得ス他行スヘキ場合ニ於テハ其身ニ消毒法ヲ施シタル後ニアラサレハ他行セサルコト

第三十一項　患畜若クハ死體ヲ取扱ヒ又ハ消毒法施行ニ從事セシ者ノ衣服ハ成ルヘク燒棄ツルヲ良トス否サレハ其衣服ヲ石鹸水ニテ洗ヒ亞硫酸瓦斯ノ薫蒸法ヲ施シ十二時乃至二十時間消毒シテ充分大氣ニ曝スコト

第三十二項　患畜或ハ其排泄物ニ觸レタルモノ、草鞋、木履等ハ燒棄テ靴ハ石灰水ニテ洗ヒ之ニ獸脂ヲ塗リテ大氣ニ曝スコト

第三十三項　消毒藥ハ其類多シト雖モ左ニ普通ノモノヲ擧ク

第一　濃厚石炭酸水（二十五倍乃至五十倍）　畜舍、器具、死體、排泄物、糞窖、塵溜等ニ施用ス

第二　稀薄石炭酸水（六十倍乃至百倍）　畜舍、棚庭、貨車、看護者ノ衣服又ハ洗手等ニ施用ス

第三　石灰水　畜舍ノ壁床、飼槽、勾架、其他木製ノ器具等ニ施用

ス

第四　石灰　畜舍、糞害、死體等ニ施用ス

第五　亞硫酸瓦斯（硫黄ヲ燒キ發散シタル瓦斯）　畜舍内器具等ヲ薫蒸スルニ施用ス

第三十四項　獸類ノ染傳病名及其症候ハ左ノ如シ

第一　牛疫

學語　Pestis（ペスチス）　Bovina（ボウィナ）

英國語　Cattle Plague（カットル　プレーク）

佛國語　Peste（ペスト）　Bovine（ボウィス）

獨國語　Rinder Pest（リンデル　ペスト）

牛疫ハ牛族特異ノ熱性傳染病ニシテ體中各部ノ粘膜ヲ侵シ就中消化器粘膜ニ特異ノ炎症ヲ呈シ牛族ヨリ他ノ反芻獸ニ傳染スルモノナリ此病ハ害毒ノ慘劇ナル傳播ノ迅速ナル斃死ノ夥多ナル

獸類傳染病中最モ危險ノ症ナリトス

牛ノ此病ニ罹ルトキハ熱ヲ催スヲ以テ初起ノ症候トス卽體温少ク增昇シ泌乳食慾共ニ減少シ倦怠シテ頭ヲ垂レ一二日ヲ經レハ加答兒ノ症候ヲ呈シ各部ノ粘膜殊ニ紅ヲ潮シ反芻休止シ眼鼻口ヨリ液ヲ漏泄シ濕咳ヲ發シ漸々呼吸ノ數ヲ增シ三日乃至四日ヲ經過スレハ赤痢樣ノ下痢ヲ起ス口腔及陰腔ノ粘膜腫起シテ其面ニ粟粒大乃至蠶豆大ノ膿白色ノ小點ヲ發シ乾酪樣ノ滲出物之ヲ覆フ此乾酪樣ノ質ハ容易ニ剝脫シテ爛斑ヲ現シ其他粘膜ニ赤色ノ線狀若クハ斑點ヲ見ルコトアリ以上ノ症候漸次亢進スルニ從ヒ眼鼻口ノ分泌液愈增加シ呼吸益困難ヲ加ヘ下痢甚シク終ニ虛脫シテ斃ル

第二　炭疽熱

學語　Anthrax（アンスラックス）

英國語　Anthrax（アンスラックス）

佛國語		獨國語	
炭疽熱ハ急性傳染病ニシテ瘴氣毒ヨリ起リ草食獸ニ發シ又他ノ	Charbon (シャルボン)		Milzbrand (ミルツブランド)

畜類及人ニ傳染ス此病ハ俄然發スルモノ多ク其急性ナルハ動物
頓ニ卒倒シテ掣搖シ五分乃至十分時間ニシテ斃ル又途中若クハ
夜間ニ發病シ鼻口及肛門ヨリ血液ヲ漏シテ斃ルヽモノアリ或ハ
初起食慾泌乳共ニ減少シ體温增昇シ外部ノ温度定マラス戰慄テ
發シ各部ノ粘膜甚シク紅ヲ潮シ若クハ帶黃色ヲ呈シ糞ニ血液及
粘液ヲ混シ呼吸疾促脈搏增進大ニ狂亂苦悶シ往々疝痛ヲ併發シ
或ハ痴鈍トナリ或ハ感覺ヲ失フ斯ノ如キ塲合ニ於テハ一般ニ熱
勢亢進シテ衰弱ヲ加ヘ鼻口及肛門ヨリ血液ヲ漏泄シテ遂ニ斃ル
稀ニハ快復スルモノモアリ或ハ熱度增進シ皮膚ニ一箇及ク數
箇ノ腫瘍ヲ發ス其狀圓クシテ凸隆シ熱痛ヲ帶ルモ忽チ減退ス試
ミニ之ヲ壓スレハ氣音ヲ發シ之ヲ截開スレハ帶黃色ノ液ヲ漏ス

或ハ舌咽喉若クハ肛門ニモ亦之ヲ發スルコトアリ

第三　鼻疽及皮疽

學語		獨國語	
英國語	Malleus (マレウス) Glanders and Farcy (グランダース エンド ファルシー)	佛國語	Humidus et Farciminosus (ヒウミヂウス エトファルチミノゾス) Morve et Fgrcin (モルブ エ ファルサン) Rotz und Wurm (ロツツ ウンド ウルム)

鼻疽及皮疽ハ馬族特異ノ傳染病ニシテ二者同性ノ症ナレトモ只
其患部ヲ異ニシ互ニ誘發スルモノナリ卽鼻疽ハ專ラ鼻粘膜肺及
水脉系ヲ侵シ皮疽ハ皮膚皮下結締織及水脉系ヲ襲フモノニシテ
此病ハ人、羊、山羊、及其他ノ畜類ニ傳染ス
鼻疽ノ主徴ニ三アリ（其一）鼻ノ一孔若クハ両孔ヨリ少量ノ粘稠
液ヲ漏泄ス其液ハ一種特異ノ濃樣液ニシテ其狀恰モ菜種油ニ蛋
白ヲ混シタルカ如シ（其二）顎下水脉腺腫脹ヲ發シ概子下顎骨ノ

內側ニ固着シテ醸膿セス(其三)鼻粘膜ニ惡性潰瘍ヲ生ス當初ニ在テハ帶黃色ノ小膿疹若クハ小結節ナルモ增大破爛シテ潰瘍ニ變ス其瘍底ハ凹陷シテ豕脂狀ヲ呈シ少量ノ惡性膿ヲ漏ス病勢亢進スルニ從ヒ啻ニ鼻粘膜ヲ侵スノミナラス咽喉、肺、氣管支、喉嚢及ヒ頭ノ諸骨ニ波及シテ各其症候ヲ呈ス末期ニ至レハ呼吸困難ヲ加ヘ咳嗽頻發皮膚粗剛、毛色光澤ヲ失ヒ全身漸ク羸弱ス

皮疽ハ皮膚ニ局發シテ多ク四肢、頭、頸、胸、腹或ハ其他ノ部位ノ皮下ニ豌豆大乃至胡桃大ノ結節ヲ發生シ初ハ便固ニシテ且疼痛アリ然レ𪜈漸次其結節ノ中心ヨリ破潰シ黃色ノ液ヲ漏泄シ皮上ニ凝着シテ痂ヲ結ヒ而シテ其瘍面ヨリ絕ヘス膿汁ヲ漏泄ス病勢亢進スレハ腫瘍累發シテ體ノ諸部ヲ侵シ遂ニ潰爛シテ血液ヲ漏スコトアリ其他各潰瘍ニ連絡セル水脉管ハ腫起シテ索狀ヲ呈シ水脉腺亦腫脹ス而シテ久キヲ經レハ大ニ羸弱シテ遂ニ斃ル

第四　傳染性胸膜肺炎

學語　Peripneumonia（プリプニユウモニア）　Contagious（コンタギオザー）

英國語　Contagious（コンタジオース）　Pleuro-Pneumonia（プリユーロニユウモニア）

佛國語　Peripneumonie（ペリプヌーモニー）　Contagieuse（コンタジウーズ）

獨國語　Lungen（ルンゲン）　Seuche（ゾイヘ）

傳染性胸膜肺炎ハ牛族特異ノ熱性傳染病ニシテ概子左肺ノ一葉ヲ侵シ其小葉間質ノ滲出炎ヲ發シ尋イテ胸膜炎ヲ續發ス

此病ノ徵候ヲ大別シテ二期トス卽第一期ハ短渴ノ咳嗽ヲ發シ漸々其數ヲ增シ濕聲ノ痛咳頻發シテ體溫亢進ノ呼吸疾促食慾泌乳共ニ減少ノ病勢增進ス第二期ニ至レハ熱勢大ニ亢進シテ胸膜肺炎ノ諸徵尤明瞭トナリ鼻端乾燥シ耳角ノ冷熱定マラス食慾反嚼泌乳共ニ休止シ通便秘澁前肢ヲ開帳ノ起立シ臥スコトヲ欲セス鼻孔開豁シ臁部ノ波動甚シク呼吸スル每ニ呻吟ス試ミニ背腰及

肋間部ヲ壓スレハ苦悶ヲ訴ヘ病久キヲ經レハ呼吸益困難ヲ加ヘ倦怠羸痩甚シク下痢ヲ發シ呼氣臭ヲ帶ヒ漸次虛脫シテ斃ル

第五　傳染性鵝口瘡

學語	Aphthis Contagiosa
英國語	Foot and Mouth disease
佛國語	Stomatite Aphteuse
獨國語	Maul und Klauenseuche

傳染性鵝口瘡ハ瘴氣性發疹傳染病ニシテ雙蹄獸ニ發シ熱ヲ帶ヒテ口內趾端或ハ乳房等ニ水疱ヲ局發ス

此病ニ罹ルトキハ初メ發熱シ食慾反噛共ニ減少或ハ休止シ口內、趾端、乳房或ハ鼻端等ニ忽チ大小許多ノ水疱ヲ發ス該疱破潰スレハ初メ澄液ヲ漏シ後ニ至レハ溷濁シ濃樣ノ液ニ變ス或ハ口內ニ水疱ヲ發スルトキハ其粘膜剝脫シテ紅色ノ爛斑ヲ呈シ頻ニ唾液ヲ漏ス而シテ蹄間或ハ蹄冠部ヲ侵シ甚シキニ至テハ跛行トナル此病ノ經過ハ概子二周間許トス

第六　羊痘

學語	Variolg Ovina
英國語	Sheep Pox
佛國語	Clavelle
獨國語	Schaf Pocken

羊痘ハ熱性發疹傳染病ニシテ皮膚ニ痘ヲ發生シ羊族ニ蔓延シテ大ニ猖獗ヲ極メ獸類痘瘡中最危險ナルモノナリ

此病ハ初メ發熱シテ不安ノ狀ヲ呈シ食慾反噛共ニ減少シ體毛ノ稀疎ナル局部卽顏面或ハ肢脚ノ內面ニ紅斑ヲ呈シ豆大ノ痘ヲ發生シ二三日ヲ經レハ痘中ニ淋巴液ヲ釀成シ後膿化シ終ニ破爛シテ乾涸結痂シ二三周間許ニシテ脫落ス

農商務省　訓令第三號　明治二十年二月五日

明治十九年九月省令第十一號獸類傳染病豫防規則第十五條ノ届出ニハ左ノ表式ニ據リ毎週ノ調査表ヲ添フヘシ

表式（用紙美濃紙）

獸類傳染病毎週調査表　自何年何月何日　至何年何月何日　廳府縣名

獸類	内國種	外國種	雜種	年齢	發病月日	病名	斃死月日	撲殺月日	快復月日	評價金額	手當郡村名	所有主姓名
牡												
牝												
牡												
牝												
牡												
牝												

備考　○發病地、病原、病勢其他云々

○印ヘ朱書

陸軍省　達第二十三號　明治二十年二月二十一日

軍馬傳染病取扱概則別冊之通定ム

（別冊）

軍馬傳染病取扱概則

第一章　總則

第一條　本則ハ主トシテ近衛鎮臺各隊ニ於テ執行スヘキモノナリト雖トモ軍馬所属ノ官廨ニ在テモ亦之ニ準據スルモノトス

第二條　本則ニ稱スル傳染病トハ炭疽莫爾布華爾撒疥癬ノ諸病ヲ云フ

第三條　獸醫官ニ於テ軍馬ニ傳染病ノ發顯ヲ認ルトキハ直ニ豫長並ニ獸醫長ニ報告スヘシ

但疑似症ニ在テモ本條ニ準ス

第四條　隊長前條ノ報告ヲ受クルトキハ直ニ所管長官ニ申告シ所管長官ハ獸醫長ヲシテ詳細調査セシメ病勢猛烈ニシテ蔓延ノ兆アルトキハ其概況ヲ陸軍大臣ニ開申シ且近傍軍馬所属ノ各隊官廨及地

方廳ニ通知スヘシ

第五條　凡傳染病馬ノ近接ニ在ル馬匹ハ他ノ健馬ト離隔シ嚴ニ視察ヲ行フヘシ

第六條　前條視察ヲ行フ日限ハ莫爾布華爾撒ニ在テハ二十五日疥癬ニ在テハ十日炭疽ニ在テハ八日間トス

第七條　凡ソ傳染病ニ罹リ斃死若クハ撲殺シタル馬匹ノ死體ハ明治十九年農商務省令第十一號獸畜傳染病豫防規則第九條ニ據リ處分スヘシ

第八條　凡ソ傳染病（疥癬ヲ除ク）ニ罹リ斃死若クハ撲殺シタル馬匹ノ屍体ハコールタール石灰又ハ石炭酸水ニ浸セル砂ヲ用ヒ箱ニ容レ又石炭酸水ニテ潤シタル莚ヲ以テ周密ニ被包シ其運搬ニハ牛馬ヲ用ユ可ラス

第九條　凡ソ傳染病ニ罹リタル馬匹ノ排泄物並ニ飼料藁草ハ勿論病

馬ノ近接ニ在ル馬匹ノ飼料藁草ヲモ併テ燒棄スヘシ

第十條　炭疽莫爾布華爾撒ニ罹リタル病馬ヲ管理スル者ハ其症ノ輕重ヲ問ハス決シテ佗ノ健馬ニ接スヘカラス

第十一條　凡ソ傳染病流行中ハ獸醫官ハ日々健馬ノ撿査ヲ行ヒ消滅ノ後ト雖トモ一ケ月間ハ一週間ニ三回ツヽ之ヲ行フモノトス

第十二條　地方ニ於テ獸畜傳染病流行スルトキハ所管長官ハ時宜ニ由リ獸醫長若クハ隊附獸醫官ヲ派出シ其景況ヲ審査セシムルコトアルヘシ

第十三條　演習行軍等ニ際シ其地方ニ獸畜傳染病流行スルトキハ馬ヲ接近セシム可カラス

第十四條　行軍又ハ露營ニ於テ炭疽莫爾布華爾撒ヲ發シタルトキハ獸畜傳染病豫防規則第十一條ニ據リ處分シ若シ斃死又ハ重症ニシテ回復ノ見込ナク撲殺シタルトキハ第八條ノ消毒法ヲ施シタル後

第七條ニ依リ處分スヘシ

第十五條　地方ニ於テ炭疽流行スルトキハ該地方ヨリ飼料其他馬匹ニ用フヘキ物品ヲ購入ス可カラス

第十六條　地方ニ於テ炭疽流行スルトキ該地ヲ經過シ來ル馬匹ハ消毒法施行ノ後ニ非サレハ廐内ニ牽入可ラス但消毒ノ方法ハ獸醫官ニ於テ臨時之レヲ定ムヘシ

第二章　豫防法

其一　炭疽莫爾布華爾撒ノ豫防

第十七條　炭疽發顯シタル時ハ該病馬ノミ同廐内ニ繫置キ而シテ此レト居ヲ同フシタル馬匹ハ皆悉ク疑似症ト見做シ他所ニ移シテ嚴ニ視察スヘシ

第十八條　該病馬ヲ繫留スル廐ハ密閉シ獸醫官及管理者ノ外ハ濫ニ出入スヘカラス

第十九條　炭疽ニ罹リタル病馬ニ使用シタル器具ハ悉皆燒棄シ其旨獸醫官ヨリ隊長ニ報告シ隊長ハ所管長官ニ申告スヘシ

第二條　莫爾布ノ兆候顯然タルモノ及華爾撒ニ罹リ重症ナルモノハ獸醫官ノ申告ニ依リ隊長撲殺ヲ命シ其旨ヲ所管長官ニ申報スヘシ

第二十一條　疑似症莫爾布若クハ輕症華爾撒ニ罹ルモノハ速ニ別廐ニ移シ治療ヲ加ヘ全治ニ至ルト雖トモ尚三週間別廐ニ於テ視察ヲ行ヒ再發セサルトキハ本廐ニ率戻ス可シ

第二十二條　莫爾布華爾撒ノ病馬ニ使用シタル器具ハ獸醫官ニ於テ燒棄スヘキモノトヲ再用スヘキモノトヲ區分シ燒棄スヘキモノハ第十九條ニ據リ處分スヘシ

第二十三條　傳染病馬ヲ管理セシムルニハ體質虛弱ナル者面部手部ニ創傷アル者ヲ使用ス可カラス且其管理者ハ必ス靴ヲ穿ツヘシ